# 認知言語学の観点から見た

# 日本語の文法化現象

## ―「テシマウ」形式を中心に―

張　又　華

目次

第１章　序章……1
1.1　本研究の目的……1
1.2　本論文の構成……2

第２章　「テシマウ」形式に関する先行研究……4
2．1　意味・用法の記述……4
2．1．1　金田一（1955）……4
2．1．2　高橋（1969）……5
2．1．3　吉川（1973）……5
2．2　感情・評価的意味の派生に関わる研究……7
2．2．1　寺村（1984）……7
2．2．2　鈴木（1998）……8
2．2．3　金水（2000）……11
2．2．4　田村（2013）……13
2．3　意味･機能変化の観点から見た研究……15
2．3．1　Ono（1992）……15
2．3．2　梁井（2009）……16
2．4　先行研究の問題点……19

第３章　認知言語学の枠組み……22
3．1　図と地の分化と反転……22
3．2　ベースとプロファイル……25
3．3　プロトタイプ……29
3．4　文法化と意味変化……32

第４章　「テシマウ」の意味・用法：認知言語学からの記述と再検討……37

4. 1　前接事態の時間的特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
4. 1. 1　perfective verb と imperfective verb・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
4. 1. 2　imperfective verb の状態性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
4. 1. 3　perfective verb の限界性について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
4. 1. 3. 1　限界動詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
4. 1. 3. 2　非限界動詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
4. 2　「テシマウ」形式の表す意味・用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
4. 2. 1　「テシマウ」形式の意味・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
4. 2. 2　＜終了限界の達成＞に解釈される条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
4. 2. 3　＜開始限界の達成＞に解釈される条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
4. 2. 4　＜限界達成＞に解釈される条件・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
4. 3　＜限界達成の強調＞に誘発された主観的評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
4. 3. 1　ニュートラル（時間的側面に焦点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
4. 3. 2　正の主観的評価（解決、思い切って）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
4. 3. 3　負の主観的評価（残念、がっかり、後悔、不都合）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
4. 4　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

第５章　日本語における事態の＜終わり＞を表す文法形式・・・・・・・・・・・・・・・・78
5. 1　日本語におけるアスペクト形式の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
5. 1. 1　アスペクトを表す形式に見られる階層性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
5. 1. 2　＜完了＞の意味について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
5. 2　各形式における前接事態の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
5. 2. 1　複合動詞形式「－オワル・オエル」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
5. 2. 2　補助動詞形式「テシマウ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
5. 2. 3　助動詞形式「スル」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
5. 2. 4　それぞれ意味する＜終わり＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
5. 3　＜終わり＞を表す形式のすみわけ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
5. 3. 1　単一（一回の）行為・事態の＜終わり＞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

5. 3. 2　一連の行為・事態からなる事態の＜終わり＞……101
5. 3. 3　繰り返される行為・事態からなる事態の＜終わり＞……106
5. 4　おわりに……108

第６章　本動詞「しまう」から補助動詞へのプロセス……110
6. 1　本動詞の意味拡張……112
6. 1. 1　＜空間＞から＜時間＞へ……112
6. 1. 2　時間的用法への拡張の動機付け……115
6. 2　本動詞から補助動詞への拡張……116
6. 2. 1　＜移動＞……117
6. 2. 2　アスペクト的意味－＜完了＞の獲得……118
6. 2. 3　アスペクト的意味－部分的＜完了＞の獲得……120
6. 3　主観的評価の派生について……125
6. 3. 1　完了・実現性に根差す主観的評価……125
6. 3. 2　主観的評価と事態に対する話者の持つ前提的な期待値との関わり……127
6. 3. 2. 1　事態実現の難易と主観的評価の派生……129
6. 3. 2. 2　事態実現のコントロール性と主観的評価の派生……131
6. 3. 2. 3　話者の期待と主観的評価の派生……135
6. 3. 2. 4　話者の予想と主観的評価の派生……137
6. 3. 3　文法化に見られる意味の主観化……141
6. 4　おわりに……141

第７章　終章……143

参考文献……148

# 第１章　序章

「テシマウ」形式はアスペクト的意味を表しながら話者の感情評価が添えられる表現である。「テシマウ」形式が用いられた表現には、常に話者の主観的評価が添えられるため、主観的アスペクト形式と考えられる。この観点から「テシマウ」形式の表す意味・用法を体系的に記述することが求められている。また、日本語アスペクト形式においては、文法化の度合いによって、「スル」形式（一次的形式）、「テシマウ」形式（二次的形式）、「－オワル・オエル」形式（三次的形式）に分けられている（寺村 1984）。三つの形式とも広い意味での＜完了＞を表すことができるが、意味的にはそれぞれ特徴づけられているため、それぞれが表す＜完了＞を明らかにする必要がある。さらに、Traugott and König（1991）が指摘している意味変化の傾向によれば、「テシマウ」形式は動詞「仕舞う」から文法的意味を獲得し、話者の信条や態度を表す表現へ発展したと考えられる。この発展プロセスは、通時的な観点からの考察によって支持されるが（梁井 2009）、共時的な観点からの考察が欠けている。

本論文は、以上で指摘した点を解明するため、認知言語学の観点から日本語アスペクト形式「テシマウ」を見直していく。

## １．１　本研究の目的

本研究の目的は次の通りである。

第一に、「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞に基づき、「テシマウ」形式で表される意味・用法の体系的記述を行う。アスペクト的意味の記述に関しては、認知文法の観点から日本語における perfective verb の限界性を再考する上で、それぞれ異なった限界性を有する perfective verb に付く「テシマウ」形式で表されるアスペクト的意味を記述する。主観的評価の記述に関しては、＜限界達成＞に根差しており、話者の持つ前提的な期待値との関わりから考察する。

第二に、＜終わり＞というアスペクト的意味において、「テシマウ」形式は、「スル」形式と類似しているところもあれば（金水 2000)、「ーオワル・オエル」形式と類似しているところもある（寺村 1984)。文的要素や文脈的条件が揃えば、三つの形式とも＜終わり＞が表わされるが、それぞれ意味する＜終わり＞は異なっているはずである。このように、認知言語学的観点から三つの文法形式の意味する＜終わり＞がどのように異なっているかを明らかにする上で、「テシマウ」形式に注目し、特徴付けていく。

第三に、認知言語学的観点から「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞の獲得プロセスを考察する。「テシマウ」形式は動詞「しまう」から文法化した形式だと考えられているが（Ono 1992）[1]、当該形式の意味する＜限界達成＞はどのような段階を経て獲得されたかは明らかにされていない。また、主観的評価も動詞「仕舞う」の語彙的意味に由来すると考えられているが[2]、負の感情評価を始め、正の感情評価、比較的にニュートラルの評価という様々な主観的評価の包括的な説明にはならない。本論文では、このように「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞の獲得プロセスを明らかにすることを目的とする。

## １．２　本論文の構成

本研究は七章から成り立っている。

第二章では、先行研究を意味・用法の記述、形式的な観点から見る研究、意味・機能変化の観点から見る研究に分けてまとめる。先行研究の検討を踏まえて、問題点や不備を指摘する。

第三章では、認知言語学の枠組みを概観し、図と地の分化をはじめ、ベースとプロファイルのプロセス、プロトタイプなど本論文で援用する道具立てを取り上げる。

第四章では、認知文法の観点から日本語の動詞における perfective verb の限界性を検討した上で、「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞に基づき、アスペクト的意味と主観的評価に分けて「テシマウ」形式の表す意味・用法の記述

[1] Ono (1992) で言及している動詞「しまう」の文法化した用法＜perfect＞は、語彙的意味 “emphasize the end point of the event”が受け継がれていると考えられているため、＜実現＞ではなく＜完了＞に相当する。

[2] Ono (1992) で言及している感情評価は＜frustrarive＞と＜non-volitional＞であるが、実際の例では、それ以外に様々な感情評価が観察されてい　る。また、＜non-volitional＞は＜限界達成＞によって副次的に生じる用法であるか、＜frustrarive＞に由来するかはまた論ずる余地がある。

を行う。アスペクト的意味に見られる＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、＜限界達成＞それぞれに読み取れる場合や、主観的評価に見られる比較的ニュートラルな評価（時間の側面が前景化した用法）、正の感情評価、負の感情評価それぞれに読み取れる場合を明らかにし、「テシマウ」形式の表す意味・用法の記述を行う。

第五章では、語彙と文法形式との中間位置にある「テシマウ」形式を、「ーオワル・オエル」形式と「スル」形式のそれぞれとともに持つ＜終わり＞の意味と比較し、特徴付ける。三つの形式が＜終わり＞を意味する場合、事態の終わりがプロファイルされているが、ベースのあり方の違いによってそれぞれ意味する＜終わり＞の違いを明らかにする。

第六章では、「テシマウ」形式の経た２つのプロセス、つまり、動詞「しまう」の語彙的意味＜到達点＞・＜達成点＞指向の意味が受け継がれており、最初の＜達成点＞が運動の＜終わり＞に相当するため、文法的意味＜完了＞を獲得するプロセス、そして語彙的意味が受け継がれている＜達成点＞解釈の拡張につれ、部分的＜完了＞（＜達成点＞が運動の部分的＜終わり＞）、＜開始＞（＜達成点＞が運動の＜始まり＞）、＜実現＞（＜達成点＞が運動の漠然とした＜始まり＞）という順で意味を獲得するプロセスを明らかにする。そして、「テシマウ」形式の表す様々な主観的評価は、＜限界達成の強調＞に根差しており、話者の持つ前提的な期待値との関わりで主観化の方向へ変化する傾向を検討する。

第七章では、結論と各方面への提案や提言を行う。

# 第２章　「テシマウ」形式に関する先行研究

「テシマウ」形式の表す意味・用法の記述としては、金田一（1955）、高橋（1969）、吉川（1973）が挙げられる。これらの意味・用法の記述は、大まかにアスペクト的意味と感情評価的意味に分けることができる。しかし、「テシマウ」形式が使われた表現は、完了や実現する事態に＜残念＞といった負の感情評価的意味をはじめ、＜思いっきり・解決＞、＜驚き＞などといった正の感情評価的意味が添えられているため、はっきりと分けることができるように見えるが、実際には相互に存在し合う関係となっている。感情評価的意味の派生に関しては、感情評価的意味がアスペクト的意味の含意によってもたらされたという観点から見た寺村（1984）、金水（2000）、田村（2013）の研究を概観する。話者の持つ前提によってもたらされたという研究として鈴木（1998）を概観する。また、意味・機能変化の観点から見た研究として Ono（1992）、梁井（2009）を概観する。

## ２．１　意味・用法の記述

この節では、「テシマウ」形式の表す意味・用法の記述として金田一（1955）、高橋（1969）、吉川（1973）を概観する。

### ２．１．１　金田一（1955）

金田一（1955）では、「―てしまう」は、終結態と既現態との二つの態があり、終結態は継続動詞に現れ、既現態は瞬間動詞に現れると記述されている。

①終結態：ある動作・作用が完全に行われる。完了するという意味を持つ。

（1）一冊の本を五分で読んでしまう。

（2）私は原稿を書いてしまった。　（金田一 1955: 48）

②既現態：その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる。その動作・作用が実現する。「本当に行なわれる」という意味であるから、裏には「もとに返る望みはない」とか「残念だ」とかという意味が宿ることが多い。

(3) 死んでしまう。

(4) 電気が消えてしまう。　（金田一 1955: 49）

### ２．１．２　高橋（1969）

高橋（1969）では、金田一（1955）の記述した＜完了＞、＜実現＞用法に＜期待外＞という用法を追加し、「してしまう」には三つの用法があると記述されている。

①終了：うごきがおわりまでおこなわれることをあらわす。（①主体または対象に変化を生じる結果動詞、②進行性の継続動詞は、動きの量や位置が決っているばあいに、この意味が実現する、③くりかえし動作がぜんぶおわるばあい）

(5) 二郎君はもうべんとうをたべてしまいました。　（高橋 1969: 131）

②実現：過程のおわりとしておこなわれる動作が実現する。

(6)....風がまったくやんでしまった。　（高橋 1969: 131）

③期待外：予期しなかったこと、よくないことが実現することを表す。

(7) かれはおもわずわらいだしてしまった。　（高橋 1969: 132）

### ２．１．３　吉川（1973）

吉川（1973）では、高橋（1969）よりさらに詳しく分類され、「～てしまう」は次のように五つの用法があると記述されている。その上で、それぞれで用いられた前項動詞の意味特徴の分析も行われている。

①ある過程を持つ動作がおしまいまで行なわれることをあらわす「してしまう」（過程を表す動詞に付く、“三つとも”、“何もかも”等全過程を表す語をとる）この用

法は、金田一（1955）と高橋（1969）に相当する。

（8）ピノキオ、なしを三つとも食べてしまうと、「もう、なんにもないの。」とききました。（吉川 1973: 234）

②積極的に動作に取り組み、これをかたづけることをあらわす「してしまう」（一連の動作の最後の段階が行われることをあらわす）。ほとんど他動詞から作られるという特徴がある。

（9）ほかの魚が知らずに近づいていくと、いきなり電気を出してしびれさせ、その魚をとって食べてしまうのです。（吉川 1973: 236）

③ある動作・用法が行われた結果の取り返しがつかないという気持ちをあらわす「してしまう」

アスペクト的には、②と同じであるが、話者の気持ちを表している点で、②と異なる。この場合に、人の意志的な動作よりも非情物のうごきである作用が問題になることが多い。人の意志的な動作でも、話し手の意志によってコントロールできない動作の場合に、この用法になると述べられている。（この用法は、金田一（1955）の既現態に相当すると考えられる。）

（10）この絵は、かみの毛と衣服に、細かく切った鳥の毛がはられていたものだそうですが、今は、それが、ほとんど取れてしまいました。

（吉川 1973: 241）

（11）ネルロは、それだけ言うと、雪の中を走っていってしまいました。

（吉川 1973: 240）

④動作が無意志的に行われることをあらわす「してしまう」

この意味に読み取るには、二つの場合に分けられる。一つは、動詞自身が無意志的動作を表す動詞に「てしまう」が付く場合、もう一つは、動詞自身が意志的動作を表す動詞に「てしまう」が付いて、それを無意志的動作とする場合である。

（12）たて糸とよこ糸がしっくりと組み合わされて、軽い音をたてながら、ぬのが織り出されていくのを見て、人々は驚いてしまった。

（吉川 1973: 245）

（13）ぼくは、えんがわで妹とふざけているうちに、ばけつをひっくり返してしまった。（吉川 1973: 244）

⑤不都合なこと、期待に反したことが行われることをあらわす「してしまう」

高橋（1969）の＜予期外＞に相当する。

（14）四度目は、またとんでもない方向に飛んでしまう。（吉川 1973: 249）

以上の意味用法の記述から、「～てしまう」の用法は大まかにアスペクト的用法と感情評価的用法に分けることができる。しかし、アスペクト的用法＜完了＞と＜実現＞の意味的関連性が見られず、またアスペクト的用法と感情評価的用法との関連性も見られない。

## ２．２　感情評価的意味の派生に関わる研究

この節では、「テシマウ」形式の表す感情・評価的意味の派生に関わる研究として寺村（1984）、鈴木（1998）、金水（2000）、田村（2013）を概観する。

### ２．２．１　寺村（1984）

寺村（1984）では「～テシマウ」の用法について、行為・動作、できごとが完了したことを特に強調する表現であると述べられている。時間的継続のある事態について＜完了＞に読み取れるのに対し、時間的継続のない事態について＜完了＞に読み取れず、「その事態が起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできない」という心理を表すことになると指摘されている。事態が話者の意志で実現・非実現が可能なことなのに、意識よりはやく身体が動いたというような状況、ただちに事態を実現させようとする状況に用いられる。

寺村（1984）を踏まえて、次のように指摘しておきたい。

寺村（1984）が「～テシマウ」を行為・動作、出来事が完了したことを特に強調する表現として位置づけているのは評価できる。この意味の設定により、「スル」形式との違いが示される。ただし、動詞の時間的特徴（時間的幅）によって＜完了＞（アスペクト的用法）と＜その事が起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできない＞（感情評価的用法）が区別されるというのは問題である。＜完了＞に読み取れる事態でも＜もう取り返しのつかない＞に読み取れる場合がある。逆に＜完了＞に読み取れず、事態の実現という意味が表されても、＜もう取り返しのつかない＞に読み取れない場合もある。感情評価的用法がどのように派生するかについては論じられていない。

### ２．２．２　鈴木（1998）

鈴木（1998）では、「テシマウ」形式は、話者の事態に対する感情・評価的な判断・態度を表す形式であると位置づけられている。「テシマウ」形式の内在的意味は、「実現」に「望ましくない」と「実現しにくい」という話者の持つ前提から成り立っているとされる。「実現」の意味に関しては、ふつう状態を表す動詞は「テシマウ」形式と共起できないが、状態を表す動詞が「その状態が実現する」ということを表す場合、「テシマウ」形式と共起できるため、事態の実現がその内在的意味だと見なされている。

（15）*山がそびえてシマウ。

（16）*彼だけがあんなにすぐれてシマウ。

（17）（花子が小さい頃から泳ぎが得意である場合）
?花子は泳げてシマウ。

（18）（花子が、練習してみてもなかなか泳げないという状況で）
スパルタ式のあのスイミングスクールに通えば、花子は一週間で泳げてシマウよ。

（19）（違う世界に生きているものだから）僕と太郎は考え方が違ってシマウ。

（20）（窓の外にゴミ捨て場があるので、気をつけないとすぐ）この部屋はへんな臭いがしてシマウ。　（鈴木 1998: 52-53）

話者の持つ前提に関しては、話者が事態を「望ましくない」ととらえているか、または「実現しにくい」ととらえていることはモダリティ形式をとっても影響を受けないため、前提が当該形式の意味として入っていると見なされている。

（21）そのとれたボタン、なくすと代わりがないからどこかへやってシマワないように気をつけて。（望ましくない）

（22）きのう貸したばかりの本もう全部読んでシマッタ？（実現しにくい）

（23）このままでは政府に対し不信感を持つ人が多くなってシマウだろう。（望ましくない）

（24）私は 1970 年にこの地に移り住んだ。そんなに長くいるつもりはなかったのに 25 年も経ってシマッタわけだ。（実現しにくい）

（鈴木 1998: 54）

また、話者が事態を「望ましくない」ととらえているか、または「実現しにくい」ととらえているか、少なくとも一方が満たされなければならない。

（25）（ええっ?そんな）ルイスが勝ってシマッタ。（「ルイスが勝つ」という事態を望ましくない、かつ実現しにくいととらえている。）

（26）（あ～あ）ルイスが勝ってシマッタ。（望ましくない、しかし実現するととらえている。）

（27）（やった！まさかと思ってたけど）ルイスが勝ってシマッタ。（望ましい、しかし、実現しにくいととらえている。）

（28）（あれ?）ルイスが勝ってシマッタ。（実現しにくいととらえているが、望ましさに関しては念頭にない）

（29）*うれしいことに、今年も思った通り巨人が優勝してシマッタ。

（30）*よし！予想通り合格してシマッタぞ。

（鈴木 1998: 54）

このような「テシマウ」形式の表されるアスペクト的意味に関しては、前接事態の時間的特徴との関わりで、終結点のない事態であれば＜実現＞に解釈されるが、終結点のある事態であれば＜終結＞に解釈されるという。

（31）＜実現＞に読み取れる「テシマウ」

a. ビールはだめだけど、ワインならいくらでも飲めてシマウ。

b. あの喫茶店は落ち着けるからコーヒー１杯で何時間でもいてシマウ。

c. そんなむずかしい選択を迫られると悩んでシマウ。

d. 新しい机がうれしいものだから、毎日勉強してシマウ。（鈴木 1998: 55）

（32）＜終結＞に読み取れる「テシマウ」

a. 旅行に行っている間えさをやらなかったら、カナリアが死んでシマウかもしれない。

b. 受験直前に本を１冊大急ぎで勉強してシマウ。

c. 遊びに行く前に、先に勉強してシマオウ。（鈴木 1998: 52-55）

つまり、＜終結＞というアスペクト的意味は「テシマウ」形式の内在的意味として固有に担うものではないことだと考えられている。

一方、「テシマウ」形式で表される話者の感情・評価は、「話者が事態を望ましくないととらえているか、または実現しにくいととらえている」という内在的意味より、慣用的な推論によって派生されると考えられている。

（33）花子が太郎と結婚してシマッタ。

（花子が太郎と結婚するという事態を望ましくないととらえている場合にそれが実現する）―（＊）→もはや元に戻せず残念だ。

（花子が太郎と結婚するという事態を実現しにくいととらえている場合にそれが実現する）―（＊）→予想外のことで驚いた。

（鈴木 1998: 56）

鈴木（1998）の研究は次のようにまとめることができる。第一に、「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味に関しては、事態の時間的幅より終結点の有無に影響されることを示している。終結点のない事態に付いていれば＜実現＞に、終結点のある事態についていれば＜終結＞に解釈される。第二に、状態を表す動詞でもその状態が実現するということが表される場合に、「テシマウ」形式と矛盾なく共起できるということは、時間的プロセスのある事態として捉えられれば、「テシマウ」形式が接続可能であることを示している。第三に、話者の感情・評価的意味の派生に関しては、その派生の元は当該形式に内在する「前提」だと考えられている。

鈴木（1998）を踏まえた上で、次のように指摘しておきたい。アスペクト的意味においては、「テシマウ」形式の持つ意味は、＜終結＞と＜実現＞両方ではなく、＜実現＞という一つの意味に帰してよいという指摘、また、感情・評価的意味の派生においては、事態の実現に添えられた話者の感情・評価的意味の派生は、「テシマウ」形式に内在する「望ましくない」と「実現しにくい」という前提を元に慣用的な推論によってもたらされたと説明している点は評価できる。これらにより、「テシマウ」形式の意味が簡潔に説明できるように思われる。しかし、「テシマウ」形式が使われた場合、＜残念＞という評価をはじめ、＜思い切り＞、＜解決＞などといった様々な感情・評価的意味が表されるので、これら二つの前提に帰してよいのであろうかという点が疑問に思われる。また、感情評価的意味の派生は、「テシマウ」形式の基本的意味である＜実現＞とどのように関り合うのかについては論じられていない。感情評価的意味の派生は、事態に対する話者の持つ前提と関わるのが確かであろうが、2 つの前提が特定される妥当性、そしてその前提が何によって表出されるかについては、さらに論ずる余地があると思われる。

### ２．２．３　金水（2000）

金水（2000）は、例（34）で示している対立から、「テシマウ」形式を「スル」形式の表す限界達成をさらに前景化した表現として位置づけている。

（34）　a. 田中さんは夕食を<u>作っている</u>。＜進行＞

b. 田中さんは夕食を作ってしまっている。＜パーフェクト相現在＞

（金水 2000: 67-68）

また、終了限界の持つ限界動詞に付くと＜終了限界の達成＞に解釈されるのに対し（例（35））、終了限界のない非限界動詞に付くと＜終了限界の達成＞、或いは＜開始限界の達成＞に解釈されると説明している（例（36））。

（35）りんごを一度に五個食べてしまった≒りんごを一度に五個食べた。

（36）（子供が月見だんごをつまみ食いするのを陰で見ていて）

あ、食べちゃった≒あ、食べた（どちらも、まだ食べ続けていてよい）

（金水 2000: 67）

一方で、評価的意味の派生に関しては、ある出来事の達成という局面が強調されるため、もう後戻りできないという含意を生じさせると指摘している。また、どのような評価的意味が加わるかは、法則的に決定できず、文脈に依存すると指摘されている。

金水（2000）を踏まえた上で、次のように指摘しておきたい。「テシマウ」形式の意味を前景化した限界達成（限界達成の強調）として、「スル」形式との時間的側面における相違を示している点は評価できる。そして、「テシマウ」形式の表す限界達成の強調は、評価的意味が生じる元であるということで、「テシマウ」形式の使われている表現に「スル」形式と主観性における違いが現れることについても説明が付くと思われる。ただし、表されるアスペクト的意味については、まだ論ずる余地がある。限界動詞と非限界動詞は、運動動詞の下位分類となり、それだけを対象にすれば、動的な事態を表さない動詞「ある」、可能動詞などの静態動詞のような限界性の範疇から外されたものにも「テシマウ」形式が接続するという現象は説明できない。また、運動動詞でも「倒れる」のような限界性がはっきりとするものもあれば、「悩む」、「疲れる」のような限界性がはっきりとしていないものもある。このことから、「テシマウ」形式の表されるアスペクト的意味を明らかにするために、運動動詞の限界性を再考する必要がある。そして、限界達成の強調という意味が、様々な感情評価の派生とどのように関わっているか

も明らかにせねばならない。

### ２．２．４　田村（2013）

田村（2013）は、「テシマウ」形式と英語の Get 受動文を例に、両形式が表される情的情報は、そのアスペクト的性質に因むと考えられている。両形式に共有されるアスペクト的性質は、動的事態に付くこと（例（37）～（40））、瞬時的な事態として解釈されること（例（41）～（44））、表されるアスペクト的意味が記述される動的事態の性質によって決まる（例（45）～（48））というものである。

（37）　a. 思わず、弱音を吐いてしまった。

b. 昔の町並みとはすっかり変わってしまった。

（38）　a. *彼の自転車は体育館の裏にあってしまった。

b. *たくさんのお金が要ってしまう。

（39）　a. Mary got scolded for being late.

b. The camera got broken when he dropped it.

（40）　a. *Charlie Chaplin got loved by millions.

b. *He got known as the father of linguistics.

（41）　a. *次第に雨が降ってしまった。

b.?街の灯りも、{少しずつ/だんだん} 消えてしまった。

（42）　a. あれだけの虫害を一瞬のうちに殺してしまった。

b. あっと言う間にたいらげしてしまうよ。

c. 座った途端に眠くなってしまった。

（43）　a.??Our house got gradually built.

b.??The water got added little {by little /by degrees } into the tank.

（44）　a. They'll get caught in a moment.

b. His hand got cured in a blink.

（45）　a. その湿った丸太は燃やしても、燃えなかった。　　（影山 1996: 288）

b. ?? その湿った丸太は燃やしてしまっても、燃えなかった。

（46） a. お父さんは起こしても、起きなかった。

b. ??お父さんは起こしてしまっても、起きなかった。

（47） a. 力一杯書いても、書けないかもしれない。

b. ?? 力一杯書いてしまっても、書けないかもしれない。

（48） a. *At the last moment*, the criminal got fired in the head.

b. I'm glad this *finally* got cleared up.

c. They would have got transferred to Tunis *eventually*.

以上の特徴は、次のようにまとめられている。

（49）補助動詞「テシマウ」と Get 受動文は、行為や状態変化といった動的事態を瞬時的なものとして提示するとともに、その事態の発生に強い焦点を当てる形式である。（田村 2013: 7）

このような「瞬時性」と「事態の発生の焦点化」が情的情報を伝達するための重要な基盤だと考えられている。「瞬時性」は話者の事態に対する無意志性と密接な繋がりがあり、文脈次第で「予想外の喜び・驚き」という肯定的な情的情報が伝達される。「事態の発生の焦点化」は「不可逆性」が含意されるため、「失望」や「後悔」、「残念」などといった否定的な情的情報が伝達されると分析されている。

田村（2013）を踏まえて、次のように指摘しておきたい。英語の Get 受動文との共同アスペクト的性質からの分析を通し、感情評価の派生がアスペクト的意味に基づくという論点は評価できる。ただし、「瞬時性」という特徴は「事態の発生の焦点化」の副次的なものだと考えられるので、「テシマウ」形式の意味は、金水（2000）が述べている**限界達成の強調**というものに帰してよいと思われる。また、話者の感情評価の派生は、アスペクト的性質に基づくと主張しているが、派生元を一つの要因のみに帰するのは、簡略的すぎるように思われる。「テシマウ」形式の表す感情評価は、「予想外の喜び・驚き」や「失望」、「残念」などのほかに、「解決」や「思い切り」など様々あるため、感

情評価の産出元についてさらに詳しく論ずる必要がある。

## ２．３　意味・機能変化の観点から見た研究

この節では、通時的な意味変化・機能変化の面から「テシマウ」形式を扱う研究として Ono（1992）、梁井（2009）を概観する。

### ２．３．１　Ono（1992）

Ono（1992）は、文法化の観点から perfect を表す「おく」と「しまう」の補助動詞としての意味用法の検討をしている。

perfect という意味用法に関しては、「おく」は “denotes the resultant state” という意味が、「しまう」は “emphasizes the end point of the event” という語彙的意味が受け継がれているため、過去形「タ」が使われた表現と異なっているという。また、事態の実現時間と発話時間においても、語彙的意味が受け継がれて、「おく」の表す perfect は事態の実現時間が発話時間と離れているのに対し、「しまう」の表す perfect は事態の実現時間と密接しているという。

preparative/purpose and frustrative という意味用法に関しては、「おく」は “something which has been put down, one still has easy access to it” という含意が preparative に拡張されるのに対し、「しまう」は “difficult access to the thing put away after the action” という含意が frustrative に貢献すると考えられている。拡張の方向に関しては、「おく」は preparative から perfect へ、「しまう」は perfect から frustrative へと考えられている。

volitional and non-volitional/evidential という意味用法に関しては、「おく」は何らかのために事前に行為を行なうという場合に用いられるので、普通意志的事態に用いられるのに対して、「しまう」はよく非意志的事態に用いられるが、話者の行う非意志的行為に限って非意志的意味に解釈され、話者が動作主でない場合、非意志的意味に解釈されず、行われる事態に対する話者の感情評価（frustrative）にしか読み取れない。non-volitional に読み取れる場合は frustrative が含まれているため、frustrative から non-volitional へという拡張ルートが考えられている。

Ono（1992）を踏まえて、次のように指摘しておきたい。文法化からの観点は、「し

まう」の補助動詞としての意味用法の獲得と他の形式の表す perfect との異なりを示している点で評価できる。ただし、動詞「しまう」の語彙的意味 “to put (something) away/ finish”が文法化した用法とどこまで関わっているかが疑問である。また、Ono（1992）は二つの意味を “emphasizes the end point of the event”に設定しているが、 “to put (something) away”と “to finish” からどのようにして “emphasizes the end point of the event”が獲得されたのかについて説明されていない。そして、perfect、frustrative、non-volitional という用法が文法化した用法（grammaticized uses）としてまとめられているが、語彙的意味 “emphasizes the end point of the event”と密接に関係しているのは perfect という用法であり、frustrative と non-volitional は perfect に基づいて派生するので、perfect の用法は文法化した用法と見なすべきではないかという点も指摘できる。pefect が様々な話者の持つ前提的な期待値と共に用いられることで、主観的評価が表されるようになると考えられるため、後に獲得した主観的意味と区別したほうがよいと思われる。

このように、動詞「しまう」の語彙的意味がどのように抽象化して文法的意味を獲得するか、また語彙的意味がどのように希薄化して機能拡張するかに対して、体系的な説明が求められる。

### ２．３．２　梁井（2009）

梁井（2009）は、通時的考察を通し、意味機能拡張の観点から「テシマウ」形式の意味機能拡張のプロセスを明らかにしている。梁井（2009）の研究によれば、「テシマウ」形式は典型的な運動動詞（限界動詞/非限界動詞）に後接し、事態の終了限界の達成を表していたが、内的情態動詞、静態動詞の順に使用領域を拡大しながら意味的に抽象化し、事態の限界達成を表す標識へと変化したと述べられている。ここから「テシマウ」形式の原初的な機能は＜終了限界の達成＞だと考えられる。

【表１　前接動詞別用例数（江戸～現代）（梁井 2009: 22）】

| 資料 | 成立年 | 運動動詞 | | | 静態動詞 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 限界 | 非限界 | 内的情態 | | |
| 洒落本 | 1770－98 | 11 | 2 | 0 | 0 | 13 |
| 浮世風呂 | 1809－13 | 12 | 3 | 0 | 0 | 15 |
| 浮世床 | 1813－14 | 3 | 2 | 0 | 0 | 5 |
| 八笑人 | 1820－34 | 8 | 6 | 0 | 0 | 14 |
| 春色梅児 | 1832－33 | 10 | 1 | 0 | 0 | 11 |
| 春色辰巳 | 1833－35 | 26 | 3 | 1 | 0 | 30 |
| 七偏人 | 1857－63 | 53 | 12 | 2 | 0 | 67 |
| 安愚楽鍋 | 1871－72 | 15 | 2 | 2 | 0 | 19 |
| 牡丹燈籠 | 1884 | 68 | 11 | 2 | 0 | 81 |
| 塩原多助 | 1885 | 69 | 8 | 0 | 0 | 77 |
| 累ヶ淵 | 1888 | 107 | 21 | 7 | 0 | 135 |
| 浮雲 | 1887－89 | 91 | 29 | 13 | 0 | 133 |
| 金色夜叉 | 1897－1905 | 100 | 13 | 18 | 0 | 131 |
| 吾輩 | 1905 | 118 | 31 | 13 | 0 | 162 |
| 青年 | 1910 | 93 | 18 | 2 | 0 | 113 |
| 戦前シナリオ | 1919－1942 | 185 | 44 | 39 | 2 | 270 |
| 現代シナリオ | 1992－2001 | 923 | 215 | 175 | 13 | 1326 |

一方、マイナスの感情・評価的意味に関しては、話者が動作主と一致しない場合に限って生じていたが、「テシマウ」相当形式に焼き付けられて、それ以外の場合（話者が動作主と一致する場合）にも生じるようになっていたということが観察されている。つまり、話者が自分以外の人の行為に対してマイナスの評価的意味が生じていたが、次第に自分の行為に対してもマイナスの評価的意味が生じるようになるという機能拡大プロセスを明らかにしている。

【表 2　感情・評価的意味と話者の関係（江戸～明治初め・対話及び独白文）（梁井 2009: 23）】

| 資料 | 成立年 | 話者＝動作主 | | | | 話者≠動作主 | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 意志動作 | | 無意志動作 | | | | |
| | | ＋ | － | ＋ | － | ＋ | － | |
| 洒落本 | 1770－98 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 5 | 7 |
| 浮世風呂 | 1809－13 | 1 | 0 | 0 | 0 | 4 | 9 | 13 |
| 浮世床 | 1813－14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 5 |
| 八笑人 | 1820－34 | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 | 5 | 14 |
| 春色梅児 | 1832－33 | 1 | 0 | 1 | 3 | 0 | 5 | 10 |
| 春色辰巳 | 1833－35 | 3 | 1 | 1 | 6 | 6 | 4 | 21 |
| 七偏人 | 1857－63 | 23 | 0 | 0 | 11 | 10 | 20 | 64 |
| 安愚楽鍋 | 1871－72 | 3 | 1 | 0 | 4 | 4 | 7 | 19 |
| 牡丹燈籠 | 1884 | 11 | 1 | 1 | 5 | 22 | 13 | 53 |
| 塩原多助 | 1885 | 7 | 0 | 0 | 5 | 7 | 33 | 52 |
| 累ヶ淵 | 1888 | 24 | 7 | 2 | 15 | 25 | 32 | 105 |

梁井（2009）を踏まえて、次のように指摘しておきたい。まず、「テシマウ」形式の原初的な機能は＜終了限界の達成＞というアスペクト的意味を表すことであるという点を明らかにしたのが大きな貢献である。動詞「しまう」の表す＜終了＞という語彙的意味が受け継がれて、＜終了限界の達成＞というアスペクト的意味を表すのに機能し、前接動詞の範囲が拡大するにつれ、＜終了＞という語彙的意味の希薄化が示されている。ただし、＜終了限界の達成＞から＜一般限界の達成＞へ拡張して、＜終了＞という語彙的意味の希薄化がどのように行なわれるかに関しては共時的な観点からの考察が欠けている。また、感情評価的意味は、最初は話者が動作主と一致しない場合で生じていたが、次第に話者が動作主と一致する場合でも生じるようになったことも明らかにしている。これはアスペクト的意味からマイナスの感情評価へという意味変化の方向性を示していると梁井（2009）は指摘しているが、調査結果を見ると、マイナスの評価もあれば、それ以外の評価もあるため、マイナスの感情評価だけを考察の対象にする妥当性が欠けていると思われる。さらに、「テシマウ」形式の表す意味が主観化という方向へ変化し

たと指摘されているが、感情評価の派生は金水（2000）が指摘しているように文脈に依存する部分があるため、「テシマウ」形式の意味の主観化プロセスを再考する必要がある。

## ２．４　先行研究の問題点

以上の先行研究を踏まえて、次のように指摘しておきたい。

第一に、「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味は、＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、＜限界達成＞があり、どの意味になるかは前接事態の時間的特徴によって決まるため、前接事態の時間的特徴がどのように捉えられるかが重要である。今までの研究は、既存の動詞分類をもとに研究が行なわれてきた。状態を表す「ある」、「いる」や可能動詞などは、アスペクト的対立がないため、「テシマウ」形式のアスペクト的意味を論ずる際、考察対象から外されていることがほとんどである。しかし、鈴木（1998）が指摘しているように、いわゆる状態を表す「いる」についた「テシマウ」形式もあり（例（50））、即ち＜状態＞を表す状態動詞でも文脈によって＜状態が実現する＞という動的意味に解釈されることもあるため、動詞の表す時間性は、固定されているのではなく、文脈（或いは話者の認識）と合わせて解釈される場合がある。それゆえ、動詞の表す事態の時間的特徴も再検討する必要がある。

（50）午前６時半に到着、係員がいてしまった！
前回の訪問ではまだ係員がいない時間帯のはずが、今回はちゃんといました。１５７０円をしっかり払ってきました。
（http://grand-touring-japan.travel.coocan.jp/touring/2006tour/july/tohoku/bandai-zao0724/index.htm）

また、運動動詞でも、動作動詞や変化動詞のように限界性が強いものもあれば、思考や感情を表す動詞のように限界性が弱いものもある。限界性が弱いと考えられている「悩む」と「疲れる」は、次のように期限を表す文的成分と期間を表す文的成分との共起で異なる時間的性質を持つことを示している。

（51）　1分悩んだ。　（「悩む」という運動の持続時間）

?1分で悩んだ。（「悩む」という運動が達成されるまでかかる時間）

（52）　?1分疲れた。（「疲れる」という運動の持続時間）

1分で疲れた。（「疲れる」という運動が達成されるまでかかる時間）

このように、動詞の表す思考や感情という事態の時間的特徴の再考も求められている。

第二に、「テシマウ」形式は、＜終わり＞というアスペクト的意味を表す場合において、形式はそれぞれ異なるが、条件が揃えば、いずれも＜終わり＞というアスペクト的意味が表される。この場合、三つの形式の表すアスペクト的意味＜終わり＞はどのように異なっているのであろうか。これらの中でも、「テシマウ」形式の使われた表現は、話者の感情評価が添えられている点で他の形式と区別されていると考えられるが、なぜ話者の感情評価と結びつきやすいかに関しては、当該形式の表す＜限界達成の強調＞に関わると思われる。また、それぞれの形式の談話における機能は、それぞれ意味するアスペクト的意味＜終わり＞とも関わると考えられる。このように、三つの形式の意味するアスペクト的意味＜終わり＞を明らかにせねばならない。

第三に、「テシマウ」形式の原初的機能は事態の＜終了限界の達成＞の標識であると考えられている（梁井 2009）。動詞「しまう」の語彙的意味を考えれば、＜終了限界の達成＞の標識として機能していたというのは十分考えられうることである。しかし、＜終了限界の達成＞の標識としての機能がどのように獲得されたのかに関しては、共時的な観点からの考察が欠けている。また、＜終了限界の達成＞の標識として機能する文法的意味は、どのように＜限界達成＞一般[3]を表す形式を表すようになるのか、また、その文法的意味が、事態に対する話者の持つ前提的な期待値[4]とどのように関わり合い、主観的意味の派生に導かれたのかに関してもまだ論ずる余地がある。

---

[3] 動的な展開が認めにくく、終了限界が捉えられない内的状態動詞についた「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味を指している（梁井(2009)）。

[4] 鈴木（1998）が言及している前提は、「望ましくない」と「実現しにくい」に狭められているが、本稿では様々な可能性を前提として考えているため、前提という用語を使わず、前提的な期待値という用語を使う。

以上から本論は、第 4 章以降、（ｉ）日本語における運動動詞の限界性を明らかにした上で、「テシマウ」形式の表す意味・用法を記述すること、（ⅱ）他の形式の表すアスペクト的意味＜終わり＞との違いを明らかにすることを通して「テシマウ」形式の用法を特徴付けること、そして（ⅲ）共時的観点から「テシマウ」形式の文法的意味の獲得・拡張プロセスを明らかにした上で、主観化へのプロセスを検討することの 3 点を目的とする。

# 第３章　認知言語学の枠組み

言語とは何であろうか。一見素朴な問題であるが、聞かれるとどう答えればよいかに悩んだ経験はないであろうか。辞書によれば、「人の発する音声のまとまりで、その社会に認められた意味を持っているもの。感情や思想が音声または文字によって表現されたもの」という説明がされている。「意味」と結び付けられた「音声」[5]というもの、感情や思想の伝達に役割を果たすものが言葉である。前者は記号として、後者は感情や意思疎通の道具として言葉を扱っている。では、「意味」はどのように生まれて「音声」と結びついたのであろうか、また、その「意味」は実際に使用されることによって変化していくのであろうか。認知言語学では、「言葉は、主体が外部世界を認識し、この世界との相互作用による経験的な基盤を動機付けとして発展してきた記号系の一種である」（山梨 2000: 18）というスタンスに立ち、主体の外部世界に対する解釈が書き込まれた記号として考えられている。これを逆に言えば、言葉という記号体系は、外部世界に対する主体の解釈仕方を反映していると言えよう。主体の解釈は、経験的な基盤に基づき、図と地の反転プロセスをはじめ、前景化–背景化のプロセス、抽象化・具象化のプロセスなどといった主体の認知能力と関わって行なわれるものである。本稿では、この言語観に基づき、「テシマウ」形式の意味･用法の記述、文法的意味の獲得プロセス、関連する形式の表す意味的な相違を検討していく。その際、本論文で援用する道具立てを、以下において説明する。

## ３．１　図と地の分化と反転

我々は、ある対象を把握する場合にその対象の際立った部分に焦点を当てながら認知していく。この場合、際立った部分は図（figure）、その背景になっている部分は地（ground）と見なされている。言語表現のなかには、図と地の分化は、描かれる物の大きさや事態

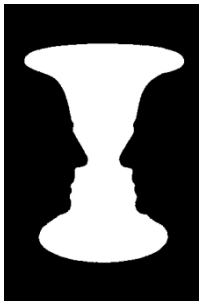
[5] 音声によらない手話や文字の使用を含めて言うこともある。

の完了性などの要因に影響されたものがある。外部世界にある対象の存在を捉える際、小さいほうは図として、大きいほうは地として機能する傾向が見られる。よって存在物は図として、存在場所は地として認知するのが一般的である。これは、次の（1a）が（1b）よりも容認度が高いことを動機付けている。ある事態の実現を解釈する際には、動きや変化を表す述語は図として、状態を表す述語は地として機能する傾向も見られる。次の例（2）は、事態がどのようなことがらを背景として実現するのかということを表している。（2a）と（2b）は、主節の表す事態が図として、従属節の表す状態が地として認知されるのに対し、（2c）と（2d）は、主節の表す事態が地として、従属節の表す事態が図として認知される。

（1） a. 郵便局の前に自転車がある。
　　 b. ??自転車の後ろに郵便局がある。
（2） a. 夕食を用意していたとき、実家の母から電話がかかってきた。
　　 b. 子供が寝ているうちに、洗濯物を干した。
　　 c. 後ろを向くと、知らない人が目の前に立っていた。
　　 d. 駅に着くと、佐藤さんが来ていた。

外部世界に存在する対象や事態の実現の言語化には、図として認知しやすいもの、或いは地として認知されやすいものがそれぞれ表出することが分かる。

しかし、図と地の解釈は絶対的ではなく、図が地として理解されることもあれば、地が図として理解されることもある。これは、図と地の反転という現象である。図と地の反転に関して、よく知られている「ルビンの盃」を取り上げよう。図１は、白い部分を図として、黒い部分を図として認知する場合、盃に解釈される。逆に、黒い部分を図として、白い部分を地として認知する場合、向かい合った人物の横顔に解釈される。同じ図形であっても、図と地の分化によって異なったものに解釈されうる。



【図 1　ルビンの盃（Rubin 1958: 201）】

この現象は、言語表現においても観察される。

（3）　a. セーターが半分編んである。（セーターが編まれている部分が図）

b. セーターが半分編んでいない。（セーターが編まれていない部分が図）

（山梨 1995: 9）

例（3）は、同じ事態「セーターを半分編む」が実現したことを表している。異なった言語形式が選択されたということは、異なった認知プロセスが潜んでいるということである。（3a）は、編まれている部分が図として、編まれていない部分が地として認知されている。これに対し（3b）は、編まれていない部分が図として、編まれている部分が地として認知されている。この現象は、意味レベルにおいても観察される。

（4）　a. 姉に気付かれないように、母にもらったチョコレートをさっさと食べてしまいました。（時間的側面が図）

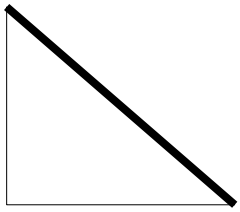
b. ダイエット中なのに、我慢できず、チョコレートを全部食べてしまい　ました。（主観的評価の側面が図）

「テシマウ」形式の意味・用法には、アスペクト的意味（時間の側面）と様々な感情評価的意味（主観的評価の側面）があるとこれまでの研究において記述されている。例（4）は、同じ「テシマウ」形式が使われている表現であるが、異なった認知プロセス

があることを示している。(4a) は、「食べる」事態の実現を速めるという時間の側面が図として認知されているのに対し、(4b) は、「食べる」という事態の実現に課された話者の前提的な期待値を反映するという主観的評価の側面が図として認知されている。本研究では、この図と地の観点を援用し、「テシマウ」形式の表す複合的な意味を記述する。

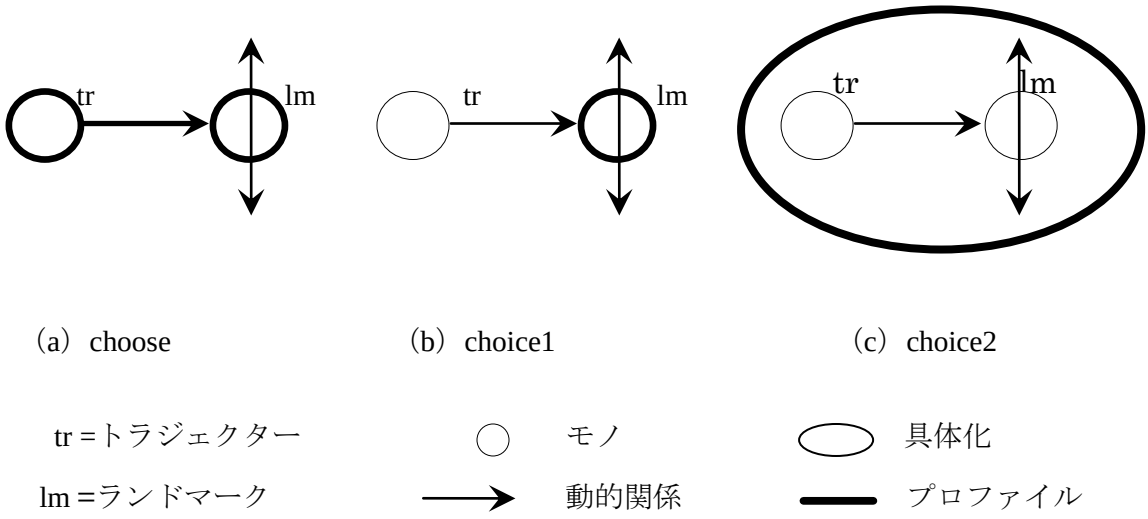
## ３．２　ベースとプロファイル

外部世界が概念化される際、認知のドメインの中で相対的に際立つ部分はプロファイル、プロファイルを際立たせる部分はベースと呼ばれる。例えば、「斜辺」は、斜線がプロファイルとして、直角三角形がベースとして認知される。ベースの直角三角形がなければ、斜辺は単なる直線として認知され、斜辺には認知されない。プロファイルは独立に存在するものではなく、ベースと相互に依存している。



【図 2　斜辺（Langacker 1999a: 87）】

認知文法において、プロファイルの違いは品詞の規定にも影響しており、名詞はモノをプロファイルし、動詞は関係をプロファイルするものとして定義づけられる。例えば、動詞 choose とそれに対応する名詞 choice の二つの違いは、プロファイルの相違にある。共通のベースは、選ぶ人と選ばれる対象、さらにその二者の関係の間で成立する動的関係からなる（図 3)。動詞の choose では動的関係がプロファイルされ、その結果選ぶ人と選ばれる対象がプロファイルされる（図 3（a))。choice の意味には、選ばれた対象のみがプロファイルされているもの（図 3（b))、そして、全体を具体化してモノと捉え、それがプロファイルされているもの（図 3（c)）の２つの意味がある。



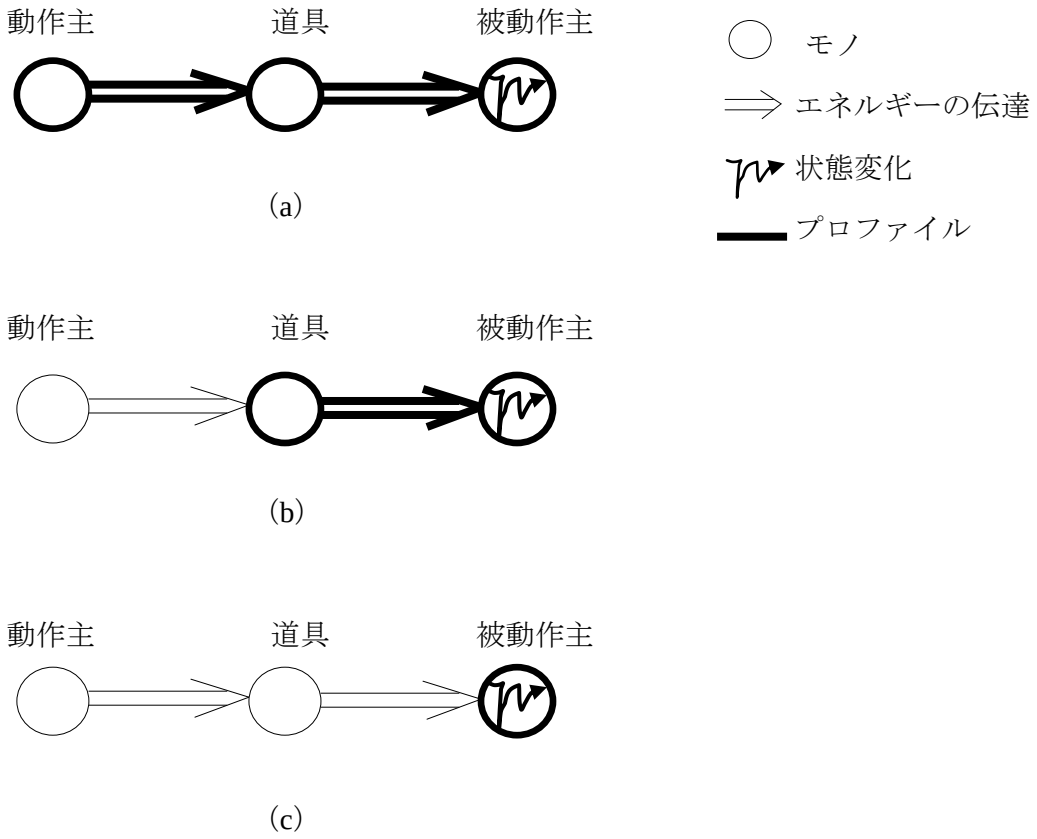

【図 3　choose and choice（Langacker 1999a: 87）】

さらに、プロファイルという概念は文構造にも影響を与える。例えば、次の（5a）から（5c）は共通のベース「だれかが道具を使って何かを壊す」を持っている。ベース全体がプロファイルされている場合（図 4（a））、（5a）の表現が選ばれる。道具と被動作主がプロファイルされている場合（図 4（b））、（5b）の表現が選ばれる。被動作主のみプロファイルされている場合（図 4（c））（5c）の表現が選ばれる。

（5）　a.  Floyd broke the glass（with the hammer）

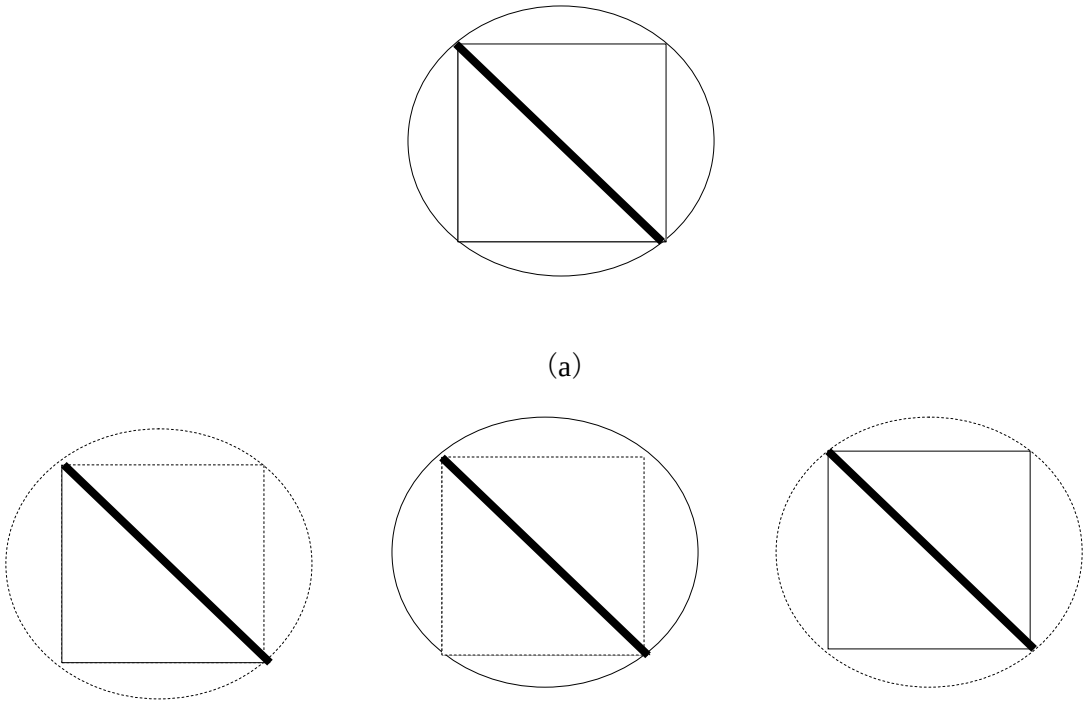
b. The hammer (easily) broke the glass.

c. The glass (easily) broke.




【図 4　プロファイルの違いによる文構造（Langacker 1990a: 217）】

一方で、プロファイルされている部分は固定しているが、ベースが複合的に存在する可能性はないだろうか。例えば、直角三角形をベースに、プロファイルされた斜線の部分が「斜辺」と理解される。プロファイルされた同じ斜線の部分が、複合的なベースを有する場合、背景化される対象の違いによって異なった解釈が行なわれる。次の図 5(a) は、プロファイルされた部分が複合的なベースにあることを示している。この複合的なベースにおける円形と四角形がさらに背景化される場合、プロファイルされた部分は、「斜辺」として理解される（図 5（b））。複合的なベースにおける直角三角形と四角形がさらに背景化される場合、プロファイルされた部分は、「直径」として理解される（図 5（c））。複合的なベースにおける円形と直角三角形がさらに背景化される場合、プロファイルされた部分は、対角線として理解される（図 5（d））。




【図 5　複合的なベースの背景化による相違】

この複合的なベースの背景化による相違は、一人の人が持つ複数の「身分」の説明についても説明できる。例えば、「私」というのは他者との関係によって理解される。この私は、実家の親子関係においては親の「娘」であり、兄弟関係のベースにおいては人の「妹」（或いは「姉」）であり、夫婦関係のベースにおいては夫の「妻」であり、家庭の親子関係のベースにおいては子供の「母親」であり、友人関係においては人の「友達」であり、職場のベースにおいては人の「同僚」（或いは「部下」、「上司」）であり、教授関係のベースにおいては人の「先生」（或いは「学生」）である。同じ「私」がプロファイルされているが、複数のベースが存在することで、異なった身分として理解される。このように、ベースとプロファイルの認知プロセスでは、主にプロファイルされた部分の異なりに焦点が当てられているが、実際にプロファイルされた部分は同じであるが、

複数のベースが共存することで、ベースの在り方によって異なった解釈が行なわれる。認知言語学では、言葉に関しては、概念レベルでプロファイルされた部分によって異なった言語形式が選択されると言われているが、実際には、プロファイルされた部分は同じでも、共存するベースのあり方によって異なった言語形式が選択されることも考えられる。本研究では、この観点を援用し、主な研究対象である「テシマウ」形式との関わりで、＜完了・終了・終結＞というアスペクト的意味を表す「スル」形式と「－オワル・オエル」形式との認知プロセスにおける相違を明らかにしていく。

## ３．３　プロトタイプ

人間はこの世界にある万物をそれぞれの持つ特徴に基づいてカテゴリー化する。このようなカテゴリーにおける最も典型的な例をプロトタイプと呼ぶ。例えば、鳥といえば、ダチョウやペンギンに比べ、スズメ、カラス、ハトなどがよりはやく想起される。このことから鳥カテゴリーにおいては、前者は周辺的成員として、後者は典型的成員として存在すると考えられる。これは、カテゴリーの非均質性を示している。言葉に関するカテゴリーにおいても、非均質性が現れる。例えば、他動詞というカテゴリーでは、「食べる」、「殴る」、「たたく」、「噛む」などといったものは典型的成員として考えられるが、「噛み付く」、「惚れる」などといったものは典型的成員から離れたものである。他動詞の規定については、「～が～をＶ」という統語形式による分類が行なわれているが、経過場所を表す「を」格を取った「走る」、「歩く」、「渡る」などといった自動詞は除外されると説明されている。また、他動詞的な特徴を持つ「噛み付く」などは、働きかける対象が、格助詞「を」ではなく、「に」で表わされることもある。統語形式による自他動詞の分類からもたらされた例外を解消するため、Hopper and Thompson（1980）では、統語的な特徴をはじめ、語彙的意味や語彙的意味に要求される名詞の意味などを含めて、より他動的かより自動的かという捉え方が試みられている。

（6）他動性

a. 参与項の数が 2 つ以上あること

b. 状態よりも動作を表すこと

c. 行為に終わりがあること

d. 行為が瞬間的であること

e. 意志をともなって行なわれること

f. 否定よりも肯定

g. 起こらなかったり現実に起こらないことより、現実に起こったこと

h. 動作主に行為の能力があること

i. 目的語が影響を受けること

j. 目的語が特定であること

（Hopper and Thompson 1980（日本語訳:認知言語学キーワード事典））

ここでは他動詞と自動詞は明確に線引きされた存在ではなく、より他動的か、より自動的かという連続的な捉え方をすべきものであるという提案がなされている。ここで該当する項目が多ければ多いほど、他動詞の中心的成員として認知される。逆に、該当する項目が少なければ少ないほど、他動詞の中心的成員から離れた周辺的成員として認知される。これに基づいて、日本語の他動詞においても、中心的成員と周辺的成員が現れる。「～が～をＶ」という構文を取る他動詞としては、「殺す」、「壊す」、「殴る」、「敲く」、「叱る」、「愛する」、「預かる」、「知る」、「信じる」などが挙げられる。例えば、「殺す」と「壊す」は 10 項目を満たしているので、中心的成員として考えられる。「殴る」、「叩く」、「叱る」、「愛する」は同じ中心的成員として考えられるが、目的語が影響を受ける（6i）という点で連続性が見られる。「殺す」などは、目的語である名詞が変化するまで影響されるが、「殴る」などは、目的語である名詞が影響されるが、変化には及ばない。このほか、「殴る」、「敲く」、「叱る」と「愛する」は、行為に終わりがある（6c）という点において、その程度に一定の差違が見られる。「殴る」などは、その終点が容易に想起され易いのに対し、「愛する」はその終点がはっきりと浮かび上がらないことから比較的想起されにくい。終わりが保管や世話を引き受けることを意味する「預かる」は、目的語を取るが、その目的語はそれ程動作に影響されないように思われる。この場合、動作によって具体的に働きかけられるというより、抽象的に働きかけられると言えよう。思考や感情を表す「知る」、「信じる」は、実質的な動作というより心的な動作で、

意志で行なう動作というより非意志で行なわれる動作である。これらの動詞は目的語がそれ程影響されないことから、中心的成員から離れた周辺的成員だと言えよう。ここから、日本語の他動詞においては、プロトタイプもあれば、プロトタイプから離れた周辺的な存在もあり、他動性の程度差が示されている。

日本語の動詞には、先ほど述べた自他動詞の分類、動作性・状態性に留まらず、終結性や意志性などといった意味的特徴から、様々な分類が行なわれている。動詞の動作性・状態性に関しては、「スル」形式と「テイル」形式との意味的な対立によって外的運動動詞（「食べる」、「歩く」、「倒れる」など）・内的情態動詞（「考える」、「悩む」、「疲れる」など）と静態動詞（存在の状態を表す「いる」、「ある」など）に分けられている（工藤 1995）。また、外的運動動詞（「食べる」、「歩く」、「倒れる」など）・内的情態動詞では、終結性の観点から内的限界動詞（「倒れる」、「温まる」など）と非内的限界動詞（「食べる」、「歩く」、「悩む」、「疲れる」など）に分けられている。だが内的限界動詞と分類されている「倒れる」に関しては、「（ドミノが）倒れる」という用例を考えると、一部が倒れるとも、全部倒れるとも解釈される可能性が出てくる。この場合、「（ドミノが）倒れる」という事態を表す動詞は、必ず内的限界動詞だと言えなくなる。また、非内的限界動詞と分類されている「食べる」と「疲れる」は、決まった量や時間という文的成分による終結点が予め決められていないことは共通している。しかし、前者は、終結点を後から付け加えることができるのに対し、後者は、終結点を付け加えることが難しい。これは後者が前者よりも弱い限界性或いは終結性を有していることを示している。さらに、期限を示す文的成分との共起で、アスペクト的意味においては、焦点の違いも見られる。「30 分で食べた」は、運動の終了を意味するのに対し、「30 分で疲れた」は、運動の開始（運動の終了、状態の開始とも見られる）を意味する。これは、内的限界動詞と非内的限界動詞というカテゴリーで示されている非均質性を示している。先行研究によれば、「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味は、その前接事態のアスペクトと関連して解釈されることが指摘されている。そのため、本研究では前節事態の限界性・終結性を検討していく。また本研究では、いわゆる動詞の表す運動、変化、思考や感情といった事態の限界性や終結性についても、プロトタイプの観点から期限と期間を表す要素との共起可能性、また共起可能な場合に表わされるアスペクト意味の観点から、

検討を行っていく。

## ３．４　文法化と意味変化

文法化は、具体的意味を持つ内容語から文法的機能を果たす機能語へという品詞における再範疇化と見なすことができる。再範疇化が行われる前には、意味の変化が先行することから、文法化は再範疇化が行われた意味変化の現象であると言える。Traugott and König（1991）は、文法化を含めた意味変化に見られる傾向を指摘している。

（7）意味的−語用論的傾向（semantic-pragmatic tendency）

a. Semantic-Pragmatic Tendency Ⅰ：Meaning based in the external world described situation ＞ meanings based in the internal（evaluative/perceptual/cognitive）described situation.

b. Semantic-Pragmatic TendencyⅡ：Meaning based in the external or internal situation＞ meanings based in the textual situation.

c. Semantic-Pragmatic TendencyⅢ：Meaning tend to become increasingly situated in the speaker’s subjective belief-state/attitude toward the situation.

（Traugott and König 1991: 208-209）

（7a）を反映した意味変化には、具体的な物理的領域に関わる意味から心理的世界、認識の世界などの抽象的領域に関わる意味への拡張が含まれる。西アフリカのクワ語族のエウェ語における身体部位を表す身体部位名詞から発達してきた空間接置詞が代表例として挙げられる。（8）は、人間の身体部位＜背＞を表す名詞が＜～の後方に＞という空間概念を表す空間接置詞として用いられている。

（8）　a. 身体部位名詞用法

épé　*megbé*　fá

his　back　cold

b. 空間接置詞用法

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| é-le | xɔ | á | *megbé* | |
| 3Sg-be | house | the | in.the.back.of | （Heine 1991） |

また、英語の例としては、前置詞 *after* が挙げられている（Traugott and König 1991）。

（9） a. 空間関係：Come *after* me.

b. 時間関係：I saw him *after* three hours.

（9a）の *after* は外部世界の物理的存在同士の具体的な空間関係を表すために用いられているのに対し、（9b）の *after* は 3 時間後に事態が実現したという抽象的な時間関係を表すために用いられている。日本語では、「掴む」、「飲み込む」、「把握する」が考察されている（山梨 1995）。これらの動詞は、物理的行為に関わる意味を表しながら、人間の認識、判断などに関わる内面的な状況を表す動詞としても用いられている。

（10） a. どうもこの論文の要点が掴めない。

b. あの工員は仕事の飲み込みがはやい。

c. この理論を十分に把握するには時間がかかる。 （山梨 1995: 81）

次に、（7b）を反映した傾向としては、次の例が挙げられている。

（11）*After* we glanced at the headlines, we went to work.

（11）は前置詞としての用法の（9）と異なり、文と文とのつなぎ、二つの事態の前後関係を表すために用いられている。日本語では、場所を表す名詞「ところ」が考察されている（山梨 1995）。（12a）の「ところ」は場所を表す格助詞「に」で表されているため、行為の行なう場所を指している。（12b）は、同じ格助詞「に」で表されているが、行為の行なう時間を指している。（12c）は、格助詞をともなわず、事象、行為の前後関係を規定する接続表現として用いられている。

（12） a. できるだけ明るいところにいた方が安全だ。

b. ちょうど食事しているところに客が訪ねてきた。

c. 医者に診断してもらったところ、癌であることが判明した。

（山梨 1995: 81-82）

さらに、（7c）の意味変化は、事態に対する話し手の主観的な信条や態度を中心に表すようになることを反映するようになるものであり、英語の *since* が挙げられている（Traugott and König 1991）。接続詞（例（13a））としての用法の *since* はある二つの事態間の時間関係を表し、二つの事態間の因果関係を表す接続詞（例（13b））として用いられるようになった。日本語の例としては、＜起点＞を表す格助詞の「から」と＜原因＞を表す接続助詞の「から」が挙げられる。（14a）の「から」は、「反省」という行為の開始を表しているのに対し、（14b）の「から」は、主節の表す「頭痛が治る」という事態の原因を表している。＜起点＞から＜原因＞への推移は、「Event B が Event A から始まる」－*→「Event B が Event A に由来する」という語用論的強化によって拡張すると思われる。このような転用は、叙述者の立場から事態間の関連性が結び付けられるという点で、話者の主観的な信念に基づいて解釈されるものである。

（13） a. 時間関係：I have done quite a bit of writing *since* we last met.

b. 因果関係：*Since* you are so angry, there is no point in talking with you.

（Traugott and König 1991）

（14） a. 時間関係：あのときから、ずっと反省していた。

b. 因果関係：手術を受けたから、頭痛が治った。

（7c）の傾向に基づく意味変化のもう１つの例としては、英語の want が挙げられる（山梨 1995: 83）。want の＜欠けている＞という意味から＜欲する＞という意味への推移は、語用論的強化（pragmatic strengthening）によって拡張すると考えられている（「私にはＸがない」－*→「私はＸを欲している」）。このような意味変化は、「日常言語の表現の中に、ある文脈・状況との関連によって語用論的に誘引される含意が、文脈から独

立しその言語表現の慣用的な意味として組み込まれていく」、「この種の含意（i.e.WANT（=LACK（A,B））－*→DESIRE（A,B））は、文脈によって却下できる」（山梨 1995: 84）と特徴づけられている。また、want は＜欠けている＞原義の用法が存在しながら（例（15））、原義から拡張した前置詞的な用法も存在する（例（16））。

（15） a. You shall *want* for nothing.

b. Nothing shall be *wanting*. （山梨 1995: 83）

（16） a. a year *wanting* five days.

b. a box *wanting* a lid. （山梨 1995: 84）

以上から、意味の変化は文法化のきっかけだと言えるが、すべてが文法化に導かれるとは限らないこと、そして、文法化が認められた語彙項目では、1 つの傾向が見られるものもあれば（例えば、クワ語族のエウェ語の‘megbé’）、1 つ以上の傾向が見られるものもある（例えば、英語の‘after’）ことが確認できた（3 つの傾向とも見られるものでは、英語の‘but’が取り上げられている（Traugott 1989））。後の分析で明らかとなるが、本研究の対象である日本語アスペクト形式「テシマウ」の意味・用法の獲得プロセスは、（7c）で示している変化傾向に合致する。

では、なぜ言葉の意味が変化するのであろうか。この原因は、推論（inferencing）にあると考えられている（Traugott and König 1991: 208-213）。（7a）と（7b）の傾向は、メタファー、すなわち類似性の認知に基づく推論であると考えられている。例えば、エウェ語の身体部位‘megbé’は、＜背＞という身体部位が身体の後ろにあるので、＜後ろ＞という空間的位置に推論され、＜～の後方に＞という意味に転用されるようになる。このことから、（7a）で示されている傾向は、外部世界を知覚した経験との類似性に基づく推論による意味変化だと言える。‘after’は、外部世界の物理的存在動詞の具体的な空間的関係＜～の後ろに＞を表す前置詞から、事態間の実現の前後関係＜～の後に＞を表す接続詞的用法に転用されるようになる。このことから、（7b）で示されている傾向も、外部世界を知覚した経験との類似性に基づく推論による意味変化だと言える。一方で、（7c）で示されている傾向は、文脈や状況との関連によって誘引される含意が強

化されることによって拡張したものであり、広い意味での隣接関係、すなわちメトニミーに基づく推論である。これは、文法を含めた言葉の意味は、具体的な経験に基づいて概念化され、類似性や近隣性によって新しく解釈され、転用されることによって変化しつつあることを示している。すなわち、言葉の意味変化には、人間の認知能力との関わりが伺えるのである。

本論文では、以上のようなスタンスに基づいて、「テシマウ」形式の意味・用法を記述し、他のアスペクト形式との相違や、文法的意味の獲得と主観的意味への変化プロセスを明らかにしていく。

# 第４章　「テシマウ」の意味・用法：
# 認知言語学からの記述と再検討

「テシマウ」形式は、アスペクト的用法と話者の感情評価が複合的に存在する。アスペクト的用法には、その前接事態の時間的特徴との関わりから＜終結＞（高橋 1969、吉川 1973、鈴木 1998、金水 2000）、＜開始＞（金水 2000）、＜実現＞（鈴木 1970、鈴木 1998）が挙げられている。一方、話者の感情評価としては、＜残念＞（高橋 1969、吉川 1973、鈴木 1998）、＜驚き＞（鈴木 1998）などが挙げられている。様々な用法が混合しているが、果たして「テシマウ」形式の本質は何なのだろうか。前提（鈴木 1998）または＜限界達成の強調＞にもたらされた含意（金水 2000）から体系的な説明が試みられている。しかし、＜限界達成の強調＞に基づく記述、また話者の持つ前提[6]が＜限界達成の強調＞とどのように関わり合うことで主観的評価の派生が導かれるかに関してはまだ論ずる余地がある。

そのため本章では、金水（2000）で言及されている「テシマウ」形式の意味－前景化した限界達成（以下は＜限界達成の強調＞と呼ぶ）に基づき、前接動詞の限界性を考察した上で、「テシマウ」形式によって表わされたアスペクト的意味と主観的評価を記述した上で、＜限界達成の強調＞という意味が、主観的評価の派生とどのように絡み合うのを、認知言語学の観点を援用し明らかにすることを目的にする。具体的に明らかにするのは次の 3 点である。

1「テシマウ」形式の意味を＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞とし、アスペクト的意味と主観的評価を記述する上で、時間的側面（限界達成の強調）と主観的評価との競合を考察した後に、＜限界達成の強調＞という意味が感情評価の派生と

[6] 鈴木（1998）で言及している前提は、「望ましくない」と「実現しにくい」に狭められていている。本稿では様々な可能性を話者の前提として考えているため、前提という用語を使わずに、事態の実現に対する話者の前提的な期待値という用語を使うことにする。

の関連性を明らかにする。

2「テシマウ」形式には、「望ましくない」と「実現しにくい」という前提が入っているという主張（鈴木 1998）の妥当性を検討する。

3「テシマウ」形式は、マイナスの感情評価的意味を獲得したことで、主観化の方向へ進んでいると指摘されている（梁井 2009）が、マイナスの感情評価的意味のみを考察対象とする妥当性について、「テシマウ」形式が表す様々な感情評価を考察した上で主観化の方向へ進むという説を検証する。

## ４．１　前接動詞の時間的特徴

「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味を検討する前に、本節では、認知文法の観点から日本語における動詞の限界性について検討を行っていく。

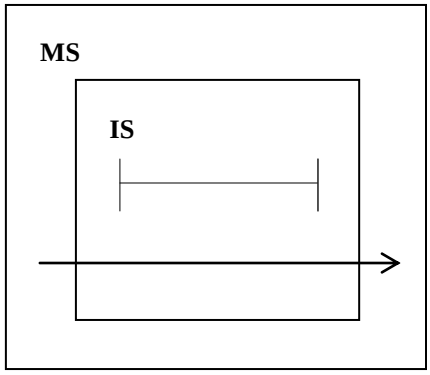
### ４．１．１　perfective verb と imperfective verb

動詞は様々な観点から分類することができる。日本語では、「テイル」形式が付けられたものが表す意味の違い（金田一 1950）や「スル」形式と「テイル」形式における意味的対立の有無（工藤 1995）といった観点からの分類が代表としてあげられる。では、これらの分類は、認知文法で言われる perfective verb と imperfective verb とどのように対応しているのだろうか。Langacker（2008）は、perfective verb と imperfective verb とを次のように特徴づけている[7]。

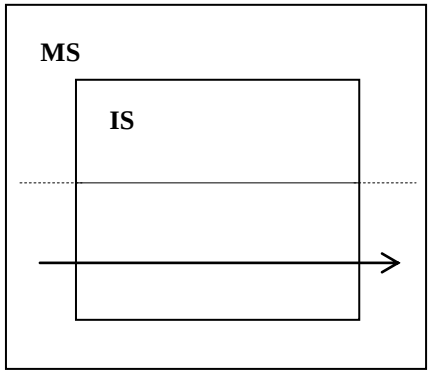
(1)「完了は時間軸上で区切られているが、未完了は明確には区切られていない。さらに、完了は、プロファイルされた関係を、内部が非均質で何らかの時間的な変化を含んでいると解釈する。一方、未完了は、プロファイルされた関係を、均質的であり安定した状態が続いていると解釈する。」

（Langacker 2008 日本語訳: 186）

[7] 英語動詞における perfect verb と imperfective verb としては以下の語が挙げられる。(Langacker 2008: 147)
perfective verb:
fall,jump,kick,bite,throw.break,ask,tell,persuade,learn,decide,cook,melt,evaporate,die,kill,create,calculate…
imperfective verb:
be,have,know,doubt,believe,suspect,like,love,deterst,appreciate,hope,fear,resemble,contain,reside,exist…..




【図 1　perfective verb】




【図 2　imperfective verb】

日本語の動詞の場合、大まかに考えれば、「スル」形式と「テイル」形式で＜動き＞と＜状態＞というアスペクト的意味の対立がない「ある」、「いる」、「異なる」、「意味する」、「優れる」といった静態動詞（工藤 1995）は imperfective verb として、アスペクト的意味の対立がある「開ける」、「切る」、「殺す」、「食べる」といった外的運動動詞や「思う」、「知る」、「信じる」、「愛する」といった内的情態動詞は perfective verb として考えられる。これらの中で、＜存在＞を表す「ある」、「いる」は、「スル」形式と「テイル」形式でアスペクト的意味の対立がないため、imperfective verb に分類されている[8]。このことからも、perfective verb とははっきりと線引きがされている。しかし、imperfective verb は、テンスにおける違い（例（2））、ほかのアスペクト形式と共起できることに（例（3）、（4））、繰り返しを許すことからも（例（5））perfective 的な特徴があるとされている。

（2）　a.　机の上に本がある。

　　b.　九州に阿蘇山がある。

[8] 日本語の語彙的アスペクトの一つの特徴として非完結動詞（imperfective verb）が「ある」、「いる」などごく少数のものに限られていることが挙げられている（野村 2007: 7）。それは、日本語が変化に着目する＜なる＞的言語であり、英語が迂言形式で完結的アスペクトを表わしたり、know に対して learn というように別な動詞を使ったり、同じ形式（例えば、「lie」と「resemble」）で非完結（imperfective）、完結（perfective）の両方を表すことがあるのだと考えられている。

(3)　a.　神戸は、今後大地震がありますか。　(Yahoo!知恵袋)

b.　本当に興味があるのは、特撮のように「まだ存在していないけど、これから存在する可能性があるもの」なの。　(http://pret.yakan-hiko.com)

(4)　a.　そして 4 日の夜に下腹部やら腰、足の付け根に鈍痛を感じ、5 日の朝にピンクっぽいおしるしがあり、それから腰から足の付け根の痛みだけではなく、不定期にですがお腹の強い張りがありはじめました。

(http://www.ca-girlstalk.jp/talk/detail/388822)

b.　そういう列車は需要がありつづける限りは廃止になることは考えにくいと思いますし、老朽化したら後継列車も出てくるでしょう。

(Yahoo!知恵袋)

(5) 派遣の仕事今日初日だったんだがバックレてしまった。起きたら携帯に電話通知が何回もあったんだけど、すっぽかしてもいいよね？

(Yahoo!知恵袋)

また、静態動詞だと考えられている「話せる」(例 (6a)、(6b))、「泳げる」(例 (7a)、(7b)) といった能力を表す可能動詞は、「スル」形式と「テイル」形式で意味的な対立が見られる。

(6)　a.　神戸松蔭でやる授業みたいにきちんとした授業ではなく、みんなでわいわいとする授業で、でもやはり英語でやるんですけど、不思議と苦にならず楽しく英語が話せました。

(http://www.shoin.ac.jp/plus_s/learn/international/international.html)

b.　純粋に英会話を楽しんでください。そのうちに自然と英語が話せている自分に気がつくことでしょう！

(https://every-e.com/w/info/wp/archives/2591)

(7)　a.　1500m 泳げました！(前略) 50m を 10 本とか、100m を 3 本とか、初級では試したことのない本数でしたが、息が上がる事もなく泳げました。

(http://blog.goo.ne.jp/pocoapoco2015/e/7caf1be464d8ba547cb30d75a82f4146)

b.　1 年間でボビングのクラスまでしか上がらなかったのが、最初の 1 時間

でほとんど泳げているのにビックリした。

（http://skyfit.jp/pool_detail02.html）

一方で、森山（1988）が指摘するように、perfective verb であっても、主語指示物の＜性質＞が述べられている場合には、いわゆる imperfective 的な特徴が見られる。

（8） a. この木簡は、昭和四七年に藤原宮の北を限る濠から出土した。

（森山 1988: 276）

b. 犬には人に見えないものが見えるという噂は本当?

（http://www.petkeeper.jp/root/article/blog/Blog_04.php）

さらに、一般真理や属性などが叙述された事態の場合でも、perfective verb が用いられているが、実際に表されているのは imperfective である。

（9） a. 日本人は米を食べる。

b. 太陽は東から昇る。

c. １たす１は２になる。

以上のことから、事態の表すアスペクトが perfective であるか imperfective であるかは、動詞のアスペクトだけに限らず、共起する語句や叙述される事態の種類などが関わってくることが分かる。このため、以降は「テシマウ」形式が表すアスペクト的意味の記述に際し、動詞のアスペクトの他、文全体で表された事態のアスペクトに沿って行っていく。

### ４．１．２　imperfective verb の状態性について

次にこの節では、存在状態を表す「ある」を挙げて、imperfective verb の状態性について検討する。

認知文法では、時間の流れの中で変化が認識できないものが imperfective verb だと考

えられている。いわゆる perfective verb と imperfective verb の対立は絶対的ではなく、その表現イメージの射程（scope of predication）が重要であり、「つまり、imperfective な事態というのは、気づいたときにはすでにその状態にはいっていて終わりも意識されない、「イメージの射程内に変化を認識しないもの」なのである」（樋口 2004: 61）。この説明に従えば、静的な事物の存在が最も典型的な imperfective verb である（例（10））。「阿蘇山」や「愛宕山」などといった山脈は数百年か数千年前から存在しており、いつか地球の地殻変動で消える可能性があるが、普通存在という状態の終わりが意識されないので、典型的 imperfective verb である。「水族館」や「動物園」などといった施設の存在は、山脈などの存在ほど長いわけではないが、普通終わりが意識されない存在状態である。

（10） a. 九州に阿蘇山がある。／京都市内の西に愛宕山がある。／滋賀県に琵琶湖がある。

b. 京都市内に水族館と動物園がある。／京大の吉田キャンパスに折田先生像がある。／京都駅の向こう側にヨドバシカメラがある。

一方で、主語が「祇園祭」、「バーゲン」、「コンサート」、「展覧会」といった出来事名詞で、動作や出来事の成立場所を表す「で」で表されている場合、perfective verb の特徴が示されている（例（11））。この場合、動詞「ある」は、「行われる」、「開催される」など出来事の成立を表す表現に置き換えることができる。

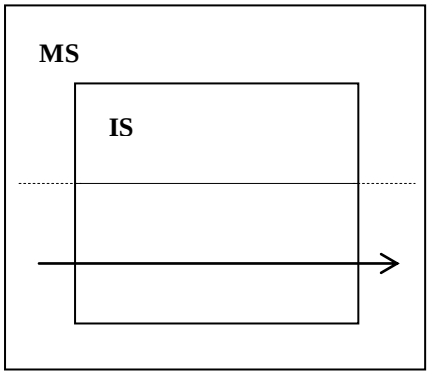
（11） a. 恒常的存在の出来事

京都で祇園祭がある。／青森でねぶた祭がある。／毎年伊勢丹でバーゲンがある。

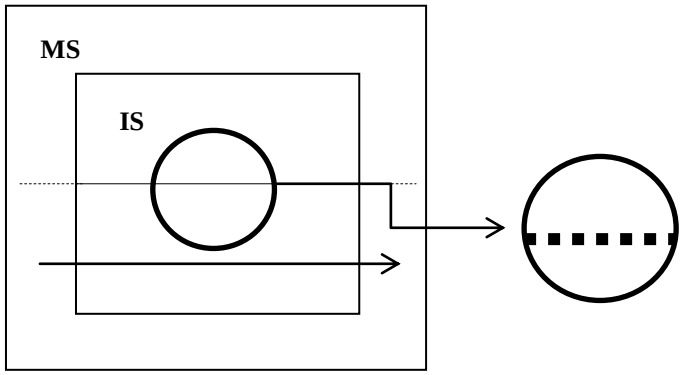
b. 一時的存在の出来事

日本武道館で小林幸子の 50 周年記念コンサートがある。／京都市美術館で草間弥生の展覧会がある。／イオンモールでホワイドデーチョコレートフェアがある。

例（11）は典型的な imperfective verb から離れている。さらに言えば、（11a）と（11b）は、表された出来事の存在状態が異なっている。（11a）で示されている「祇園祭」や「ねぶた祭り」などといった祭りは、行事のような存在で何百年も続けられてきたため、恒常的な出来事である。また、１月になると、デパートや店などの間での恒例としてバーゲンが行われるため、恒常的な出来事だとも考えられる。これに対し、（11b）で示されている「50 周年記念コンサート」、「草間弥生の展覧会」は、恒常的に開催されるのではなく、ある時期に開催される出来事なので、（11a）の恒常的な出来事とは対照的な存在である。恒常的な存在が表される場合（例（11a））は出来事の存在状態の終わりが意識されないため、imperfective verb として考えられる。一方、一時的存在が表される場合（例（11b））は出来事の存在状態の終わりが意識されるため、perfective verb として考えることができる。このことから恒常的存在の出来事（例（11a））は静的な事物の存在（例（10））と同じように、imperfective verb として捉えられる。しかし、もう少し厳密に考えれば、それぞれがどのように imperfective verb に解釈されるかという捉え方は異なっている。典型的な imperfective verb は、図 3 に示されるようなものであり、気付いたときには、すでにその状態になっており、終わりが意識されない。風習や慣例など恒常的存在は、遠くから見れば、imperfective verb であるが、近づいて見れば、図４で示しているように、perfective verb の繰り返しによって形成された事態である。

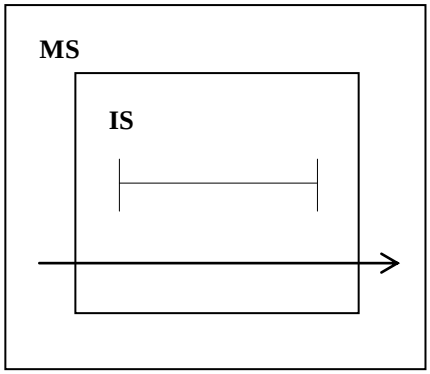



【図 3　典型的 imperfective verb 】
（静的な事物の存在）




【図 4　perfective verb の繰り返しによる imperfective event】
（風習や慣例など恒常的存在）

一方で、一時的存在の出来事は、始まりと終わりが想起されるため、perfective verb の特徴を持っている。このことから、（11b）のような一時的存在の出来事は、図 5 のように示すことができる。




【図 5　perfective verb】　（一時的存在）

以上の検討から、「スル」形式と「テイル」形式の意味的な対立の有無によって imperfective verb として分類された存在を表す「ある」は、存在主体の性質により imperfective verb らしいものもあれば、imperfective verb らしくないものもあることが観察された。つまり、imperfective verb でも内部の非均質性が見られ、静態動詞だから状態性を持つ、などとは定義できず、状態性は静態動詞のメンバーによって程度差が見られるということが示されている。

### ４．１．３　perfective verb の限界性について

次にこの節では、perfective verb の限界性について検討する。

「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味は、それが結合する動詞が表す時間的特徴と深く関わっている。鈴木（1998）では、「テシマウ」形式は、事態が終結点を持つ場合、＜終結＞という意味が読み取れるが、終結点を持たない場合、実現が表されても終結の意味が与えられることはないと指摘されている。金水（2000）では、限界動詞であれば、＜終了限界の達成＞に、非限界動詞であれば、＜開始限界の達成＞にも＜終了限界の達成＞にも読み取れることが可能であると指摘されている。ここから、「テシマウ」形式が表すアスペクト的意味と深く関わると考えられる動詞の時間的特徴としては、動詞の語彙的意味として終了限界の有無が関わるということが分かる。ところが、「食べる」、「笑う」、「疲れる」、「悩む」、「住む」といった動詞は、語彙的意味に終了限界がないことから、非限界動詞に分類されているにも関わらず、詳細な考察により、その非均質性が示されている。この非均質性は、perfective verb の持つ限界性の違いによってもたらせたものだと思われる。このように、ここでは perfective verb の限界性を検討していく。

認知文法において perfective verb は、時間的プロセスのある事態の始まりと終わりによって区切られたものとして捉えられている。この特性には程度の違いが現れるものの、限界性を持つと考えられる。限界性について、日本語の動詞では、森山（1988）をはじめ、工藤（1995）と金水（2000）は動詞の終結点の有無を中心に論じられている。森山（1988）は次のようにまとめている。

【表 3：動詞の終結性による分類（森山：1988）】

- 動詞
  - 持続動詞
    - 終結動詞（例：建てる、作る、（まとまった内容を）読むなど）
    - 非終結動詞
      - 終結点可能（例：歩く、走る、遊ぶなど）
      - 終結点不可能（例：愛する、願う、怒るなど）
  - 無持続動詞（例：目撃する、一瞥する、見かけるなど）

森山（1988）では、動きの持続過程[9]を前提にすることで、動きに終わりの点があるという素性を終結性と呼んでいる。「建テル」、「作ル」、「（まとまった内容のものを）読ム」など終結点の決まっている動詞を終結動詞、「歩ク」、「走ル」、「遊ブ」、「働ク」など終結点の決まっていない動詞を非終結動詞と呼ぶ。非終結動詞の中でも、「歩ク」、「走ル」のような終結点を持ちうるものと「愛スル」、「願ウ」、「怒ル」、「憧レル」、「暮ラス」、「営ム」のような終結点のありえないものに分けられている。持続過程を持っていない無持続動詞「目撃スル」、「一瞥スル」、「終ワル」、「到着スル」、「驚ク」、「アキレル」などは終結性を持つ動詞の候補からは外されている。

しかし厳密に言えば、この二つの判断基準は同じレベルにない。まず、終結点のある事態だからといって、終了段階が取り上げられるとは限らない。例えば、「目撃スル」、「一瞥スル」のような終了段階が取り上げられない事態に関して言うなれば、何かを目撃したらその動きが完成すると捉えられるため、終結点のあるものだと考えられる。また、森山（1988）では、持続過程のある事態の中で、動きの全体量と複合動詞形式「－オワル・オエル」の設定可能という基準に基づき、終結点のありえるものとありえないものがあるということが指摘されている。確かに、森山（1988）が指摘したように、感覚、心理状態、態度などを表す動詞は全体量が設定できないが、期間を表す要素と共起できることから（例（12）、（13））、全体的運動時間が設定できることが分かる。運動と

[9] 過程とは、過程持続（動きが展開する持続）に関する素性である（森山（1988））。

いうものがある点に至ったら終わるという観点から考えれば、「憧れる」、「恨む」も「3キロ／1時間走る」のように、動きの終結点の設定ができる動詞となる。

（12） 母の30年憧れた念願のディズニーランド旅行なので思いっきり楽しませてあげたいと思うのですが… （Yahoo!知恵袋）

（13）よく、暴力教師は、最初は嫌でも、最後は感謝するようになる、なんて言いますけど、僕みたいに最初から最後まで恨んだまま引退する人は稀なんですか? （Yahoo!知恵袋）

以上の議論から、動きの終了段階と終結点は互いに関わっているように思われるものの、実際には両者は異なったレベルにあることが分かった。

一方で、工藤（1995）と金水（2000）は、動きの持続過程ではなく、終結点の有無に焦点を当てることで異なる動詞の分類を与えている。

【表4：動詞の終結点による分類（工藤：1995）】

- 動詞
  - 外的運動動詞
    - 主体動作・客体変化動詞（例：倒す、開けるなど）
    - 主体変化動詞（例：倒れる、開くなど）
    - 主体動作動詞（例：食べる、飲むなど）
    - 内的限界動詞
  - 内的情態動詞（例：思う、考える、信じる、望むなど）
    - 非内的限界動詞
  - 静態動詞（例：いる、ある、異なるなど）

【表 5：動詞の終結点・達成点による分類（金水：2000）[10]】

- 動詞
  - 運動動詞
    - 限界動詞（例：倒れる、死ぬなど）
    - 非限界動詞（例：歩く、撫でる、食べるなど）<u>信じる</u>、<u>分かる</u>、<u>知る</u>、<u>考える</u>、<u>悲しむ</u>
  - 静態動詞（例：いる、ある、異なるなど）

工藤（1995）では、「テイル」形式の意味的な対立の有無に基づき、外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞という分類が与えられている。次に、＜そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界＞という特徴の有無に基づき、内的限界動詞と非内的限界動詞という下位分類が与えられている。金水（2000）では、動詞を運動動詞と静態動詞に分けている。金水は＜終了限界を超えれば、運動が達成されるという＞観点から、運動動詞をさらに、「終了限界が運動の達成点である限界動詞」と「終了限界に至らなくても達成されると見られる非限界動詞」という分類を与えている。非限界動詞は動詞以外の文的成分によってその限界性[11]を定めることができるのに対し（例（14a））、限界動詞は動詞以外の文的成分によって限界性を定めることができない（例（14b））。

（14） a. 10km／3 時間／4 時から 7 時まで／東京・大阪間を歩く。
b. 3 時間｛* 木が倒れた／* 夕食を作った／* 熊を殺した｝。
（金水 2000: 32）

金水（2000）は、運動の終了限界を運動の達成点として見なしている点においては、工藤（1995）と異なっている。しかし、終了限界のみを考慮すると内的限界動詞（工藤（1995））と限界動詞（金水（2000））とは変わらない。また、運動性が弱いと考えられている思考や感情を表す動詞には、「信じる」、「分かる」、「知る」、「思う」といった動詞のようにより変化動詞的な性質を示すものと（例（15））、「考える」、「悲しむ」といった動詞

[10] 下線は筆者によるもの。
[11] 金水（2000）で言及している限界性は、事態の終了限界に相当する。

のようにより動作動詞的な性質を示すもの（例（16））があることを指摘している。変化動詞的な性質を持つということが限界動詞として、動作動詞的な性質を持つということが非限界動詞として考えられているように思われる[12]。

（15） a. さっき我が子を無実だと信じたから、当然今我が子を無実だと信じている。
??我が子を無実だと信じている最中だ。
b. さっき正解が分かったから、当然今正解は分かっている。
??正解が分かっている最中だ。
c. さっき正解を知ったから、当然今正解を知っている。
??正解を知っている最中だ。
d. さっき正解は A だと思ったから、当然今正解を A だと思っている。
??正解を A だと思っている最中だ。

（金水 2000 : 27）

（16） a. 名前を考えている最中だ。
??さっき名前を考えたから、当然今名前を考えている。
b. 田中さんは悲しんでいる最中だ。
??さっき田中さんが悲しんだから、当然今田中さんは悲しんでいる。

（金水 2000: 27）

もちろん「信じる」、「分かる」、「知る」のような運動は、理解や気付く瞬間を表し、その知的運動を、分からない状態から分かるようになると捉えられれば、終了限界が運動の達成点として見ることができることから、後続する「テイル」形式は変化結果の持続として解釈される。他に、「諦める」、「呆れる」、「疲れる」のような運動も、諦めていない状態から諦めるようになると捉えられれば、終了限界が運動の達成点として見ることができる。ところが、これらの動詞の表す運動は、運動が始まる前に知識や感情・感覚などといったものがある程度溜まってから始まるという特徴が観察される。例えば、「疲れる」は、人によって違うが、疲労という感覚がある程度まで溜まることで、疲れが始まると考えられる。この感覚は疲労の蓄積或いはエネルギーの減少無しに、突然始

[12] 金水（2000）では、思考や感情を表す動詞の限界性については論じられていないが、変化動詞的な性質を持つというのは、変化動詞である「倒れる」のように終了限界が内在するため、限界動詞として扱われているように思われる。動作動詞的な性質を持つというのも、「食べる」のように終了限界が内在しないため、非限界動詞として扱われているように思われる。

まるものではない。ここから考えれば、「信じる」、「分かる」、「知る」、「諦める」、「呆れる」、「疲れる」のような運動は、何かの蓄積の上で始まり、という特徴を持っている。これは言い換えるならば、開始限界が運動の達成点であるといえる。これで、これらの動詞に付いた「テイル」形式は、変化結果の持続ではなく、運動の持続として解釈されるため、動作動詞的な性質を持つ、非限界動詞として考えてよいと思われる。一方で、「悲しむ」と「考える」は、「分かる」のように蓄積があって始まるという点で異なっている。このため、これらの運動の開始限界がはっきりとしていない特徴を持っている。次のように、期限を表す文的要素「1 分で」との共起関係からこれらの動詞は二種類の異なった性質を持っていることがはっきりと分かる。

（17） a. １分で分かった／信じた／知った／諦めた／呆れた／疲れた。
b. １分で*悲しんだ／考えた／*悩んだ／*苦しんだ／*望んだ／*憧れた。

運動の達成点が終了限界であろうが、開始限界であろうが、期限を表す文的要素と共起できるのは、ここでの運動がはっきりとした限界性を持つからだと考えられる。逆に、期限を表す文的要素と共起できないのは、限界性が弱いからだと考えられよう。この観点からあらためて日本語の perfective verb を捉えてみれば、限界性には次のように程度差があることが観察される。

（18） a. 倒れた。（＜終了＞）
b. 食べた。（＜開始＞或いは＜終了＞）
c. 笑った。（＜開始＞）
d. 疲れた。（＜開始＞）
e. 住んだ。（＜開始＞?＜終了＞?）

「スル」形式の場合は、当該事態が実現したと解釈されるが、アスペクト的解釈に関しては＜終了＞として解釈されるものもあれば、＜開始＞として解釈されるものもある。限界動詞「倒れる」は＜終了＞、非限界動詞「食べる」は＜開始＞或いは＜終了＞、非限界動詞「笑う」と「疲れる」は＜開始＞として解釈されるが、非限界動詞「住む」は＜開始＞にも＜終了＞のどちらとしても解釈されない。これは期限を表す文的要素「～で」との共起、期間を表す文的要素「～間」との共起から、非限界動詞として考えられているものは、限界性における違いがあることが分かる。

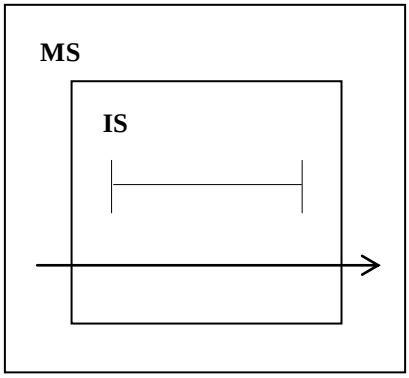
（19） a. 1分で倒れた。（運動（**終了限界**）が達成されるまでにかかる時間）
?1分間倒れた。（結果状態の持続時間）
b. 1分で食べた。（運動（**終了限界**）が達成されるまでにかかる時間）
1分間食べた。（運動の持続時間）
c. 1分で笑った。（運動（**開始限界**）が達成されるまでにかかる時間）
1分間笑った。（運動の持続時間）
d. 1分で疲れた。（運動（**開始限界**）が達成されるまでにかかる時間）
*1分間疲れた。（運動の持続時間）
e. *1分で住んだ。（運動（開始限界？終了限界？）が達成されるまでにかかる時間）
1年間住んだ。（運動の持続時間）

終了限界を内在する限界動詞「倒れる」は、期限を表す文的要素と共起することで、その運動の終了限界が達成されるまでにかかる時間を表す。これらの動詞は期間を表す文的要素と共起しないが、共起した際には、達成された運動の結果状態の持続時間として解釈される。終了限界を内在しない非限界動詞は、期限を表す文的要素と共起した場合、（19b）のように運動の終了限界が達成されるまでにかかる時間として解釈されるものもあれば、（19c）と（19d）のように運動の開始限界が達成されるまでにかかる時間として解釈されるものもある。また、（19e）のように、期限を表す文的要素と共起できないものもある。このように、日本語の perfective verb は、限界性における違いから少なくとも限界動詞、典型的非限界動詞、開始点重視非限界動詞、状態重視非限界動詞に分けることができる（詳しい検討は次節で行っている）。

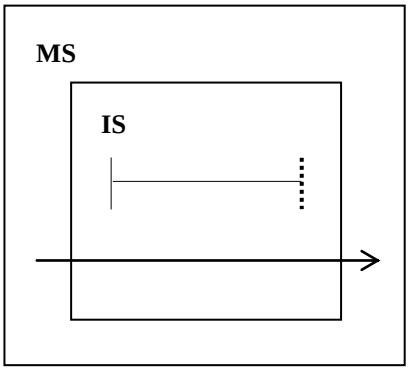
【表 6：限界性の相違から見る日本語の動詞分類】

- 動詞
  - perfective verb
    - **限界動詞**（例：倒れる、温まる、開くなど）
    - **非限界動詞**
      - **典型タイプ**（例：食べる、見る、書くなど）
      - **開始点重視タイプ**（例：分かる、笑うなど）
      - **状態重視タイプ**（例：住む、望む、悲しむなど）
  - imperfective verb（例：いる、ある、異なるなど）

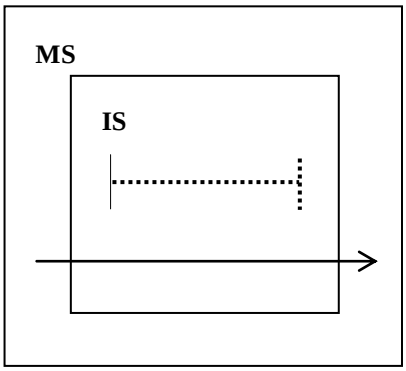
以上の検討に基づき、日本語の perfective verb は図式で次のように表すことができる。典型的限界動詞は、図 6 で示しているように、開始限界と終了限界が前景化されている。一方で、典型的非限界動詞は、図 7 で示しているように終了限界が背景化されていないが、それぞれの特徴によってさらに開始限界のみ前景化される開始点重視タイプ（図8）、開始限界と終了限界が背景化される状態重視タイプ（図 9）に分けることができる。



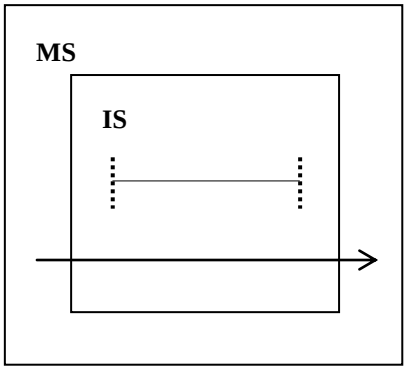

【図 6：限界動詞】




【図 7：非限界動詞－典型タイプ】




【図 8：非限界動詞－開始点重視タイプ】




【図 9：非限界動詞－状態重視タイプ】

### ４．１．３．１　限界動詞

本節では、perfective verb の限界性に引き続き、限界動詞について詳しく検討する。

限界動詞は、運動が達成されるまでにかかる時間を表す期限成分「～で」と共起でき、期間を表す成分との共起では基本的に運動の達成された結果状態の持続時間を表すが、主語名詞の意味特徴によって期間を表す成分と共起しにくい場合があり、繰り返される運動が想起されていれば、運動の持続時間を表す場合もある。

まず、主体変化動詞における「(木が) 倒れる」、「(人が) 倒れる」といったモノの無意志的な（状態・位置）変化動詞と「(家に) 帰る」、「(家を) 出る」といった人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞は、運動が達成されるまでにかかる時間を表す成分と共起でき、運動の終了限界が達成されるまでにかかる時間を表している。期間を表す成分と共起しないのが普通であるが、共起する場合は、運動が達成された結果状態の持続時間を表す。

（20）a. 10 分で倒れた／温まった／開いた／片付いた／固まった／枯れた／乾いた／変わった／切れた／腐った／崩れた／砕けた／曇った／消えた／壊れた／裂けた／冷めた／死んだ／萎んだ／閉まった／済んだ...

（運動**（終了限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間倒れた／温まった／開いた／*片付いた／固まった／*枯れた／？乾いた／？変わった／*切れた／*腐った／*崩れた／*砕けた／曇った／消えた／？壊れた／*裂けた／*冷めた／*死んだ／？萎んだ／閉まった／*済んだ...

（運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間）

（21）a. 10 分で上がった／集まった／行った／移った／帰った／隠れた／来た／去った／近づいた／出かけた／出た／入った／離れた...

（運動**（終了限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間上がった／集まった／*行った／*移った／*帰った／隠れた／来た／*去った／*近づいた／*出かけた／*出た／*入った／離れた...

（運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間）

期間を表す成分と共起する場合は基本的に運動が達成された結果状態の持続時間を表すが、主語に当たる名詞が無情物になると容認度が落ちることがある。例えば「倒れる」であれば、主体が有情物の場合、立ち直る可能性があり、立ち直ったら倒れた状態が終了するため、決まった時間を表す成分と共起でき、結果状態の持続時間を表すこと

ができると考えられる。

また、限界動詞だと考えられている主体変化・客体変化動詞は、限界を表す文的成分と共起でき、運動が達成されるまでにかかる時間を表す。期間を表す文的成分との共起で、結果状態の持続時間ではなく運動の持続時間に解釈されるのが普通である。そして、その間で運動が繰り返される場面が想起されやすい（例えば、10 分間お弁当を温めるという場合、複数のお弁当が想起され、それを温める運動が繰り返されると理解されるのが普通である）。結果状態の持続時間に解釈される場合は、例えばボクシングのように相手を圧制するために相手を一時倒す場合、相手が立ち直り次第、倒した状態が終了するので、期間を表す文的要素と共起し、運動が達成された結果状態の持続時間に解釈される[13]。

（22）a. 10 分で倒した／温めた／開けた／編んだ／炒めた／折った／換える／片付けた／乾かした／刻んだ／切った／崩した／砕いた／消した／削った／殺した／壊した／裂いた／冷ました／縛った...
（運動（**終了限界**）が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間？倒した／*温めた／*開けた／*編んだ／*炒めた／*折った／*換える／*片付けた／*乾かした／*刻んだ／*切った／*崩した／*砕いた／*消した／*削った／*殺した／*壊した／*裂いた／*冷ました／*縛った...
（運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間）

一方、同じ限界動詞だと考えられている主体変化・主体動作動詞は、期間を表す要素との共起では、基本的に運動の達成された結果状態の持続時間に解釈されるが、運動の持続時間に解釈されることもある。例えば、「（着物を）着る」という事態は（例（23））、基本的に時間を表す要素との共起で着物を着ている状態の持続時間を表している（着物が何着もあって試着するというような繰り返しの運動が想起されれば、運動の持続時間にも解釈されうる）。

[13] 主体変化・客体変化動詞は、期間を表す文的成分との共起で、運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間には解釈されないが、運動の持続時間には解釈される。この観点から見れば、主体変化・客体変化動詞は限界動詞ではあるが、典型的な限界動詞から少し離れている。ここでは、運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間のみを考えているので、（22b）にはアスタリスクをつけてある。

（23） a. 10 分で着た／かぶった／着替えた／脱いだ／履いた／羽織った...

（運動（**終了限界**）が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間着た／かぶった／着替えた／脱いだ／履いた／羽織った...

（運動（終了限界）が達成された結果状態の持続時間）

以上の検討から、限界動詞は、期限を表す文的成分との共起で、運動の終了限界が達成されるという特徴を持つことを明らかにした。普通期間を表す文的成分と共起できないが、共起することがある。共起する場合、運動が達成された結果状態の持続時間に解釈されるものもあれば、運動の持続時間に解釈されるものもある。「（着物を）着る」のようにどちらにも解釈されるものもある。運動の持続時間に解釈される場合、普通繰り返される運動が想起されるため、これで限界性の強いことが確認されよう。

### ４．１．３．２　非限界動詞

本節では、限界動詞に引き続き、非限界動詞について検討する。

非限界動詞については、工藤（1995）の検討によれば、限界動詞でない動詞であれば、非限界動詞に分類されるように思われる。金水（2000）は、一歩進んで非限界動詞である感情や思考を表す動詞の意味的特徴についての検討がなされているが、非限界動詞全般を対象にした考察は行われていない。前節で検討したように、限界動詞の中でも、典型的限界動詞が存在していれば、典型的限界動詞と異なった性質を有するものも存在しているため、非限界動詞にも非均質性が見られることが予測される。4.1.3 で言及しているように、非限界動詞は期限を表す文的要素との共起で表されるアスペクト的意味によって、典型的タイプ、開始点重視タイプ、状態重視タイプに分けることができる。ここでは、タイプごとの特徴を詳しく見ていく。

まず、典型的非限界動詞は、「食べる」、「流す」、「見る」のように決まった運動の量が想起されていなければ、期限を表す文的成分と共起しない特徴を持っており（例（24a））、共起する場合は、運動の終了限界に達し、運動が達成されるまでにかかる時間が表される。そして、時間を表す文的成分との共起で運動の持続時間が表される（例（24b））という特徴をもっている。（25）は語彙の意味に目的語が要求されていないという点で（24）と異なっている。このため、（24）のように決まった運動の量が想定さ

れやすいもの（「歩く」、「泳ぐ」、「走る」など）と運動の量が想定されにくいもの（「急ぐ」、「喧嘩する」、「働く」など）に分かれている。期限を表す文的要素と共起できないというのは、すなわち終了限界の達成にも開始限界の達成にも解釈されないので、主体動作動詞が非限界動詞に分類されているが、限界性における程度の違いがあることを示している。

（24） a. 10 分で動かした／飛ばした／漕いだ／流した／打った／食べた／聞いた／見た／言った／歌った／書いた...
（運動**（終了限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間動かした／飛ばした／漕いだ／流した／打った／食べた／聞いた／見た／言った／歌った／書いた...
（運動の持続時間）

（25） a. 10 分で遊んだ／歩いた／*急いだ／頷いた／泳いだ／* 喧嘩した／*涼んだ／滑った／走った／這った／*働いた／*うろついた／*辿った／*通った／*ぶらついた／向かった...
（運動**（終了限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間遊んだ／暴れた／歩いた／急いだ／頷いた／泳いだ／喧嘩した／涼んだ／滑った／走った／這った／働いた／うろついた／辿った／通った／ぶらついた／向かった...
（運動の持続時間）

次に、典型的非限界動詞の他に、期限を表す文的成分との共起で運動の終了限界が達成されるように解釈されず、運動の開始限界が達成されるように解釈される非限界動詞がある。次の例（26）のような心的運動や知的運動を表す「察する」、「分かる」、「疲れる」などは運動が達成されるまでに、何らかの力やエネルギーなどの蓄積或いは消耗が必要だと考えられる。例えば、「察する」の場合、何かを察するまでに状況の観察や分析、記憶の喚起など知的運動の蓄積が行なわれるのが普通である。「疲れる」に関しても、疲労を感じるまでにエネルギーが少しずつ消耗されており、人によって異なるが、

ある程度消耗されると疲労を感じるのが普通である。このため、非限界動詞ではあるが、典型的非限界動詞と違い、期限を表す文的要素との共起で運動の開始限界の達成に解釈されるのであろう。これらの動詞は、期間を表す文的成分と共起しないのが普通で、運動の終了が達成された結果状態の持続にも運動の持続時間にも解釈されない。結果状態の持続に解釈されないのは、心的運動や知的運動の運動性が弱いからであろうが、運動が開始すると終了まで継続するので、終了限界に達して終了するわけではないと思われる。運動の持続時間に解釈されないのは、開始すると終了まで運動が継続するが、いつ終了するかがはっきりとしていないためだと思われる。

（26） a. 10 分で察した／分かった／諦めた／気になった／敬服した／腹が立った／あきた／聞こえた／見えた／疲れた／（のどが）かわいた／（はらが）へった...

（運動**（開始限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. *10 分間察した／*分かった／*諦めた／*気になった／*敬服した／*腹が立った／*あきた／聞こえた／見えた／*疲れた／*（のどが）かわいた／*（はらが）へった...

（運動の持続時間）

一方で、「察する」、「分かる」、「疲れる」のように期限を表す文的要素との共起で運動の開始限界の達成が表される「笑う」、「泣く」などがある（例（27））。例えば、涙脆い人に泣ける映画を見させて、その人が何分で泣くか予想する場面を想定しよう。「泣く」は泣きたいから泣けるわけではなく、嬉しい或いは悲しい感情がある程度溜まってくれば、「泣く」という運動が始まるのであろう。「笑う」も笑いたいから笑えるわけではないので、何らかの感情の蓄積がなければ、「笑う」という運動が始まるはずがない。要するに、例（26）と例（27）の動詞の運動が始まろうとするところに焦点が当てられている。（27）は、期間を表す文的要素との共起で運動の持続時間に解釈される点で（26）と異なっている。これは、心的運動や知的運動の運動性が弱いからいつ終了するのかが想起されにくいからだと考えられよう。

（27） a. 10 分で笑った／泣いた／（涙が）流れた／動いた／飛んだ／回った／燃えた...

（運動**（開始限界）**が達成されるまでにかかる時間）

b. 10 分間笑った／泣いた／動いた／（涙が）流れた／動いた／飛んだ／回った／燃えた...

（運動の持続時間）

さらに、非限界動詞の中で、「営む」、「通う」、「住む」などのように限界を表す文的要素との共起で開始限界の達成にも終了限界の達成にも解釈されない状態重視タイプがある（例（28））。これらの動詞の表す運動は、運動の開始と終了が想起されるが、重視されていないという特徴を持っている。「住む」という運動は、入居する時点で運動が始まり、退去する時点で運動が終わると見ることができるが、実際に入居手続き、家の掃除、電気の使用開始申し込み、インターネットの接続申し込みや家具の搬入など様々なことがあるので、単純に入居したから「住む」という運動が始まるとは認定しにくいであろう。退去の際も、家の掃除や電気の使用停止申し込みや家具の処分などがあるので、どの点が「住む」という運動の終了限界であるのか認定しにくい。「営む」という運動も、開店する時点で運動が始まり、営業休止の時点で運動が終わると見ることができるが、「住む」と同じように、営業許可の申し込み、開店準備や試験運営など様々なことがあるので、単純に開店したから「営む」という運動が始まるとは認定しにくい。このような運動は開始限界と終了限界があるが、どの点に至ったら開始か、どの点に至ったら終了かはっきりしておらず、運動の持続過程に焦点が当てられているのが特徴である。運動の開始と終了がはっきりとしていないため、限界性が弱いもので、限界を表す文的成分と共起できないと考えられよう。期間を表す文的成分と共起し、運動の持続に解釈される。

（28） a. *１年で営んだ／*通った／*暮らした／*経営した／*住んだ／*通勤した／*勤めた...

（運動が達成されるまでにかかる時間）

b. １年間営んだ／通った／暮らした／経営した／住んだ／通勤した／勤めた...

（運動の持続時間）

例（29）の動詞と同じような特徴を持つのは、知的運動や心的運動を表す「考える」、「疑う」、「悩む」などある。例えば、「悩む」という心的運動は、特定の時点に始まるわけではなく、気付いたら既に運動が始まっている。その感情が消える時点で運動が終了すると考えられるが、気付いたら既に運動が終わっているという特徴を持っている。「疑う」という運動は様々な手掛かりを通し、正しい結果や結論まで辿り着く運動を表す。疑うという運動は、特定の時点に始まるのではなく、手掛かりを得ながら、気付いたら運動が既に始まっており、正しい結果や結論に近づいていくうち、いつの間に運動が終わり、気付いたら確信しているという特徴を持っている。このような運動は開始限界と終了限界を持つが、どの点に至ったら開始か、どの点に至ったら終了かはっきりしていないため、期限を表す文的要素と共起できないのである。

（29） a. *一週間で考えた／*疑った／*期待した／*望んだ／*悲しんだ／*悩んだ／*苦しんだ／*憧れた／*音がした／*祈った／*願った...
（運動が達成されるまでにかかる時間）

b. 一週間考えた／疑った／期待した／望んだ／悲しんだ／悩んだ／苦しんだ／憧れた／音がした／祈った／願った...
（運動の持続時間）

以上の検討を踏まえて次のように指摘できる。

金水（2000）では運動の達成点が終了限界と一致する限界動詞と、運動の達成点が終了限界と一致しない非限界動詞と分けられているが、実際に限界動詞でも非限界動詞でもメンバーの非均質性が現れることが観察された。運動動詞全体から見れば、終了限界が想起されやすい限界性の強いものから、開始限界だけが想起されやすい限界性がそれ程強くないもの、そして終了限界も開始限界も想起されにくい限界性の弱いものがあることを明らかにした。この動詞のアスペクトにおける非均質性は、表現されたアスペクト的意味に密接に繋がっていると考えられる。「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味は運動動詞のアスペクトによるので、本節で検討した運動の時間的特徴に基づき、「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味を検討していく。

## ４．２「テシマウ」形式の表す意味・用法

この節では、「テシマウ」形式の意味に基づき、「テシマウ」形式の表す様々な意味・用法を体系的に記述することを試みる。

### ４．２．１「テシマウ」形式の意味

まず、「テシマウ」形式の表す時間的側面（限界達成の強調）と主観的評価（話者の感情評価）について検討する上で、本稿での「テシマウ」形式の意味を定義する。

「テシマウ」形式は、アスペクト形式として位置づける研究もあれば（金田一 1955、仁田 2009）、話者の感情・評価形式として位置づける研究もある（鈴木 1998）。単純にアスペクト的意味を表す形式ではないので、準アスペクト形式として位置づける研究も見られる（工藤 1995）。以下の例は、「テシマウ」形式がどちらの形式に属するかを簡単に決められないことを示している。

（30）生後３ヶ月の息子がお風呂のお湯を飲んでしまいました！　（Yahoo!知恵袋）

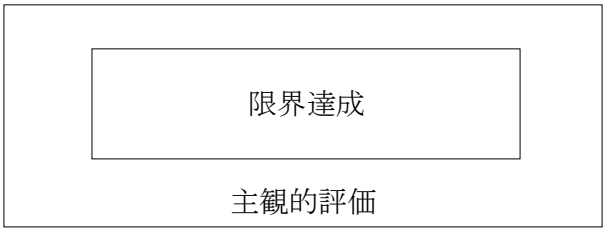
（30）は、文脈から話者の感情評価が読み取れるが、「スル」形式だけでは事態を述べるだけで話者の感情評価が感じられない。しかし、例（31）と例（32）で示しているように「テシマウ」形式が使われているからといって、例（30）のようにはっきりとした感情評価が付随するとは限らない。

（31）すごい本を読んでしまった。読了後の感想はただこの一言でした。（中略）「面白い！」本でした。　（http://www.mrr.jp/~funa/read/hasami.htm）

（32）「お日さま。せかい中をあかるくてらしてくださるあなたは、このよで一ばんえらいかたです。どうか、むすめとけっこんしてください。」
すると、お日さまは、わらいながら、こうこたえました。
「このよで一ばんえらいのは、くもさんだよ。くもさんが出てくると、あっというまに、わたしはかくされてしまうからね。」
（千葉　幹夫『よみきかせおはなし絵本－ねずみのよめいり』）

話者の感情評価の派生は、事態に対する話者の持つ前提的な期待値と関わっているが、文脈から特に話者の持つ前提的な期待値が読み取れない場合においては、時間的側面（限界達成の強調）が前景化されることが観察される。では、「テシマウ」形式自体はどのような意味を持つのであろうか。「テシマウ」形式の意味に関しては、寺村（1984）では、「基本的に行為・動作、できごとが完了したことを特に強調する表現である」、金水（2000）では、「「スル」形式と基本的に変わりがないが、スルの限界達成をさらに前景化した表現である」と述べられている。つまり、「テシマウ」形式は、終了限界の達成であろうが開始限界の達成であろうが、限界達成が強調される点で「スル」形式と異なっている。さらに言えば、「テシマウ」形式の表す限界達成が強調されるという意味は、運動の**達成点**（動詞によって達成点が終了限界である限界動詞、達成点が開始限界である非限界動詞、達成点が開始限界であるが、はっきりとした開始限界ではなく、ぼんやりとした開始限界を持つ非限界動詞に分かれている）に焦点が当てられていることだと考えられよう（達成点に焦点が当てられているという点については、動詞「仕舞う」の語彙的意味が受け継がれていると考えられており、その拡張プロセスについては第6章で詳しく検討する）。「テシマウ」形式が付け加えられた場合においては、話者の感情評価が付随しやすいのも、＜限界達成の強調＞に根差しているからであると考えられる。

このように、本稿では、金水（2000）に基づき、図10で示しているように、「テシマウ」形式の意味を＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞と想定し、前節で検討した動詞のアスペクト的特徴に合わせて「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味と主観的評価の派生について検討していく。




【図10　「テシマウ」形式の意味】

### ４．２．２＜終了限界の達成＞に解釈される条件

この節では、「テシマウ」形式の意味に基づき、＜終了限界の達成＞に解釈される条件を明らかにする。

まず、「テシマウ」形式は、その前接動詞が限界動詞、或いは限界的事態である場合、＜終了限界の達成＞に解釈される（鈴木 1998、金水 2000）。単一動作でも、繰り返しの動作でも運動の全体量が示されれば、限界的事態となり、＜終了限界の達成＞に解釈される。

（33）先日の地震で**灯籠が倒れて**しまったのですが、直すのにどれくらいの費用をみておけばいいでしょうか？　（Yahoo!知恵袋）

（34）**犬が固形石鹸を食べて**しまいました！！ 足をお風呂場で洗ってたら、人間用の固形石鹸をほんの少量食べてしまいました。　（Yahoo!知恵袋）

（35）**カビを飲んで**しまいました。30 分ほど前にペットボトルのお茶を飲みました。特に味に違和感はなかったので結構飲んでしまいました。

（Yahoo!知恵袋）

「（灯籠が）倒れる」というのは（例（33））、典型的限界動詞であるので、「テシマウ」形式は＜終了限界の達成＞に読み取れる。一方、「食べる」、「飲む」などは（例（34）、（35））、両方の特徴を持つ事態であるが、文脈に全体量（終了限界・終結点）が示されていて、限界的事態と同様であるため、「テシマウ」形式は＜終了限界の達成＞に読み取れる。

また、「テシマウ」形式の前に現れる事態は、全体量が決められた繰り返しのある事態であれば、＜終了限界の達成＞にも読み取れる。

（36）「郁子ちゃんも、そんなに小さな子供ってわけじゃないんだから、**お客さんたちがみんな帰って**しまうまでは、寝ちゃいけないよ」と言う人もいて―。

（赤川　次郎『怪談人恋坂』）

（37）（茶会の後、道具を物置にしまう場合）

**（使った道具を）入れて**しまったら、鍵をかけてください。

≒（使った道具を）全部入れたら、鍵をかけてください。

（38）（茶会に来ている客が何人もいて、皆飲んでからお茶碗を片付ける場合）

**（複数の）お客さんが飲んで**しまったら、（お茶碗を）片付けてください。

≒お客さんが皆飲んだら、お茶碗を片付けてください。

「お客さんたちが帰る」、「使った道具を入れる」、「（複数の）お客さんが飲む」などは、単一の動作が繰り返された事態であり、文脈で全体量が示されているので、「テシマウ」形式は＜終了限界の達成＞に読み取れる。

このように、「テシマウ」形式の前に現れるのが限界動詞、或いは限界的事態である場合、＜終了限界の達成＞に解釈されることが確認された。

### ４．２．３＜開始限界の達成＞に解釈される条件

この節では、「テシマウ」形式の意味に基づき、＜開始限界の達成＞に解釈される条件を明らかにする。

「テシマウ」形式は、典型的非限界動詞、或いは非限界的事態（終結点が示されない繰り返しの事態）、運動の開始を表す文的要素「から」と共起する場合、開始点重視タイプの非限界動詞においては、＜開始限界の達成＞に解釈される。

まず、「テシマウ」形式は、典型的非限界動詞においては運動の終了限界（終結点）が予め設定されないため、＜終了限界の達成＞には解釈されないのが特徴的である。典型的非限界動詞に付く「テシマウ」形式は、決まった量や時間が想起されていなければ、＜開始限界の達成＞に解釈される（例（39a）、（40a））。

（39）（お母さんがケーキを買ってきた。息子が積み木に集中しているので、動こうともしない場合）

a.　母：ママが**食べて**しまうよ。（＜開始限界の達成＞）

b.　母：ママが（全部）**食べて**しまうよ。（＜終了限界の達成＞）

（40）（お祝いパーティーの場面）

a. （お祝いパーティーで予定の開始時間を過ぎたが、まだ全員が集まっていない。主催者が他の人を待たず、先に始めると決めた場合）

主催者：もう開始時間をずいぶん過ぎましたので、とりあえず**飲んで**しまいましょうか。（＜開始限界の達成＞）

b. （パーティーのために用意されたビールを全部飲もうとする場合）

主催者：持って帰るのが面倒くさいので、皆で**飲んで**しまいましょう。（＜終了限界の達成＞）

また、繰り返される事態でも、全体の終了限界が決まっていなければ、＜開始限界の達成＞に解釈される。例えば、ドミノ倒しでドミノ牌を並べている途中、うっかり倒してしまう場面を考えてみよう。「倒れる」はふつう限界的事態だと考えられるが、ドミノ牌が次々と倒れるため、「（ドミノ牌が）倒れる」は、「部分的に倒れる（そして倒れ続ける）」或いは「全部倒れる」に解釈されうる。つまり、限界的事態である「倒れる」は、繰り返されることにより、限界的、非限界的な特徴を持つ事態となる。このため、「テシマウ」形式は「部分的に倒れる（そして倒れ続ける）」場合においては＜開始限界の達成＞に（例（41a））、「全部倒れる」場合においては＜終了限界の達成＞に（例（41b））読み取れる。

（41） a. （ドミノをうっかり倒してしまい、せっかく半分以上並べたドミノが倒れたとき）

私：あっ、**倒れて**しまった。（＜開始限界の達成＞）

b. （並べたドミノが全部倒れたとき）

私：あっ、**倒れて**しまった。（＜終了限界の達成＞）

「テシマウ」形式の表す＜開始限界の達成＞は、共起する文的要素「から」によって明確化される。「高齢者施設を一から作る」、「昼から飲む」における「から」は運動の開始を示しているため、「テシマウ」形式は＜開始限界の達成＞に読み取れる。

（42）しかし安心して任せることのできる施設、自身の目で見て納得のいく施設は、一つもありませんでした。それなら「いっそのこと、自分の親と等しく、入居する方の幸せを第一に願う高齢者施設を一から**作って**しまおう！」と思い至ったのです。　（http://kaigo.homes.co.jp/scompany/cd1683/）

（43）昼から**飲んで**しまおう。

（ http://ameblo.jp/romantickle1/entry-11709490741.html ）

次に、思考・感情を表す動詞「諦める」、「分かる」、「疲れる」などは、限界性や運動性が弱いものだと考えられているが、4.1.3.2 で論じたように、限界性や運動性においては「食べる」や「走る」などといった動詞と異なっているが、運動の開始限界に焦点が当てられているため、いわゆる非限界動詞における開始点重視タイプの動詞についた「テシマウ」形式は、＜開始限界の達成＞に読み取れる。

（44）朝ドラ『まれ』で、ついに希がパティシエの道を**諦めて**しまいました。圭太のせいです！やはり、圭太との結婚は失敗だったのでは？

（Yahoo!知恵袋）

（45）W 杯で優勝する国が**分かって**しまいました、今までのジンクスコンフェデ杯王者は優勝できない。南米開催では南米以外の国は優勝できない。外国人監督が指揮を務めた国は優勝できない。バロンドールを受賞すると優勝できない。以上を踏まえるとアルゼンチンが優勝！　（Yahoo!知恵袋）

（46）育児に**疲れて**しまいました。11 ヶ月の娘がいます。

（http://tell-me.jp/q/459067）

さらに、「笑う」、「泣く」など開始点重視タイプの非限界的事態は、＜開始限界の達成＞にしか読み取れない（例（47）、（48））。開始点重視タイプの動詞は、一定のエネルギーの蓄積や消耗のプロセスを経て、運動が瞬間的に達成されるのが特徴的である。このような動詞に付く「テシマウ」形式は＜開始限界の達成＞に解釈される。

（47）訪問先の家の猫が腹巻をしていて**笑って**しまいました。（Yahoo!知恵袋）

（48）里親探し、成功しました。親バカになってくれそうな、いい方でした。帰り、寂しくて、運転しながら**泣いて**しまいました。　（Yahoo!知恵袋）

このように、「テシマウ」形式は、前接動詞の種類と共起する文的要素によって＜開始限界の達成＞に読み取れることもある。

### ４．２．４＜限界達成＞に解釈される条件

この節では、「テシマウ」形式の意味に基づき、＜限界達成＞に解釈される条件を明らかにする。動詞の表す運動の達成点が開始限界であるが、その開始限界が漠然としており、点的な開始限界が想定されにくいため、＜終了限界の達成＞にも、＜開始限界の達成＞にも解釈されず、＜限界達成＞に解釈される。このような動詞に相当するものには、「住む」、「暮らす」、「（短大に）通う」という状態重視タイプの非限界動詞などがあり、これらの動詞に付いた「テシマウ」形式は＜限界達成＞に解釈される。

（49）野良猫が、家の裏のテラスに子猫を４匹連れてきて**住んで**しまいました。今日の朝見つけました。　（Yahoo!知恵袋）

（50）転出届も転入届も出していません、過料は免れないでしょうか？ 一人暮らししてから２週間以上たってしまいました。県外へと移ったために住民票をもらうために転出届が必要なのですが、届出を出さずに引っ越して**暮らして**しまいました。　（Yahoo!知恵袋）

（51）私も目的無く**短大に通って**しまいましたが、その中で始めたアルバイトがきっかけで接客業に興味を持ち今は接客の仕事をしています。

（Yahoo!知恵袋）

（49）～（51）は、「野良猫が家の裏のテラスに住む」、「（～で）暮らす」、「（私は）短大に通う」ことが＜終結＞でもなく＜開始＞でもなく、運動が達成されて既に運動が始まっている状態を表している。状態重視タイプの非限界的事態は、開始限界がはっき

りとしていないため、＜開始限界の達成＞に解釈できず、＜一般限界の達成＞に解釈される。＜一般限界の達成＞がさらに拡張され、perfective verb ではないが、文脈によって perfective 的意味が与えられていれば、運動が達成されるという＜限界達成＞の意味、すなわち＜実現＞を表すようになる。故に、imperfective verb であるが、文脈によって perfective 的意味が与えられていれば、「テシマウ」形式は矛盾なく付くことができ、事態の＜実現＞を表す。「テシマウ」形式は常に「～ている」の形で状態を表す動詞とは共起できないが（金田一 1947）、ある条件のもとで初めてその可能な状態が実現するという場合、或いは事態が何らかの理由や条件のもとで初めて実現するということが示されれば、「テシマウ」形式との共起が可能となる（鈴木 1998）。これは、文脈によって事態に「～ことが実現する」という perfective 的意味が与えられていれば、「テシマウ」形式との共起が可能になるということを示している。ただし、可能動詞のアスペクトについてはまだ論ずる余地がある。可能動詞は静態動詞として扱われているため（工藤 1995）、imperfective verb だと考えられる。しかし、可能動詞は、テンス的意味と「～テイル」形式では＜動き・変化＞と＜状態＞という意味的な対立があることから、恒常的に備わった属性・性質（能力）を表す場合もあれば（例（52））、もともと備わっていない能力が身に付くようになることを表す場合もある（例（53））[14]。前者の解釈になる場合は imperfective verb、後者の解釈になる場合は perfective verb だと考えられる。

（52）恒常的に備わった属性・性質（能力）を表す「泳げる」

a. 花子は泳げます。

b. *花子は泳げています。

（53）もともと備わっていない能力が身に付くようになることを表す「泳げる」

a. 平泳ぎが遅いのですが、どうやれば早く泳げますか。

（http://www.kodomo-swimming.com/391.html）

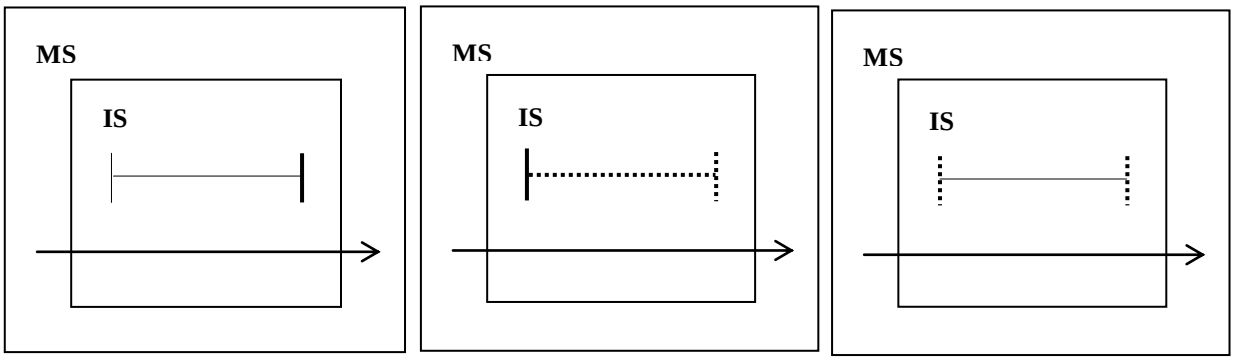
b. クロールと平泳ぎは一応泳げているのになぜ速く進まないのでしょうか？速く進むコツを教えてください！　（http://lineq.jp/q/25139574）

[14] 可能動詞は、「今の沖縄の海は泳げますか」のように、常に備わった属性・性質（能力）や能力が身に付くようになることを表すのではなく、可能性を表すこともある。

このように、もともと備わっていない能力が身に付くようになる意味に解釈される場合、「テシマウ」形式は、＜終了限界の達成＞に読み取れるのであろう（例（54））。

（54） ジムでFINISのセンターマウントシュノーケルを使って泳いでいる方を見かけました。その方はかなり巨漢なのですが、すいすい泳いでいたので、これなら私も遠泳できそうだな、と思い、私も同じシュノーケルを購入して泳ぎましたが、1500m楽々泳げました。今日は1時間で**2000m泳げてしまいました**。（教えて！goo）

一方、「違う」、「臭いがする」などは、「テイル」形式の有無で意味的な対立がないので、perfective verbではないと考えられるが、事態が何らかの理由や条件のもとで初めて実現するというperfective的意味を表すこともある。このperfective的意味は、「ある実現しないと思っていた事態が実現する」という考えに因むと考えられる。すなわち、可能動詞は、もともとperfective verbとしての用法を持つのに対し、「違う」、「臭いがする」は、事態に対する話者自身の認識或いは予想の不一致によりperfective的意味が持たされたのである。このような事態は、終了限界であろうが開始限界であろうがそもそも限界性が弱いため、それに付いた「テシマウ」形式が＜限界達成＞に解釈される。以上の検討をまとめると、「テシマウ」の表すアスペクト的意味は次のように図示することができる。




(a)＜終了限界の達成＞　　(b)＜開始限界の達成＞　　(c)＜一般限界の達成＞

【図 11 「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味】

図 11 が示しているように、「テシマウ」形式は限界動詞に付く場合、終了限界に焦点が当てられており、運動の終了限界が前景化されている（図 11（a））。非限界動詞における典型的タイプ、開始点重視タイプに付く場合、開始限界に焦点が当てられており、運動の開始限界が前景化されている（図 11（b））。非限界動詞における状態重視タイプ、或いは perfective 的意味が与えられた imperfective verb に付く場合、運動の終了限界と開始限界に焦点を当てずに、達成の意味が前景化されている（図 11（c））。ここで言っている前景化された達成は、鈴木（1998）で言及している＜実現＞に相当すると思われる。これで、前景化された達成の意味を持つ「テシマウ」形式が、それぞれ＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、＜限界達成＞というアスペクト的意味に解釈される条件を明らかにした。前景化された達成の意味は、主観的評価の派生とどのように関わっているのか、次節で検討していく。

## ４．３　＜限界達成の強調＞に誘発された主観的評価[15]

前節では、「テシマウ」形式の意味に基づき、当該形式の表わす限界達成の意味が、

[15] 「テシマウ」形式における主観的評価の派生や獲得については、文法的意味に由来するほか、動詞「仕舞う」の語彙的意味に由来するとも考えられている。「仕舞う」の表す＜収納＞には、収納されたものは簡単に取り出せないという意味が含まれており、すなわち‘difficult access to the thing put away after the action’という意味（Ono 1992）があるため、残念、がっかりや失望などといった負の感情評価と結びつきやすいという考え方がある。つまり、何かが仕舞われると、容易に取り出せないというところから、「仕舞う」の表す＜収納＞は、単なる事態の終了を表すのではなく、取り返しのつかない形で事態が終了したという意味を表すので、負の感情評価をはじめ、主観的評価の源だとも考え得る。この観点からの拡張プロセスの考察は今後の課題にする。

その前接事態の時間的特徴により、＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、＜限界達成＞に解釈される条件を明らかにした。

一方、「テシマウ」形式が使われた場合は常に主観的評価が感じられるが、この主観的評価はどこから生じるのであろうか。＜限界達成の強調＞によって持たされた含意から生じたという主張もあれば（金水 2000）、話者の持つ前提によって持たされたという主張もある（鈴木 1998）。いわゆる主観的評価は事態の実現に対する話者の持つ前提的な期待値の反映だと言えよう。また、この評価の表出は、＜限界達成の強調＞によって誘発されるため、いずれも主観的評価の派生に欠かせない存在である。この観点から捉えれば、事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、時間的側面（限界達成の強調）が前景化されるのに対し、何らかの話者の持つ前提的な期待値が示されていれば、主観的評価（話者の感情評価）が前景化されるようになると考えられる。

### ４．３．１　ニュートラル（時間的側面に焦点）

話者の感情評価が付随しやすい「テシマウ」形式は、事態に対する話者の評価が示されていなければ、時間的側面が前景化されると考えられる。この場合、「テシマウ」形式は単なる＜すぐに実現する＞という意味を表す。

（55）「うー、はらがへったな。」
おにはそう一人ごとをいうと、ごはんをたべ、すぐにねむってしまいました。　（「ジャックとまめの木」『よみきかせおはなし絵本２』）

（56）十五個あったパンを、一日で食べてしまいました。とてもおなかが張りました。私は、パンが一ばん大すきです。
（山中　和子『昭和二十一年八月の絵日記』）

（55）～（56）における「テシマウ」形式は、特に事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていないため、「（人くいおにが）ねむる」、「（わたしがパンを）食べる」という事態は、「すぐに実現する」、或いは「本当に実現する」という意味を表している。また、（57）～（59）における「テシマウ」形式は、話者（或いは聞き手）の意志で行

なう場合でも、特に事態に対する話者の評価が読み取れないため、「発表を終わらせる」、「黒瓜を食べる」、「玄米を食べる」という事態は、「すぐに実現させる」、「本当に実現させる」という意味を表している[16]。

（57）人前で上手く話せるようになるには、慣れしかないのでしょうか。
昔から発表などは緊張して、文書を早口で読み上げてさっさと終わらせてしまおうとしてしまいます。（Yahoo!知恵袋）

（58）黒瓜は三河の郷土野菜です。漬物のイメージが強いかもですが、私は切って塩振ってさっさと食べてしまいます。若者はきゅうりのような感覚でバリバリ生食しちゃえば良いと思います。ごま油を少々垂らすともっとうまいです。
（http://muranonoujo.dosugoi.net/e787766.html）

（59）玄米がとまりません。お菓子などよりはいいとおもうのですが、体にいいからと食べてしまいます。（Yahoo!知恵袋）

さらに、「テシマウ」の用法には、＜不本意＞の用法があると記述されている。＜不本意＞というのは、話者の意志でコントロールできずに、事態が実現することである。「つい」、「うっかり」、「思わず」、「なんとなく」といった文的成分とよく共起するのが特徴である。

（60）１ヶ月でお金をためたいんですが、お金があると思うとつい使ってしまいます。こんな私でもお金をためられる何かいい方法はありませんか?
（Yahoo!知恵袋）

（61）何を歌っているのか解らない年齢っぽいのですが、あまりの可愛らしさに思わず笑ってしまいました！（Yahoo!知恵袋）

（62）そんなに深酒ではないのですが、なんとなく毎日飲んでしまいます。

[16] 金水（2000）では、シテシマウは「早く」、「さっさと」、「すぐに」など、すみやかな達成を意味する副詞類とは良く結びつくが、「ゆっくり」、「じっくり」など普通以上にゆっくり行う意味の副詞類とは共起しにくいと述べられている。
（ｉ）a. ｛早く／さっさと／すぐに｝食べてしまえ
b. ?｛ゆっくり／落ち着いて／よく味わって｝食べてしまえ（金水 2000: 68）

（Yahoo!知恵袋）

（63）授業中、寝てしまいます。眠くならない方法を教えてください?

（Yahoo!知恵袋）

表された事態は非意志的に実現することであるが、負の主観的評価が表出されたものもあれば（例（60）、（62）、（63））、正の主観的評価が表出されたものもある（例（61））。これは、事態実現の意志性は、感情・評価的意味の属性と直接的に関わっていないことを示している。主観的評価の属性は、事態に対する話者の持つ前提的な期待値と直接的に関わるのであろう。このように、事態実現の意志性と事態実現に対する話者の持つ前提的な期待値とは実際に異なる側面なので別々に扱う必要がある。いわゆる非意志的な実現は、「ある事態の実現を抑えようとするが、実現する」という実現と、「ある事態の実現を抑えようとせずに、実現する」という実現に分けることができる。前者は、事態の実現が望ましくなく、その実現を抑えようとするのが普通なので、「テシマウ」形式の表す限界達成の強調によって事態の実現を抑えようとする話者の意志に敵わず、どうしても実現すると解釈されることで、負の主観的評価と結びつきやすいのであろう。後者は、「テシマウ」形式の表す限界達成の強調によって事態が意志を超えて実現すると解釈されることで、話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、特に負の主観的評価とも正の主観的評価とも結びつかないのであろう。以上から、事態が非意志的に実現するという解釈は、事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、時間的側面（限界達成の強調）が前景化される用法だと考えられる。

以上の検討から、事態の実現に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、「テシマウ」形式は事態の実現が強調されるという時間性の側面が前景化されることが明らかになった。

### ４．３．２　正の主観的評価（解決、思い切って）

「テシマウ」形式は、話し手が面倒な或いは不都合な状況を断ち切りたいと思っている文脈においては、＜解決＞、＜思い切って行動する＞という主観的評価の側面が前景化される。意志的に行なう行為、或いは意志、命令を表す形式で表されるのが特徴であ

る。

（64）こんにちは。ＰＣ初心者です。ＰＣがフリーズしてしまい強制終了してしまいました。すると、メールを送信しても送信済みアイテムに残らなくなってしまいました。本を見てもわかりません。　（Yahoo!知恵袋）

（65）パソコンが苦手な弟に「メールも出来ないのならパソコンやめてしまえ！」とハッキリ言ってしまいました。　（Yahoo!知恵袋）

（66）基本、お茶は作ったその日の内に飲んでしまってください。二日置くと味も変わりますし、雑菌がわきはじめますので。あと、ホットで入れたお茶が冷めると、渋みがかなり出てしまいますので、早めに飲まれるのがオススメです。　（Yahoo!知恵袋）

（67）（会社で起きたことに悩んでいる人の悩み相談に対する答え）
あなたが会社を捨ててしまいなさい！その男ごと その女ごと見切りをつけて捨ててしまいなさい。（中略）そんな会社辞めてしまった方がいい。
（Yahoo!知恵袋）

（68）混んでるとお昼ちょうどにお昼ごはんを食べようとしてもレストランは３０分～１時間待ちになるので、１１時には食べてしまいましょう。
（Yahoo!知恵袋）

（64）～（68）の文脈では、話者にとって不都合な事態（「PC がフリーズしたこと」、「弟はメールができないこと」、「お茶が二日置くと味が変わる、雑菌が湧くこと」、「会社で遭遇したこと」、「混雑のため、30 分～１時間待ちになること」）が起きている。そのような事態を解消するために、何らかの行為を行わなければならない（すなわち話者にとって望ましい事態を実現させる）。そのため、「（PC を）強制終了する」、「（パソコンを）やめる」、「（お茶を）飲む」、「（会社を）やめる」、「（早めに）食べる」という話者にとって望ましい事態についた「テシマウ」形式の「すぐにその事態を実現させる」という意味が、＜解決＞や＜躊躇せずに行動する＞、＜思い切って行動する＞というような正の主観的評価を生じさせる。

### ４．３．３　負の主観的評価（残念、がっかり、後悔、不都合）

「テシマウ」形式は事態の達成に焦点が置かれるので、すでに実現した事態においてはもう取り返しのつかない、まだ実現していない事態においては実現性が高くなり、本当に達成するという含みがある。これにより、話者が事態の実現が望ましくないと思っていれば、＜残念＞、＜後悔＞といった主観的評価が派生する。次の文脈において（例（69））、話者は「彼の日記を読むこと」をしてはいけないと思っている、つまり、話者にとって望ましくない事態が実現し、＜達成限界の強調＞によってもう取り返しのつかないという＜残念＞、＜後悔＞などの主観的評価を生じさせる。

（69）彼の日記を読んでしまいました。（中略）先日彼の家に行ったときに、彼がちょっと買い物に行ってる間にふと彼の日記が置いてあったので少しだけ読んでしまいました。自分でも彼の日記を読むなんて最低だ、と思いつつも読んでしまったことを後悔しています。　（Yahoo!知恵袋）

一方、まだ実現していない場合においては、「テシマウ」形式の＜限界達成の強調＞による話者にとって望ましくない事態が本当に達成する、すなわち望ましくない事態なのに実現性の可能性が高まるというところから、喜ばしくないといった主観的評価を生じさせる。

（70）宮崎駿監督引退してしまうみたいですね
わたしがジブリの作品の中で一番好きだったのは千と千尋の神隠しです！
みなさんはどの作品が好きですか？。　（Yahoo!知恵袋）

（71）（大好きな先輩が帰ろうとしている）
後輩：「もう帰ってしまうの」

（72）（出かける前に、ぐずぐずしている息子に）
母：「早くしないと、電車に遅れてしまうわよ。」

（71）～（72）の文脈から「宮崎駿監督が引退する」、「先輩が帰る」、「電車に遅れる」

という事態の実現は話者にとって望ましくないことだと分かり、これに望ましくない事態が本当に実現する可能性が高まるという意味が加えられ、＜がっかり＞、＜迷惑＞などの主観的評価を生じさせる。

ところで、「テシマウ」形式はもっぱら話者にとって望ましくない事態の実現で用いられていると思われるかもしれないが、望ましい事態の実現でも用いられる（例（73）、（74））。

（73）（なんと、１次面接で内定をもらっちゃったお話し）

なぜかわからないが、そうやってその日のうちに内定をもらってしまった。

（http://rakukatu.jp/job-hunting/superjobhunter/）

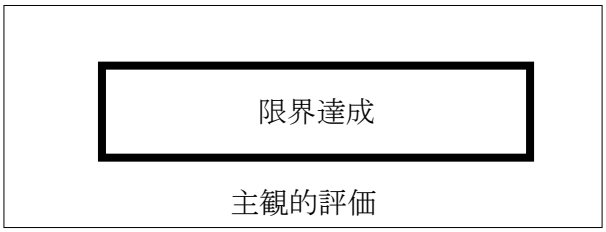
（74）（予備校の学生の質問に対する回答）

そんなことができれば、東大クラスの土台を夏休み中に作ればみんな東大に受かってしまいます。（http://okwave.jp/qa/q8197232.html）

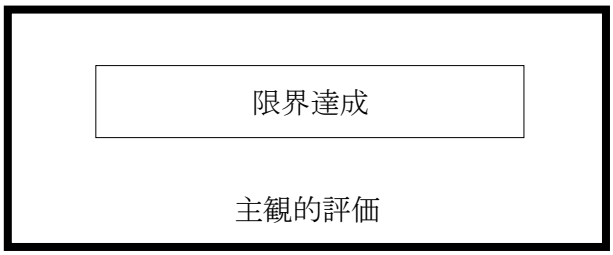
例（73）では、「内定をもらう」という望ましい事態がすでに実現した事態であり、「テシマウ」形式が達成限界の強調を表しているが、＜残念＞といった負の主観的評価が現れていない。前の文脈から、事態の実現は話者の予想にはなかったと読み取れるので、予想外の実現で驚いたという主観的評価が現れている。一方、例（74）では、「東大に受かる」という望ましい事態がまだ実現していないが、達成限界を強調する「テシマウ」形式によって、実現性の可能性が高まる。望ましい事態が本当に実現するので、特に喜ばしくない、不都合などといった話者の負の主観的評価が現れないのである。その望ましい事態が本当に実現するという話者の確信を表している。以上の検討から、主観的評価の派生は、事態に対する話者の評価と深く関わっているが、それを具現化するものは、＜限界達成の強調＞であることが明らかになった。

「テシマウ」形式が用いられた表現は、負の主観的評価であろうが正の主観的評価であろうが話者の主観的評価が存在している。比較的ニュートラル（時間的側面が焦点）でも、意味の主観性においては、「スル」形式との相違が現れるため、「テシマウ」形式は客観的なアスペクト形式として位置づけることが難しいのである。本節の検討を通し

て、「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞は、特に事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、＜達成限界の強調＞という時間的側面が前景化されるのに対し、事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されていれば、その前提的な期待値が＜達成限界の強調＞によって誘発されて主観的評価が前景化されるようになることが明らかになった。




【図 12　時間的側面が前景化される場合】




【図 13　感情評価的側面が前景化される場合】

図 12 は、特に望ましくない、望ましいといった話者の持つ前提的な期待値が示されていなければ、時間的側面（限界達成の強調）が前景化されることを示している。時間的側面が前景化される場合、＜事態の速やかな実現＞、＜事態の実現性の高い可能性＞が表わされる。一方、図 13 は、話者の持つ前提的な期待値が示されていれば、主観的評価の側面が前景化されることを示している。「テシマウ」形式の用いられた表現は、＜残念＞をはじめ、＜がっかり＞、＜解決＞、＜思いっきり＞など様々な主観的評価が現れる。これは、実現する事態に対する話者の持つ前提的な期待値が＜限界達成の強調＞によって引き出されることを示している。つまり、「テシマウ」形式の持つ＜限界達成の強調＞という意味は、様々な話者の持つ前提的な期待値を表出させる役割を果たすため、主観的評価の表出には、＜限界達成の強調＞と話者の持つ前提的な期待値どちら

も欠かせない存在である。

## ４．４　おわりに

以上の考察から、「テシマウ」形式の表す用法を次のようにまとめることができる。

1「テシマウ」形式は事態の実現に対する話者の持つ前提的な期待値が示されなければ、時間的側面が前景化される。また、前接の事態の時間的特徴により、＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、どちらにも焦点が当たらず＜限界達成＞が現れる。一方、達成される事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されれば、主観的評価の側面が前景化される。また、「テシマウ」形式の表す＜限界達成の強調＞は、主観的評価の派生の助燃剤のような役割で、事態に対する話者の持つ前提的な期待値を表出させる機能を果たしている。

2「テシマウ」形式が使われる場合、常に話者の感情評価が添えられているが、これを根拠に話者の持つ「望ましくない」と「実現しにくい」という前提（鈴木 1998）が「テシマウ」形式に入っているとは言いがたい。「テシマウ」形式は、＜残念＞と＜驚き＞の他に様々な感情評価的意味が表されるため、二つの前提にのみ関わるというのは簡略的すぎるように思われる。特定された「前提」というより、実現する事態に何らかの主観的評価が付け加えられるといったほうが適切なのではないかと思われる。

3「テシマウ」形式はマイナスの感情・評価的意味を獲得する方向で拡張してきたという調査結果に基づき、文法化の過程でよく見られる主観化の方向に沿うものだと指摘されているが（梁井 2009）、本章で明らかにした様々な感情・評価的意味は、「テシマウ」形式の＜達成限界の強調＞によって引き出された事態に対する話者の評価の現れということで、マイナスの感情・評価的意味のみ獲得したというより、事態の実現に付け加えられた＜主観的評価＞を獲得したといったほうが適切であろう。

# 第５章　日本語における事態の＜終わり＞を表す文法形式

広い意味での＜完了＞[17]を表す形式には、「－オワル・オエル」、「－キル」、「－ヌク」といった複合動詞形式（姫野 1999: 173）[18]、補助動詞形式「テシマウ」、そして助動詞形式「タ」[19]がある。＜終わり＞を表す場合において、「テシマウ」形式は、複合動詞形式「－オワル・オエル」と助動詞形式「スル」と意味的に類似している[20]。

（1）肩幅が広く胸板も厚い沼尻婦長は、ざるそばを一本も残さず食べ終えた。女店員にそば湯を持ってこさせると、音をさせてそれを飲んだ。岩波も彼女に付合って同じものを食べ終えた。　（梓　林太郎『札幌殺人夜曲』）

（2）私の家は五人家ぞくで十五個パンがあたりました。十五個あったパンを、一日で食べてしまいました。　（Yahoo!知恵袋）

（3）１日に何個でも食べて良いと聞き、チャレンジしました。初日は卵のパック全部ゆでて食べました。　（山中　和子『昭和二十一年八月の絵日記』）

時間的側面においては、（1）～（3）は「－オワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式と、それぞれ異なった形式が用いられているが、意味的には「ざるそばを食べる」、「パンを食べる」、「卵を食べる」という事態が終結したことを表わしている。

---

17 「テシマウ」の意味・用法に関して、先行研究では、完了、完遂、達成、終結、終了といった用語が使われているが、本稿では＜時間のプロセスのある行為・事態が終わりまで行なわれる＞或いは＜時間のプロセスのある行為・事態が完全に終わる＞という意味で＜完了＞を使う。

18 姫野（1999）では、動作・作用の完遂や完了を表す複合動詞では、「おわる」をはじめ、「あがる」、「きる」、「ぬく」、「とおす」、「つくす」などが取り上げられている。

19 寺村（1984）では、「ル」と「タ」は「未然（未完了）」と「既然（完了）」との対立として位置づけられている。

20 先行研究では、「テシマウ」は事態の開始、継続、終了のいずれの局面を示す表現とも共起可能であるという点で、複合動詞の形式と区別されている主張もある（鈴木（1998））。
（ⅱ）*パーティーの間中ずっと／*全部食べ始める。
（ⅲ）*好きなものから／*全部食べ続ける。
（ⅳ）*好きなものから／*パーティーの間中ずっと食べ終わる。
（ⅴ）好きなものから／パーティーの間中ずっと／全部食べてシマウ。　（鈴木 1998: 51）

ここから、事態に終結点[21]があれば、三つの形式とも＜終わり＞に読み取れることが観察された。事態に終結点があれば事態を一つの区切られたものとして捉えることが可能である。では、事態が一つ区切られたものとして捉えられる場合、三つの形式の表すアスペクト的意味はどのように異なっているのであろうか。本章では、それぞれ持つ意味的特徴を明らかにした上で、その意味的特徴が談話レベルにおいてどのように反映されているかを考察することを目的にする。

## ５．１　日本語におけるアスペクト形式の概観

本節では、アスペクトにおいて、広い意味での＜完了＞を表す「スル」形式、「テシマウ」形式、「－オワル・オエル」形式がどのように位置づけられているかについて概観する。

### ５．１．１　アスペクトを表す形式に見られる階層性

文法性の観点から見た場合、これらの形式で一番文法性の高いものが「スル（シタ）」であり（一次的アスペクト）、それに続いて補助動詞形式（二次的アスペクト）、複合動詞形式（三次的アスペクト）という順で文法性における度合いが異なることが寺村（1984）で指摘されている。

> 「アスペクトの一次的形式は、明らかに文法的形式であるが、二次的、三次的形式は、元来が動詞として使われたものが、本来の語彙的意味や文法的特徴を失うか、あるいは薄めるかして、文法形式化したものである。そのうち二次的形式、すなわち動詞のテ形に後接するイル、アルなどは数の限られた closed calss であるが、三次的形式は、結びつく本動詞の種類が相当な数になるものから、極めて限られたものにしか付かないものまで、文法形式化の度合いに大きな開きがあり、種類や数の限定もむずかしい。形式化の低いものは、つまり語彙の海にそのままつながっていくわけである。」　（寺村 1984: 118）（下線は筆者による）

[21] 本稿で言う終結点は、動詞の語彙的意味、動詞と共起する文的要素の他、文脈や事態に対する我々の持つ一般的知識も含めて考える。

そして、姫野（1999）では、二次的形式と三次的形式の文法的相違が次のようにまとめられている。

【表１　補助動詞と複合動詞の後項動詞（姫野 1999: 5）】

| | 補助動詞（例）やっている | 後項動詞（例）やり始める |
|---|---|---|
| ①種類 | 「やっている」など 15 語 | 武部（1953:473）によれば 1066 語 |
| ②動詞の間の助詞加入 | 可　やってーはーいる | 不可　*やりーはー始める |
| ③前の動詞の否定形 | 可　やらないでーいる<br>やらずにーいる | 不可　*やらないでー始める<br>*やらずにー始める |
| ④前の動詞の語彙的意味保持 | そのまま保持される | ・そのまま保持される場合<br>「やり始める」の類<br>・変化する場合<br>「やりこめる」の類 |
| ⑤転成名詞 | 不可　*やってい | 可　やり始め |
| ⑥名詞化：接尾辞「方」 | 不可　*やってい方 | 可　やり始め方 |
| ⑦共起順番 | 後項動詞　＋　補助動詞<br>やり始めて　　いる | |

これに沿って考えると、一次的形式「スル」形式は純粋な文法形式であり、二次的形式「テシマウ」形式は語彙と文法形式の中間的なものであり、三次的形式「ーオワル・オエル」形式は語彙のままだと言えよう。では、＜完了＞を表す場合においては、それぞれどのように機能するのであろうか。

「これは、多くの動詞の場合、完了を表わすには「（モウ）食ベタ」「見タ」のように、～タという一次的アスペクトの形式で事足り、ことさらに終わりを強調したければ、読ンデシマウ、見テシマウのような二次的形式もある、また継続を表わすにも、～テイルという二次的な形式がある（少数の動詞については～スルという形

だけで事態の継続を表すこともある）、それに対し、開始を表す一次的、二次的形式はないため、～ハジメルなどの三次的形式が利用されるのだ、と理解される。一次的な形式よりも二次的な形式のほうが、またそれよりさらに三次的形式のほうが、それを使用するのは、**わざわざ**そうする必要があってするわけであり、実際、そのように解釈されるが一般的であるということも、そう考えると当然のことということになる。」　（寺村 1984: 178-179）（下線は筆者による）

ここから、＜完了＞を表す場合においては、「スル」形式が基本的形式で、「テシマウ」形式と「ーオワル・オエル」形式は、わざわざそうする必要がある場合に使われるということが分かる。

では、なぜ「スル」形式が＜完了＞を意味するのであろうか。本研究ではこの理由を以下のように考える。「（モウ）食ベタ」、「見タ」が＜完了＞の意味に解釈されるのは、我々がその前に現れる事態に対する一般的解釈に関わっていると考えられる。例えば、「食事」という意味での動詞「食べる」の表す事態は、普通分化せずに解釈されるため、「スル」形式で全体的＜完了＞に解釈される。しかし、「一箱のみかんを食べる」という意味での動詞「食べる」の表す事態は、普通分化して解釈される。事態が分化して解釈されるなら、「スル」形式では部分的＜完了＞にも全体的＜完了＞にも解釈される。「テシマウ」形式は、その前に現れる事態に対する解釈が分化せずに解釈される場合は、＜完了＞を強調することを意味する。一方、事態に対する解釈が分化して解釈される場合は、部分的＜完了＞にも解釈されるが、特別な文脈がなければ、どちらかといえば全体的＜完了＞に解釈される傾向が観察される。これは、動詞「しまう」の語彙的意味が受け継がれているのだと考えられる。これで、「スル」形式と「テシマウ」形式が＜完了＞というアスペクト的意味が表せることについては説明できるが、それぞれ意味する＜完了＞は異なっているはずである。「ーオワル・オエル」形式は、終了段階だけが取り出される形式で、広い意味での＜完了＞を表す文法形式だと言える。事態に対する解釈は分化が行われようか行われまいが、「ーオワル・オエル」形式は終了段階が認識される事態に付く。時間的幅がなければ、終了段階が認識されないため、終了段階が認識される事態は時間的幅のある事態である。よって、「ーオワル・オエル」形式の

表す＜完了＞は、「スル」形式とは「テシマウ」形式とは異なっているはずである。

このように、形式的には異なっているが、三つの形式とも＜完了＞が表せるため、それぞれ意味する＜完了＞を明らかにする必要がある。（用語の一貫性のため、三つの形式の表すアスペクト的意味を＜終わり＞で表すことにする。）

### ５．１．２　＜完了＞の意味について

形式的には、三つの形式はそれぞれ別に扱われているが、意味的には、互いに重なっているところがあると指摘されている。

まず、「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式に関して、前者が客観的＜終わり＞であるのに対し、後者は主観的＜終わり＞であるという点で異なっていると指摘されている。

（4）　a. 11 時に昼食を食べ終わった 。

b. 11 時に昼食を食べてしまった。　　（日本語記述文法研究会 2007：47）

（5）「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式の違いについて

「「しおわる」は、一般的な終結時点を取り上げて表すが、「してしまう」は、その局面まで動きが進むということを表す点に重点があり、動きの終結時点だけを特に取り上げるものではない。そのため、単に動きが終結したという時点を表すだけの場合には、「しおわる」を使う。（中略）そのようなニュアンスを排除するには、「しおわる」を使う必要がある。」

（日本語記述文法研究会 2007: 47）（下線は筆者による）

以上の説明から、「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式は、感情評価的側面においては異なっているが、時間的側面においては特に異なっていないように読み取れる。しかし、次のような例文では、両形式を置き換えてみると（例（6）’）、不自然に感じられる。

（6）2 歳半と 7 ヶ月の猫を飼っていて、餌は成猫用と子猫用をそれぞれ与えてま

すが、子猫用の餌の方がおいしいようで、成猫もまず子猫用の餌を食べよう（と）して成猫用の餌を食べずに、子猫が食べ終わる（の）を待って子猫用の餌を食べてしまいます。　　（Yahoo!知恵袋）

（6’）？（前略）成猫もまず子猫用の餌を食べよう（と）して成猫用の餌を食べずに、子猫が食べてしまう（の）を待って子猫用の餌を食べ終わります。

（6）の「食べ終わる」は、「（餌を）食べる」という動作が終わることを表しているのに対し、「食べてしまう」は、「（残りの餌を全部）食べる」、「（残りの餌の一部を）食べる」という事態が実現することを表している。両者を置き換えると（例（6’））、不自然に感じられる。この文脈においては、「子猫が食べる」という事態が終わったあと、「成猫が食べる」という事態を表すので、事態（「子猫が食べる」）の終わりを明示せねばならない。「テシマウ」形式は、＜終了限界の達成＞を表すことができるが、事態の終了限界が明示されず、＜終結＞の解釈が保証されなくなったため、例（6’）が不自然に感じられるのであろう。このように、二つ以上の事態の生起順番を述べる場合、先に終わる事態は「テシマウ」形式より「－オワル・オエル」形式で表すほうが適切であると思われる。これは、「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式は、感情評価的側面のみではなく時間的側面においても異なっていることを示している。

一方、「テシマウ」形式と「スル」形式の相違は、次のように指摘されている（前例再掲）。

（7）りんごを一度に五個食べてしまった≒りんごを一度に五個食べた。

（8）（子供が月見だんごをつまみ食いするのを陰で見ていて）
あ、食べちゃった≒あ、食べた（どちらも、まだ食べ続けてよい）
（金水 2000: 67）

（9）「ル（タ）」と「テシマウ」の違いについて
「ここでは、シテシマウの「しまう」は、限界をあえて乗り越える、という意味を付け加えると考えておこう。すなわち、シテシマウはスルの限界達成をさらに前景化した表現なのである。もともと動詞自身には限界を達成する

意味が含まれているのだから、それに「しまう」を付加することによって、限界達成の意味が強調されるのである。」

（金水 2000：68）（下線は筆者による）

（7）は＜終了限界の達成＞を、（8）は終了限界を示していないため、＜終了限界の達成＞か＜開始限界の達成＞かを表している。金水（2000）の指摘通り、「テシマウ」形式は時間的側面では限界達成の強調という点で「スル」形式と異なっていると思われる。次の例（10）は、限界達成の強調ではなく、高橋（1969）で指摘されている過程のおわりとして行われる動作が実現するという用法である。同じ文脈においては、「スル」形式と取り替えてみると、同じ効果が表せるのであろうか。一連の出来事からなる事態では、「とうとう」という要素によって最後にしっぽがちぎれることが実現するという意味が表されているが、「テシマウ」形式が使われている（10’）は区切りとしての機能を果たすのに対し、「スル」形式が使われている（10）は区切りとしての機能を果たせない。

（10）（前略）

でも、だんだんがまんができなくなってきました。

「もうだめだ。」

さるはしっぽを川からひきあげようとしました。でも、しっぽは川にこおりついて、とれません。

「ううん、ううん。」

さるはかおをまっ赤にして、しっぽをひきあげようとしました。

そして、とうとう、ぱちん！と音がして、しっぽがちぎれてしまったのです。

（「しっぽのつり」『CD できくよみきかせおはなし絵本２』）

（10’）そして、とうとう、ぱちん！と音がして、しっぽがちぎれたのです。

以上で見たように、「ーオワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式はそれぞれ複合動詞形式、補助動詞形式、助動詞形式として扱われており、アスペクト的

意味においては、終了限界のある事態について表される＜終わり＞が共通している。しかし、例（6’）と例（10’）からそれぞれ意味する＜終わり＞が異なっていることが観察された。この三つの形式の意味する＜終わり＞の違いを明らかにする上で、それぞれ意味する＜終わり＞が談話レベルでどのように機能するかについて体系的な説明が求められる。

## ５．２　各形式における前接事態の特徴

同じ動詞と動詞の接続であるが、前接動詞との連結関係から見れば、複合動詞形式「－オワル・オエル」形式[22]は、補助動詞形式「テシマウ」形式より緊密度が高い。

後項動詞の意味の独立性から見れば、複合動詞形式は語彙的意味が濃いのに対し、補助動詞は語彙的意味が薄くて文法的意味を表す形式に発展した。いろいろな面で相違が現れるが、アスペクトの面では、〔降っている：降り続く〕、〔書いてしまう：書き終わる〕、〔降ってくる：降りだす〕に共通性があり、そして類似の場合は、複合動詞のほうが文語的で、意味も限定されている傾向にあると指摘されている（姫野 1999: 6-7）。例えば、本章で扱っている「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式について、「「書いてしまう」と「書き終わる」は、ほぼ同じ事象に関する表現である。しかし、「～てしまう」が「葉が散ってしまった」、「うっかり間違った字を書いてしまった」のように自然現象を含む無意志的現象にも（喪失感という特別なニュアンスとともに）広く使われるのに対して、「～終わる」は、意志的な行為の完了・完成にのみ使われるという限定がある。」（姫野 1999: 7）と説明している。この説明により、事態の完了・完成を表す場合、両形式とも用いられるという共通性があることが分かる。このことから、「－オワル・オエル」形式と「テシマウ」形式との違いも大まかに捉えることができるが、両形式の表す意味の連続性を考える場合、更なる検討が必要である。

[22] 完遂や完了を表す複合動詞形式には、「－オワル・オエル」、「－キル」、「－トオス」などがあるが、本動詞として使う場合は、「オワル・オエル」だけが時間的意味とかかわり、他の形式はほとんど具体的意味を持ち、時間的意味に転用されたものである。また、前項動詞と後項動詞の自立語としての独立性から見れば、「－オワル・オエル」が前項動詞に付いてアスペクトを表すので、前項動詞について時間的意味を添えるものとしての存在である。さらに、アスペクトを表す「ハジメル」「ツヅケル」「オワル・オエル」は、造語力が高く、時間的プロセスと関わらない語を除けば、ほとんどの語と結合することができる（ただし、意志的行為の終了のみを表す）（姫野 1999: 31）。これらの特徴から、補助動詞形式「テシマウ」に割と近いので、比較対象として取り上げることにした。

### ５．２．１　複合動詞形式「－オワル・オエル」

日本記述文法研究会（2007: 38-39）によれば、「－オワル・オエル」形式は、運動の終了段階を表すという。このため、その前に現れる動詞の表す事態は終了段階が存在する運動、いわゆる継続期間を持つものに限られる。また、継続期間があっても、終了段階が想起されない運動であれば、「－オワル・オエル」形式を用いることができない。さらに、終了段階が設定できないものや、感情・感覚、思考活動を表す動詞も「－オワル・オエル」形式にならない。

（11）継続期間を持つ動詞

佐藤は夕食を食べおわった。

この小説はゆうべ読みおわった。

宿題をしおわったら、テレビを見てもいいですよ。

*ゴキブリが死におわった。

*田中はそのことを知りおわった。

（12）継続時間と終了段階を持つ動詞

*山本は走りおわった。

その選手は予定の距離を走りおわった。

（13）終了段階が設定できない動詞、感情・感覚や思考を表す動詞

*佐藤は酔いおわった。

*鈴木はそのことを悲しみおわった。

*田中はそれはおかしいと思いおわった。

（（11）～（13）は日本語記述文法研究会（2007: 38-39）より）

ここから、「－オワル・オエル」形式の前に現れる事態の時間的特徴は、終了段階（終結点）と時間的な幅の存在であることが分かる。終了段階（終結点）と時間的な幅がある事態は、「－オワル・オエル」形式と結びつき得る。終結点のある運動・事態が限界的事態として理解されると考えられるが、では時間的な幅はどのように理解されるのであろうか。金田一（1950）の分類によれば、時間的な幅のある動き・事態は、「食べる」、

「走る」、「読む」といった継続動詞類に、時間的な幅のないものは、「死ぬ」、「壊れる」、「折れる」といった瞬間動詞類に当たる。しかしながら、継続動詞であっても文脈によって瞬間的事態として捉えられることがある。同様に瞬間動詞であっても文脈によって継続的事態として捉えられることもある。

（14） a. 彼は夕食を１時間で食べた。 （継続的出来事）

b. 彼は刺身を一口で食べた。 （瞬間的出来事）

「夕食を食べる」という事態は、一般的にある時間的持続のあることとして認識され、「１時間」という文的要素が加わったことによって時間的な幅のある事態であることが明示されている（例（14a））。一方、「刺身を食べる」という事態は、刺身を一枚口に入れると想定されているので、「一口で」という文的要素によってあまり時間的な幅のない事態であると解釈される（例（14b））。ところが、数枚の刺身を食べる場合はどうなるのだろう。われわれの持つ知識から考えれば、数枚の刺身を食べるのにかかる時間は、一つだけ食べる場合より長いだろう。（数枚の刺身を）一口で食べるにせよ、何回分けて食べるにせよ、それが時間的な幅のある事態として認識される。このように、出来事の時間的な幅の有り無しは、上の例が示しているように、文的要素や話者の持つ一般的知識といった言語以外の要因も大きく関わってくる。

この考えに沿って、「－オワル・オエル」形式の前に現れる時間的な幅のある事態を考えていく。例えば、「モンブランを食べる」という事態を考えよう。「モンブランを一口食べる」は、一口（全体の一部）なのでふつう時間的な幅が想起されず、瞬間的出来事として認識される（例（15a））。この場合、「－オワル・オエル」形式が後ろに付くのは無理であろう（例（15b））（ただし、モンブランが苦手な人がいるとして、一口の分を口に入れて呑み込むまで時間がかかる場合、継続的出来事として解釈されることが可能である）。一方、「モンブランを一口で食べる」は、ふつうモンブランを丸ごと食べると解釈されるので、一口食べるより時間がかかると想起される（例（15c））。これで、「－オワル・オエル」形式と自然に共起できる。「モンブランを３時間で食べ終わった」は、複数或いはボリュームがあるモンブランを食べる場面（あるいはモンブ

ランが苦手な人）が想起される（例（15d））。つまり、モンブランがなくなるまで食べるに時間がかかり、時間的幅のある出来事として認識されるため、「－オワル・オエル」形式と自然に共起できる。

（15） a. モンブランを一口食べた。 （瞬間的出来事）

b. ?モンブランを一口食べ終わった。 （瞬間的出来事）

c. モンブランを一口で食べ終わった。 （継続的出来事）

d. モンブランを３時間で食べ終わった。 （継続的出来事）

また、瞬間動詞だと考えられている「死ぬ」、「払う」、「倒れる」には、時間的幅がないので「－オワル・オエル」形式が付かないはずだが、以下のように付く場合もある。

（16）ローンを払い終えたマンションで管理費が五万もかかるものなのでしょうか。 （Yahoo!知恵袋）

（17）無事ドミノが全て倒れ終わった時には、みんなの笑顔と爽快感と達成感で今までのドミノを並べた苦労の記憶が吹っ飛びます。

（http://mediaconcierge.blogspot.tw/2012/03/blog-post_7775.html）

（18）（前略）

英雄の英雄らしからぬ動揺と感傷に、男はゆるりと口元を解いた。

「ランサー」

ひゅう、と細い呼吸音でも、必死に必死に吸い込んだのだとわかっているから。

英雄は黙って眼下の男の言葉を待つ。

死に行く男はほんの僅かに唇を歪め、無骨でいびつな顔になりながら、それでも英雄に笑いかけた。（中略）

男は来るはずのない日を夢見ながら、最期の息を吸い込んだ。

―やがて完全に死に終わった体を横たえて、英雄は立ち上がった。

（http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=572399）

「ローンを払う」という事態は、一括払いの場合もあるが、分割払いのほうが普通であろう。分割払いの場合、時間的な幅が想起されるため、「ーオワル・オエル」形式が付くことができる。「倒れる」という事態は、単一動作の場合では時間的な幅がないと考えられているが、ドミノ大会での「ドミノが倒れる」という事態の場合では、時間的な幅が想起される。「死ぬ」という事態は、心拍停止の瞬間が捉えられれば、時間的な幅がないかもしれないが、心拍が停止して血液が流れなくなって体が冷たく、そしてかたくなるという過程が捉えられれば、時間的な幅が想起されうるため、「ーオワル・オエル」形式が付くことができる。一方、終了段階（終結点）が設定しにくいと考えられている思考や感情を表す動詞「考える」、「思う」、「悲しむ」、「喜ぶ」、「怒る」などには「ーオワル・オエル」形式が付かないと考えられているが（森山 1983）、感情が消えるのは動作が終わる場合ほどはっきりとしていないが、終結点があるはずである。そのため、思考や感情も一つの区切られた事態として捉えることができ、この上で時間的な幅が想起されれば、「ーオワル・オエル」形式も自然に付けることができる（例（19）～（23））。

（19）意図的する・しないにかかわらず、世の中にはまやかしの情報であふれています。中には普通に考えてもおかしいものも多数あるので、基本は人に頼らず、自分の頭で考えることだと思います。（考え終わった**後に**人と議論するとなおよい）（Yahoo!知恵袋）

（20）少しでもやりたくないなぁと思うと、すごく心のそこから嫌だと思い終わる**まで**すごく嫌だと思い続けてしまいます。（Yahoo!知恵袋）

（21）失恋して**何日で**悲しみ終わった？（Yahoo!知恵袋）

（22）ひととおり喜び終わった**あと**、スタンド下で記念写真を撮っていました。みんな盛り上がってるなあ。（http://www.consadole.net/akik/article/1388）

（23）子犬の噛みぐせについて質問です。

（中略）これまでに、無視する、強く低い声で叱る、マズルを掴んで怒るな

どやってきましたが、怒っている間もしっぽをブンブン振っていて怒り終わった**あと**もまた噛み付いてきます。　（Yahoo!知恵袋）

以上の検討を通し、「－オワル・オエル」形式の前に現れる事態は、終結点によって区切られ、時間的な幅があるという時間的特徴を持つということを明らかにした。つまり、継続動詞であろうと瞬間動詞であろうと、表された事態が一つの区切りのあることとして捉えられれば、そしてその区切られた事態に開始から終了まで時間の経過が想起されれば、終了段階に焦点を当てる余裕が出るため、「－オワル・オエル」形式を付けることができるのである。

### ５．２．２　補助動詞形式「テシマウ」

「テシマウ」形式は、時間的プロセスが想起される事態を表す動詞であれば、付くことができる。運動動詞や変化動詞（感情や思考を表す動詞）の表す perfective event はもちろん、状態動詞の表す imperfective event でも、その状態が実現するという＜実現＞の意味が与えられ、perfective event に解釈される場合は、時間的プロセスが想起される事態となる。

（24）a. たくさん書類があったが、がんばって 3 時までに全部書いてしまった。

（日本語記述文法研究会 2007: 47）

b. 以前の大型台風でベランダについている災害用非難扉が壊れてしまいました。この場合だれの負担で修理するかを教えて下さい。

（Yahoo!知恵袋）

c. 遊びに行く前に、先に勉強してシマオウ。

遊びに行く前に、先に勉強する。－*→　勉強を終わらせてから、遊びに行く。（この語用論的な推論により事態に終結点が設定される）

（鈴木 1998: 55）

（25）a. （花子が、練習してみてもなかなか泳げないという状況で）

スパルタ式のあのスイミングスクールに通えば、花子は一週間で泳げて

シマウよ。　（鈴木 1998: 52）

b.（違う世界に生きているものだから）僕と太郎は考え方が違ってシマウ。

（鈴木 1998: 53）

（24）は＜終結＞に解釈されるのに対し、（25）は＜終結＞に解釈されず、＜実現＞に解釈される。要するに、「テシマウ」形式が＜終結＞に解釈されるには、その前に現れる事態に終結点が必要である。「（書類を全部）書く」（例（24a））、「（災害用非難扉が）壊れる」（例（24b））、「（少年が）驚く」（例（24c））は、終結点のある事態であるため、＜終結＞のアスペクト的意味に解釈される。「花子は泳げる」（例（25a））、「考え方が違う」（例（25b））は、発話時点の有り様を意味しているのではなく、これから何らかの変化が起こることを意味している。もっといえば、「泳げない状態から泳げる状態へ」、「臭いがしない状態から臭いがする状態へ」、「違いがない状態から違いが生じた状態へ」という変化がこれから起こることを意味している。状態の変化が起こることは、事態が始まることとも考えられるため、（25）は＜終結＞には解釈されず、＜実現＞に解釈されるのであろう。以上から、動詞の表す事態が＜動き・変化＞か＜状態＞かは、単に語彙の意味によっては判断できず、事態に対する話者の解釈も関わることを改めて確認した。

一方、「テシマウ」は事態の時間的な幅とはどのように関わっているのであろうか。

（26）　a. モンブランを一口食べてしまった。　（瞬間的事態）

b. モンブランを３時間で食べてしまった。　（継続的事態）

瞬間的出来事（例（26a））にも、継続的出来事（例（26b））にも自然に付くことは、「テシマウ」は前接事態の時間的な幅の有無とは直接に関わっていないことを示している。金水（2000）では、「「テシマウ」は、終了限界のある事態であれば終了限界の達成に、終了限界のない事態であれば終了限界の達成か開始限界の達成かどちらかに読み取れる」と指摘されている。これに従えば、「モンブランを一口食べる」（例（29a））、「（全部の）モンブランを食べる」（例（29b））は、終了限界があるため、終了限界

の達成に解釈される。これにより、瞬間的事態であろうが継続的事態であろうが、perfective event であれば「テシマウ」形式が接続できることが明らかになった。そして、接続して表されたアスペクト的意味は、その前に現れた perfective event の時間的特徴によって決められることも特徴的である。これは、「テシマウ」形式は動詞としての語彙的意味＜終わり＞が薄くなったため、＜終了限界の達成＞を表す標識から＜限界達成＞を表す標識になったのだと考えられている（梁井 2009）（「テシマウ」形式の意味の希薄化プロセスは第 6 章で検討する）。

### ５．２．３　助動詞形式「スル」

「スル」形式は述語のタイプを選ばず、perfective event と imperfective event に付くことができるものである。これは、「スル」形式の文法形式化の度合いが複合動詞形式「−オワル・オエル」と補助動詞形式「テシマウ」より高いことを表している。imperfective event に接続する場合は、過去にあった状態・性質・属性を表すが、perfective event に接続する場合は、過去にあった事態、或いは事態の完了を表す。＜完了＞の意味に関しては、寺村（1984）では＜完了＞を表すいちばん根本的な形式として「スル」形式が位置づけられている。確かに、寺村（1984）の指摘のように、「（モウ）食ベタ」や「見タ」は、タ形のままで＜完了＞を表している。しかし、タ形自体が＜完了＞というアスペクト的意味を表すのか、それともその前の事態との関連で＜完了＞に解釈されるのかはまだ論ずる余地がある。特別な文脈（会話場面）がない限り、「食べる」は単に動作ではなく、「食事」というイベント的意味に解釈されている。そのため、「（モウ）食ベタ」はわれわれの持つ社会通念における食事時間の前後に発される場合、「（朝食/昼食/夕食）を食べる」という「食事」がすでに終わったということを意味する（例（27））。「見る」という事態も同じように、映画や番組などを見る場合にはふつう分化して解釈されないため、映画や番組が終わる時点で事態がすでに終わったということを意味する（例（28））。

（27）（午後 1 時）

同僚：お昼食べた?

私　：ええ、食べた。（＜完了＞）

（28）（宮崎駿の新作が上映中）

友達：宮崎駿の新作はおもしろそう。見た?

私　：ええ、見たよ。とてもおもしろかった。（＜完了＞）

ところが、「食べる」という事態が分化して解釈される場合は、タ形だけで事態の＜完了＞の解釈が保証されなくなる。例えば、海外から持って帰ったチョコレートを友人からもらい、もらった次の週に会ったときにその友人に「（チョコレートを）食べた」と聞かれたという場面を考えよう。

（29）（友人にチョコレートをもらった場合）

友人：食べた?

私　：ええ、みんなで食べた。おいしかった。ありがとう!

（部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞）

一つの箱には複数のチョコレートが入っているのがふつうである（もちろん箱に一つしか入っていない場合もある）。「ええ、食べた。おいしかった。」と答える場合、全部食べたか、味見だけで一つ食べたかがはっきりと分からない。つまり、「（チョコレートを）食べる」という事態が、分化して解釈されるか、分化せずに解釈されるかはこれだけで判断できない。いずれも＜完了＞に解釈されうるが、前者の場合は部分的＜完了＞に、後者の場合は全体的＜完了＞に解釈される。また、ドラマの DVD を見る場合も、全部見るまで「見る」という事態が何回も繰り返されると想起されるため、全体的＜完了＞にも部分的＜完了＞にも解釈される。

（30）（韓国ドラマの DVD を見る場合）

友達：この前貸した DVD 見た?

私　：ええ、見た。おもしろかった。

（部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞）

ここから、perfective event が分化せずに解釈される場合、タ形は事態の完了を意味するが、事態が分化して解釈される場合、タ形の表すアスペクト意味は部分的＜完了＞と全体的＜完了＞に分化されることが分かった。「スル」形式が＜完了＞を表す最も根本的な形式だとされているのは、その前に現れる perfective event が分化せずに捉えられるためであろう。このように、タ形の前に現れる perfective event の特徴は、その事態が丸ごと捉えられることだと言えよう。

ところで、「スル」形式と「テシマウ」形式は、時間的側面においては、限界達成の前景化で異なっていると指摘されているが（金水 2000）、事態が分化して解釈される場合においても、両形式に異なりが現れる。

（31）（友人にチョコレートをもらった場合）

友人：食べた?

私　：ええ、おいしすぎで、みんなで食べてしまった。≒全部食べた。ありがとう！（全体的＜完了＞）

「スル」形式では、部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞に解釈されるのに対して（例（30））、「テシマウ」形式では、特別な文脈がない限り（例えば、ダイエット中だが、チョコレートが大好きなので我慢できずに食べた）、全体的＜完了＞に解釈される（例（31））。

また、「見る」という事態を考えよう。ドラマは映画のように 2 時間程度で終わるものではなく、ストーリーを分割して作られたものである。そのため、同じ「見る」という事態であるが、「映画の DVD を見る」と「ドラマの DVD を見る」では、事態の分化解釈において違いが現れる。前者は普通分化して解釈されないのに対し、後者は分化して解釈されやすいであろう。分化して解釈されない場合、タ形だけで＜完了＞に解釈されるが（例（32））、分化して解釈される場合、タ形だけの場合は部分的＜完了＞か全体的＜完了＞かに解釈されるのに対し（例（33a））、「テシマウ」形式では、全体的＜完了＞に解釈されやすい（例（33b））。

（32）友人：貸したあの映画の DVD 見た?

私　：ええ、見<u>た</u>。本当に面白かったね。（＜完了＞）

（33）友人：貸したあのドラマの DVD 見た?

a. 私：ええ、徹夜で見<u>た</u>。本当に面白かったね。

（部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞）

b. 私：ええ、徹夜で見<u>てしまった</u>。≒全部見た。本当に面白かったね。

（全体的＜完了＞）

さらに、「ローンを返す」という事態を考えよう。ローンを借りた場合、分割して返済するのが普通であろう。よって、「（ローンを）返す」という行為は何回も繰り返されることが想起されるため、分化して解釈されやすい事態である。全体量が明らかでない場合、「スル」形式だけでは、借りた金額の部分だけ返すか全部かという部分的＜完了＞か全体的＜完了＞かに読み取れる（例（34a））。「テシマウ」形式は、借りた金額を全部返したという全体的＜完了＞に読み取れる（例（34b））。

（34）妻　：車のローンを返した？

a. 夫：うん、返し<u>た</u>。（部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞）

b. 夫：うん、返し<u>てしまった</u>。≒全部返した。（全体的＜完了＞）

「（ビールを）飲む」という事態はどうであろう。1 ケースの缶ビールをもらったとして、一回で飲んでしまうこともあるが、何回かに分けて飲む場合もある。これは、「（ビールを）飲む」という事態が、分化せず解釈されることもあれば、分化して解釈されることもあるということである。このため、「スル」形式だけでは部分的＜完了＞か全体的＜完了＞かに読み取れる（例（35a））。「テシマウ」形式は、1 ケースのビールを全部飲んだという全体的＜完了＞に読み取れる（例（35b））。

（35）（一週間前、友人から 1 ケースのビールをもらった。）

友人：あのビール飲んだ？どうだった？味は。

a. 私：うん、みんなで飲ん<u>だ</u>よ。おいしかった。

（部分的＜完了＞或いは全体的＜完了＞）

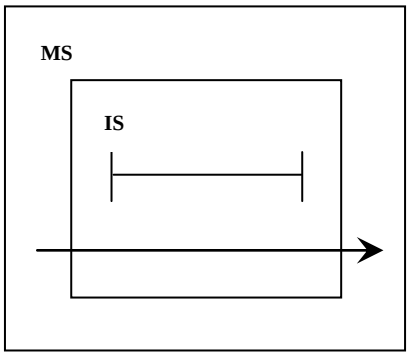
b. 私　：うん、みんなで飲んでしまったよ。≒全部飲んだ。おいしかった。

（全体的＜完了＞）

以上の検討から、事態の解釈は我々が持つ一般的知識に依存する部分があること、事態への解釈は、事態に付いた文法形式の表すアスペクト的意味にも影響を与えることがあることが分かった。事態が分化して解釈されない場合、＜完了＞に解釈されるが、分化して解釈される場合、部分的＜完了＞にも全体的＜完了＞にも解釈されうる。このように、「スル」形式の前に現れる事態は、部分か全体かに関わらず、一つのまとまりとして捉えられるという特徴を持つことが明らかになった。また、事態が分化して解釈される場合では、「スル」形式は事態の部分或いは全体に焦点を当てることができるのに対し、「テシマウ」形式は事態の全体に焦点を当てる傾向が見られた。これは「テシマウ」形式に、動詞「しまう」の語彙的意味が受け継がれているためだと考えられる。

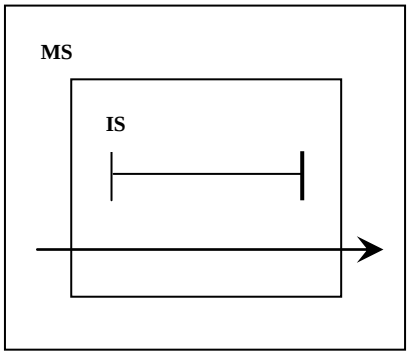
### ５．２．４　それぞれ意味する＜終わり＞

以上の検討から、三つの形式が＜終わり＞に解釈されるには、事態が一つの区切られたものとして捉えられるかどうかが重要であると言えよう。これを言い換えれば、事態が区切られたものとして捉えられれば、「－オワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式が、＜終わり＞に解釈されうるのである。では、同じ＜終わり＞を意味する場合、これらの形式はどのように異なっているのであろうか。認知文法では、時間的プロセスのある事態、即ち perfective event を次のように規定している。＜終わり＞の意味が表されている場合、三つの形式とも終了段階がプロファイルされているが、開始段階と継続段階との関係でそれぞれの＜終わり＞が表されている。



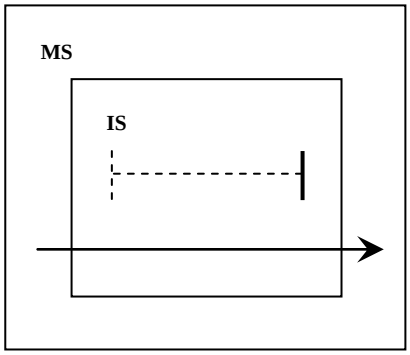

【図 1　perfective verb】

まず、「－オワル・オエル」形式の表す＜終わり＞は、開始段階と継続段階をベースに終了段階だけがプロファイルされている。



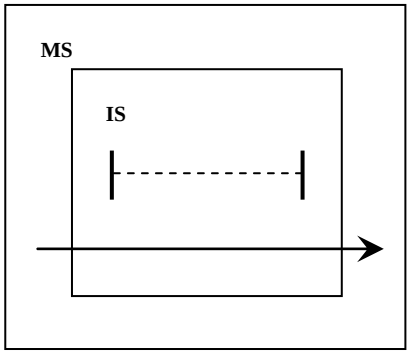

【図 2　「－オワル・オエル」形式の表す＜終わり＞】

また、「テシマウ」形式の表す＜終わり＞は、「－オワル・オエル」形式と同じように終了段階がプロファイルされているが、開始段階と継続段階が捨象されている点で異なっている。




【図３　「テシマウ」形式の表す＜終わり＞】

さらに、「ル・タ」形式の表す＜終わり＞は、終了段階がプロファイルされているが、開始段階もプロファイルされている点で、「－オワル・オエル」と「テシマウ」と異なっている。継続段階が捨象されている点で「テシマウ」と共通している。




【図４　「スル」形式の表す＜終わり＞】

三つのアスペクト的意味を表す文法形式は、形式的には、複合動詞、補助動詞、助動詞と分けられており、また文法形式化の度合いも異なっているため、それぞれ別に扱われてきたが、意味的には、＜終わり＞が意味される点で共通している。これは、三つの文法形式が、区切られたものとして捉えられる事態においては＜終わり＞がプロファイルされているが、ベースと合わせて考えれば、それぞれ異なる意味的特徴を持つことを示している。それぞれが持つ意味的特徴は、文レベルでははっきりと見分けることができないが、談話レベルでは、それぞれ機能すると考えられるので、5.3 節では談話レベ

ルでの意味・機能を考察する。

## ５．３　＜終わり＞を表す形式のすみわけ

2節の検討を通し、それぞれの形式が＜終わり＞を意味する場合、それぞれ異なる意味的特徴を持つことを明らかにした。異なる意味的特徴を持つため、それぞれが談話レベルでどのように機能するかにも異なる傾向が見られると考えられる。本節では、単一行為・事態、一連の行為からなる事態、繰り返される行為・事態という観点から、＜終わり＞を表す形式のすみわけを検討していく。

### ５．３．１　単一（一回の）行為・事態の＜終わり＞

ここ言う単一行為・事態とは、他の事態との関連性が低く、一連の行為に解釈されないもので、繰り返しのないものである。次の文脈にある「Hがシゲさんの分の肉を食べる」（例（36））、「クチコは水溜りに腰まで浸かる」と「青色が紅色に変わる」（例（37））、「（カポックが）死ぬ」（例（38））は単一事態だと考えている。

（36）盛夫が「教えたり手伝ってもらう仕事がなくなったから、淋しいけどなあ」といった。シゲさんは黙って頷いていた。お別れの食事会を、最後の日の夜にやった。すき焼きだったのに、シゲさんはあまり食べなかった。Hは悲しがりながら、シゲさんの分の肉を食べてしまった。

（妹尾　河童『少年H』）

（36’）（前略）Hは悲しがりながら、シゲさんの分の肉を食べた。

（37）次の日も大雨であった。クチコは良い返事をもらえるまではと、雨の中をイワノヒメの部屋の前にひれ伏している。そのうち雨がひどくなって、クチコは庭の水溜りに腰まで漬かってしまった。紅色の紐の付いた、山藍で青く染めた衣服を着ていたが、水溜まりに漬かって青色がすっかり紅色に変わってしまった。　（石川　逸子『てこな：女たち』）

（37’）（前略）クチコは庭の水溜りに腰まで浸かった。（中略）水溜りに浸かっ

て青色がすっかり紅色に変わった。

（38）カポックの根がなくなっていました。土換えをしようとすると根がなくなっていました。完全に死んでしまったのでしょうか。再生させることは可能でしょうか？　（Yahoo!知恵袋）

（38’）（前略）完全に死んだのでしょうか。

（38）は単一事態で、（36）と（37）は、複数の事態が述べられているが、その複数の事態はそれぞれであり、一つのまとまりとしては考えにくいため、単一事態として考えられる。このような単一行為・事態に付いた「テシマウ」形式は、時間的側面においては「スル」形と類似する意味を持っている。（36）～（38）における事態はすべて限界的事態であるため、「スル」形式は事態の完了を、「テシマウ」形式は事態の完了の強調を意味している。一方、単一事態であるが、時間的幅が想起されれば、三つの形式で表わされる＜終わり＞は異なるものの、互いに置き換えることが可能である。

（39）（例（18）を再掲）（前略）

英雄の英雄らしからぬ動揺と感傷に、男はゆるりと口元を解いた。

「ランサー」

ひゅう、と細い呼吸音でも、必死に必死に吸い込んだのだとわかっているから。英雄は黙って眼下の男の言葉を待つ。

死に行く男はほんの僅かに唇を歪め、無骨でいびつな顔になりながら、それでも英雄に笑いかけた。（中略）

男は来るはずのない日を夢見ながら、最期の息を吸い込んだ。

―やがて完全に死に終わった体を横たえて、英雄は立ち上がった。

（http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=572399）

（40）身体の重みで肛門からゆっくりと杭が突き刺さって、結局口まで抜けたわけだが、すっかり死んでしまうまでに時間がかかった。

（村上　春樹『スプートニクの恋人』）

（41）（蜂の標本の作り方）

では、捕まえたハチさんの腰をピンセットでガッツリ掴んで注射器ではい注入！！！おおっと、まだ油断禁物！完全に死ぬまで手出しはなりません。完全に死んだら、各関節を動かしておきます。

（http://www.mushi-kyoshitu.com/hyohon/h_15.html）

「死ぬ」という事態は、時間的な幅がない瞬間的事態であるため、「－オワル・オエル」形式は付くことができないと考えられている。しかし、（39）のように「死ぬ」という事態が、一瞬息を引き取る様子が描かれているのではなく、息がなくなるまで刻々と変化して事態が達成されるまでのが描かれているため、時間的幅が想起される。時間的幅のあるものとして捉えられれば、「－オワル・オエル」形式を自然に付けることができる。そして、（40）と（41）のように「テシマウ」形式、「スル」形式で＜終わり＞を示すことができる。このように、単一事態が描かれた場合、「－オワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式という三つの形式は、区切られた事態の焦点の当て方において異なっていることが明らかになった。

### ５．３．２　一連の行為・事態からなる事態の＜終わり＞

一連の行為とは、複数の行為が一つ一つ独立して存在しているが、広く捉えられれば、一つの大きな事態に含まれている部分であることを言う。例えば、次の例で示しているように、「人民公園を出発する」、「バイクに都嶠山へと走ってもらう」、「公道から脇道に入る」、「山道を進んで行く」、「諦める」などの行為は『運転』（例（42））という大きな事態に、「思考を傾注する」、「暗中模索する」、「考える」、「匙を投げる」などの行為は、『研究』（例（43））という大きな事態に含まれている。一連の行為における結末としての行為（「諦める」、「匙を投げる」）の完了によって、全体的な事態（『運転』、『研究』）が完了することを表す。

（42）人民公園を出発し、バイクには都嶠山へと走ってもらい、公道から脇道に入り、走行しにくい山道を進んで行った。しばらく無理を押して走らせようと

したが彼はとうとう諦めてしまった。

（奈良　行博『五感で味わう中国大陸:道教聖地探訪の旅』）

（43）岡潔先生が北大教授の時、研究室で、一生懸命思考を傾注し、暗中模索し、考えても判らず、とうとう匙を投げてしまったことがあったそうです。

（菅原　一比古『あなたが光を放つ瞬間』）

次の例は、長い時間を要して、或いはさまざまな事があった後に、ある最終的な結果が現れるさまを表す副詞「とうとう」がなくても、全体的な事態が完了することを意味している。「ねこが言う」、「鬼がライオンにばける」、「猫がふるえあがる」、「鬼がねずみにばける」、「猫が鬼を食べる」などは『鬼退治』（例（44））という事態に、「山うばが天じょうにとどくほどになる」、「山うばがまめつぶほど小さくなる」、「山うばを飲み込む」なども『鬼退治』（例（45））という事態に含まれている。一連の行為における結末としての行為（「猫が鬼を食べる」、「山うばを飲み込む」）の完了によって、全体的な事態（『鬼退治』）が終わることを表す。

（44）（前略）

ねこはおににいいました。

「あなたはライオンにばけられるっておんとうですか？」

「もちろんさ」

おにはそういうと、いいなり大きなライオンにばけました。

「ガオーッ！」

ライオンのほえごえに、ねこはふるえあがってしまいました。

「でも、ねずみはむりでしょう？」

ねこがいうと、おにはさっとねずみにばけました。

そこでねこは、おににとびついて、パクリとたべてしまいました。

（「ながぐつをはいたねこ」『CD できくよみきかせおはなし絵本２』）

（44’）（前略）パクリと食べました。

（45）（前略）

「おまえは、大きくも、小さくもなれるというが、ほんとうか。」

「そうとも。」

山うばはこたえると、ずんずん大きくなって、天じょうにとどくほどになりました。

「なるほど。では、まめつぶくらい小さくなれるかな。」

「なれるとも。」

山うばはそういうと、あっというまに、まめつぶほど小さくなりました。

そこで、おしょうさんは、山うばをもちにつけて、ごくんとのみこんでしまったということです。

（「三まいのおふだ」『CD できくよみきかせおはなし絵本２』）

（45’）（前略）ごくんとのみこんだということです。

これは「テシマウ」形式が最初に獲得したアスペクト的意味、すなわち運動の＜達成点＞が運動の＜終わり＞であることに起因すると考えられる。「スル」形式と置き換えると、事態の全体的＜完了＞というより、行為が一つ一つ完了して、一連の行為からなる事態の全体的＜完了＞には読み取れない。一連の行為からなる事態は、それぞれの行為が点ごとに捉えられるため、時間的幅が捨象されると考えられる。このため、「―オワル・オエル」形式は、このような一連の行為からなる全体的事態の＜完了＞を表すことができない。

ところで、事態実現の順序を言う場合、時間節においては、「スル」形式と「―オワル・オエル」形式では意味的違いが現れる。次の（46）と（47）は一つの事態が終わったあとに次の事態が始まることを表す「～し終わったあと、～」は、「～したあと、～」とほぼ同じ意味を表している。「患者から話を聞く」のあとに「診察にうつる」、「食べる」のあとに「ふもとの町をながめる」という事態が終わったあとに次の事態が始まることを意味する場合、「スル」形式で表されたアスペクト的意味とはほぼ同じである。

（46）医者は患者から話を聞き終わった**あと**、診察にうつる。≒医者は患者から話

を聞いた**あと**、診察にうつる。

（奈良　信雄『名医があかす「病気のたどり方」事典」：自分で病名がわかる診断チャート付き』）

（47）その風景を楽しみながら、みんなでワイワイおしゃべりをしながら、お弁当を食べた。その味は、山頂の爽やかな空気とみんなの笑顔が加わって、それはそれはおいしかった。食べ終わった**あと**、頂上からじっとふもとの町をながめていた。≒食べた**あと**、頂上からじっとふもとの町をながめていた。

（室田　とをり『ヤマネコ山にのぼる』）

ところが、事態の実現順序を表す「～するまえに、～」と「～し終るまえに、～」には違いが現れる。

（48）（前略）次から次へとウェイターが肉を持って来るため、ひとつのアイテムをたくさんもらってしまうと、それを食べ終わる**前に**次の肉がやって来てしまい、結果として冷えた肉ばかりが皿の上に山積みになってしまう。

（http://www.lvtaizen.com/rest/html/samba.htm）

≠それを食べる**前に**次の肉がやってきてしまい．．．

≒それを食べてしまう**前に**次の肉がやってきてしまい．．．

（49）（前略）

とっても薄めの焼酎を飲みましたが一杯目を飲み終わる**前に**気分が凄く悪くなったのでお水に切り替えました。　（Yahoo!知恵袋）

≠（前略）一杯目を飲む**前に**気分が凄く悪くなったので．．．

≒（前略）一杯目を飲んでしまう**前に**気分が凄く悪くなったので．．．

例（48）は、「食べ終わる」前に、即ち食べ始めたがまだ食べているときに、次の事態「肉が来る」が始まることを意味している。これは「～するまえに、～」に置き換えると、「食べる」が始まる前に、「肉が来る」が始まることを意味している。例（49）は、「飲み終わる」前に、即ち飲み始めたがまだ飲んでいるときに、「気分が悪くなる」

が始まることを意味している。これは、「～するまえに、～」に置き換えると、「飲む」前に、すなわちまだ飲み始めていないときに、「気分が悪くなる」が始まることを意味している。つまり、事態の実現順序を表す「～するまえに、～」と「～し終るまえに、～」は主節事態の実現時で違いが現れる。時間節で表されている事態は、終了限界が示されていれば、「～し終るまえに、～」は、「～てしまうまえに、～」とほぼ同じ意味を表すことが明らかになった。

一方、事態の実現順序を表す「～たあと、～」、「スル」形式と「テシマウ」形式で表されたアスペクト的意味には限界達成か限界達成の強調かという違いが現れる。例（50）は＜終結＞に読み取れるのに対し、例（51）は、終了限界が示されていないので、＜終結＞には解釈されず、＜開始＞に解釈される。

（50）（妊娠後期の食事に関する話）

運動を毎日して、たくさん食べてしまった**あと**は野菜や煮物中心の質素な食事を心がけました。（http://akasugu.fcart.jp/ninshin/kouki/syokuji/）

≒（前略）たくさん食べた**あと**は野菜や煮物中心の．．．

（51）（犬の食糞行為に関する話）

叱ると 隠れて食べたり、糞をしたことで叱られたと思い、便秘になる犬もいるそうです。食べてしまう**まえに**片付けてあげて下さい。

（http://onayamifree.com/threadres/562791/）

≒（前略）食べる**まえに**片付けてあげて下さい。

以上の検討から、一連の行為からなる事態においては、「テシマウ」形式は一連の行為からなる大きな事態の終わりとしての事態が実現することによって事態全体の＜終わり＞を示す機能を果たすのに対し、「スル」形式は事態全体の実現ではなく、一つ一つの事態の実現に焦点が当てられていることを明らかにした。また、「～するまえに、～」という事態の実現順序を表す場合、先に始まる事態の開始時点が、時間節の「－オワル・オエル」形式の有り無しに左右されることを明らかにした。「テシマウ」形式は終了限界がはっきりとしていない事態に付く場合は、「スル」形式とほぼ同じ意味とな

るが、終了限界が示されている事態に付く場合は、「－オワル・オエル」形式の表す意味とほぼ同じとなる。

### ５．３．３　繰り返される行為・事態からなる事態の＜終わり＞

一連の行為からなる事態とは違い、同じ行為・事態が繰り返されて大きな事態となる場合もある。

（52）円山会議に出席した岡本次郎左衛門や大石孫四郎さえ言を左右にしている。大石一門以外でも、外村・河村・粕谷・佐々といった上士たちが続々と脱落してしまった。　（堺屋　太一『峠の群像』）

（52’）（前略）外村・河村・粕谷・佐々といった上士たちが続々と脱落した。

（52”）??（前略）外村・河村・粕谷・佐々といった上士たちが続々と脱落し終わった。

（53）二〇世紀の終わりに、日本は戦後最悪の事態に追い込まれていますね。春から夏（九九年）にかけて、ガイドライン関連法や国旗国歌法から盗聴法まで、国家の力を強める法律が次々に通ってしまいました。

（太田　昌国/高橋　哲哉/松井　やよい『20 人の男たちと語る性と政治:松井やよいフェミニズム対話集』）

（53’）（前略）国家の力を強める法律が次々に通りました。

（53”）??（前略）国家の力を強める法律が次々に通り終わりました。

（54）本書の姉妹編ともいうべき『台湾と日本・交流秘話』（展転社）の場合は、多くの台湾側の協力を得た。特に許国雄博士（東方工商専科大学学長）のごときは、毎月のように来日して監修してくださった。しかし韓国ではそれが期待できず、私の知己は次々に他界してしまった。

（名越　二荒之助『日韓 2000 年の事実:写真が語る両国民へのメッセージ』）

（54’）（前略）私の知己は次々に他界した。

（54”）　??（前略）私の知己は次々に他界し終わった。

「続々と」、「次々に」によって、「上士たちが脱落する」、「法律が通る」、「知己が他界する」という事態が繰り返されていることが表されている。そして、「テシマウ」形式は、繰り返された行為や事態が全体的な終結点に至る、すなわち繰り返される行為・事態からなる事態の終結点に焦点が当てられている。これらを「スル」形式と置き換えてみると、一つ一つの事態に焦点が当てられるようになり、焦点の当て方が異なってくる。繰り返しの行為・事態からなる事態は、時間的な幅があるように見えるが、「ーオワル・オエル」形式と置き換えにくい。ところが、次のような場合では、「ーオワル・オエル」形式が自然に使われている。

（55）（ドミノのようにけん玉が）最後まで綺麗に倒れ終わった途端、思わず皆で拍手喝采でした。　（http://blog.canpan.info/otasuke/archive/405）

（56）複数のチームに分かれて、それぞれに与えられたドミノを制限時間内に並べて、「いっせーの一せ」で倒し始めた時、最も長い時間、ドミノが倒れているチームの勝利です。（最後にドミノが倒れ終わったチームの勝利）
（http://heart-quake.com/article.php?p=770）

（57）苦節２０年・・・５月２６日で住宅ローンを完全に支払い終わりました。そこで抵当権の抹消をしなければなりませんが、これからの手続きについて教えてください。　（http://oshiete.goo.ne.jp/qa/562195.html）

「ドミノのようにけん玉が倒れる」（例（55）と「ドミノが倒れる」（例（56））は、どちらも同じ事態が繰り返されることによって成り立った大きな事態であるが、時間的連続のある事態として捉えられるため、全体の事態が終わるまでの時間的幅が想起される。「住宅ローンを支払う」（例（57））は、一定の時間の間隔で起きると想起されるため、時間的連続のある事態として捉えられる。時間的連続のある事態が終わるまでの時間的幅が想起される場合、「ーオワル・オエル」形式が自然に使われる。このように、断続的に繰り返される行為・事態からなる事態では、「テシマウ」形式は、全体的な終

結点に至ることを意味し、「－オワル・オエル」形式と置き換えにくいのに対し、連続的に繰り返される行為・事態からなる事態では、「テシマウ」形式は、全体的な終結点に至ることを意味しながら、「－オワル・オエル」形式と置き換えられる。＜終わり＞を表す形式のすみわけは表 2 のようにまとめられる。

【表 2　＜終わり＞を表す形式のすみわけ】

| 事態種類 / 形式 | 一回の事態 | | 一連の行為・事態から成り立つ事態 | 事態の繰り返しによって成り立つ事態 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 幅なし | 幅あり | | 断続的 | 連続的 |
| オワル・オエル | × | ○ | × | × | ○ |
| テシマウ | ◎ | ◎ | ○（全体） | ○（全体） | ○（全体） |
| タ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

×：結合しない　　○：結合する（＜終わり＞或いは部分的＜終わり＞）
◎：結合する（＜終わり＞の強調）　○（全体）：結合する（全体的＜終わり＞）

一回の事態の＜終わり＞においては、「－オワル・オエル」形式が時間的幅で理解されるのに対し、「テシマウ」形式と「スル」形式は時間的幅の有無に関わらず、＜終わり＞を強調する点で異なる。一連の行為・事態から成り立つ事態の＜終わり＞においては、時間的幅が想起されないため、「－オワル・オエル」形式が付かない。「テシマウ」形式は全体的＜終わり＞を、「スル」形式は部分的＜終わり＞を示す点で機能が異なる。事態の繰り返しによって成り立つ事態においては、繰り返しの事態が連続的に捉えられれば、時間的幅が想起されるので、「－オワル・オエル」形式が付加できる。「テシマウ」形式は全体的＜終わり＞に焦点が当てられるのに対して、「スル」形式は部分的＜終わり＞に焦点が当てられる。

## ５．４　おわりに

文法形式「－オワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式の表すアスペクト的意味は、それ自体の文法的意味のほかに、話者が事態に対して課すアスペクト解釈も関わっている。文法形式自体の持つ文法的意味に関しては、本章の考察を通し、形式的には異なっているが、意味的には連続性のあること、また意味的連続性がありなが

らそれぞれが異なったベースで理解されることを明らかにした。また、事態のアスペクト解釈に関しては、言語的な要素のほかに、百科事典知識や話者の認識などにも影響されることを明らかにした。これは、言語形式に概念化されたものは大まかな概念であり、終結点や時間的幅といった細かな時間的特徴は話者の解釈による主観的部分があることを示している。

# 第６章　本動詞「しまう」から補助動詞へのプロセス

日本語における補助動詞には、「いる」、「ある」、「いく」、「くる」、「おく」、「しまう」、「あげる」、「くれる」、「もらう」の九つがある。この中で、授受的意味を表す動詞を除き、残りの動詞はアスペクト的意味を表す形式へ転用されるものである。語彙的意味においては、「いる・ある」は＜存在＞を、「いく・くる」、「おく」、「しまう」は＜主体・対象の移動＞を意味する。文法的意味においては、「テイル・アル」は、進行中の状態、結果状態、結果残存や効力の残存などの＜存在＞を表すことは変わらないが、「テイク・クル」、「テオク」、「テシマウ」は、状態の出現、変化の進展、行為の結果の維持、完遂といった語彙的意味から離れたアスペクト的意味を表す。これは、言語変化の観点から捉えれば、山梨（1995）で示されている意味変化に見られる傾向の一つに属する。

A　<u>具体的な意味内容をもつ表現から、アスペクト的（ないしは時制的）な意味をになう表現に転化していく傾向。</u>

B　具体的な意味内容をもつ表現から、言語主体の主観的態度や判断を反映するモダリティ的な表現に転化していく傾向。

C　場所・空間にかかわる指示的な意味をになう表現から、抽象的・関係的な意味をになう表現に転化していく傾向。

D　文レベルにおける接続関係・指示関係を規定する表現から、テクスト・談話レベルの接続関係・結束性を規定する表現に転化していく傾向。

E　文の命題内容的な機能をになう表現から、遂行的な機能をになう表現に転化していく傾向。　（山梨 1995: 65）（下線は筆者による）

本研究の対象となる「しまう」には、具体的意味（＜収納＞）と抽象的意味（＜終了

＞）が存在する。Bybee（1994）が示している＜過去＞及び＜完了＞の文法要素への発展過程に従うと、動詞「しまう」は＜終了＞を意味するため、＜完了＞を表す形式へ転用されることは容易に推測されよう。しかし、「テシマウ」形式は単純に＜完了＞を表すものではなく、何らかの話者の感情評価が添えられている表現である。アスペクト的意味[23]の獲得については、文法化の観点からの考察があるが（Ono 1992）、「しまう」の語彙的意味がどのように抽象化されたのかまで言及されていない。また、話者の感情評価の派生については、そのアスペクト的意味に由来するという主張もあれば（寺村 1984、金水 2000）、話者の持つ前提に由来するという主張もある（鈴木 1998）。さらに、話者の感情評価（主観的意味）が当該形式に書き込まれたという主張も見られる（梁井 2009）。先行研究を踏まえると、未解決の問題として以下の 3 点が挙げられる。

１．「テシマウ」形式の表す＜限界達成の強調＞はどのように獲得されたのか。
２．「テシマウ」形式の用いられた表現は、＜残念＞、＜解決＞、＜思い切って＞などといった主観的評価が添えられる傾向が見られる。これは＜限界達成の強調＞と様々な主観的評価の派生とはどのように関わるのか。
３．「テシマウ」形式の表す意味は主観化の方向へ発展したと指摘されているが（梁井 2009）、マイナスの感情評価のみが特定されるのは妥当なのか。

本研究では、体系的な説明を求めるため、本動詞としての「しまう」の語彙的意味を具体的意味＜あるものをどこかに移して収納する＞とする。これに基づいて＜限界達成の強調＞の獲得と拡張のプロセスを明らかにする。また、＜限界達成の強調＞が話者の感情評価の派生の土台であり、この土台に話者の持つ前提的な期待値が加わって様々な感情評価が派生してくるという考えに基づき、検討を行なっていく。

[23] Ono (1992)では、＜終了＞と＜収納＞の意味を持つ「仕舞う」の語彙的意味を“emphasize the end point of the event”に設定している。そして、ある物が片付けられたので、それに近づきにくいという含意があるという。

## ６．１　本動詞の意味拡張

動詞「しまう」は、語彙としての意味は、次のように記述できる。

① ある場所にモノを収納する。　　＜空間的用法＞

② ～を終わりにする、～が終わりになる。　　＜時間的用法＞

本節では、＜空間的用法＞から＜時間的用法＞へ転化するという動詞「仕舞う」の意味の抽象化プロセスを明らかにしていく。

### ６．１．１　＜空間＞から＜時間＞へ

ここでは、辞書の記述に基づき、本動詞「しまう」の基本的な用法を＜ある場所にモノを収納する＞と規定する。以下では、本動詞の空間的用法から時間的用法への意味拡張の過程を見ていく。

(1) 空間的用法（基本的用法）：＜ある場所にモノを収納する＞

a. 箪笥にへそくりをしまう。

b. 金庫の中に貴重品をしまう。

c. ポケットに財布をしまう。

例（1）は、収納する対象（e.g.「へそくり」、「貴重品」、「財布」）を収納先（e.g.「箪笥」、「金庫の中」、「ポケット」）におさめるということを意味する。これを、本動詞「しまう」の基本的用法とする。次に、空間的用法と時間的用法の中間例を取り上げる。

(2) 空間的用法と時間的用法の中間例①

a. 倉庫に掃除機をしまう。

b. 茶箱に茶道具をしまう。

c. ケースに筆をしまう。

例（2）においても、もちろん、「収納する対象を収納場所におさめる」を意味するが、例えば（2a）では、収納する対象（掃除機）から、系列的な行為（「掃除」）が喚起され、「掃除機をしまう」という表現が、「掃除」という行為の終わりの段階を同時に喚起し得る。同様に、（2b）（2c）も、「茶道具」や「筆」から、系列的な行為「茶道の稽古・茶会」や「書道の稽古」が喚起され、「茶道具をしまう」、「筆をしまう」という行為に伴って、「お茶の稽古・茶会」や「書道の稽古」という行為の終わりの段階を同時に喚起し得る。ただし、この段階ではまだ対象の収納先が喚起される。続いて、さらなる中間例を取り上げる。

（3）空間的用法と時間的用法の中間例②

（収納先が想起されるが、事象の終わりに焦点が当たっている）

a.（箪笥に）｛夏の衣類／クーラー／扇風機｝をしまう。

b.（倉庫に）｛暖房器具／コタツ／スキー用品｝をしまう。

c.（押入れに）｛お正月飾り／クリスマスツリー／雛人形／兜飾り｝をしまう。

例（3）は、収納される対象が、時間的な幅を持った事象と結び付いている場合、「モノをしまう」という行為が、「その事象が終わる」ということと結び付くものの例である。さらに、「夏の衣服」、「暖房器具」、「お正月飾り」といった用品はその季節に合わせて使われるので、これらを使う事象は、一時的ではなく使い初めてから終わるまで時間的な幅がある。例（3）の事象と比べると、例（1）（2）は時間的な幅において明らかに違いが現れることが分かる。このため、先ほどの中間例に比べて、収納先はそれほど喚起されず、＜収納する＞際に付随する＜移動＞の意味は薄れるが、ニ格標示も可能である（e.g.押入れに扇風機をしまう）。しかし、＜収納＞という意味より、何らかの事象の終わりに焦点が当たっているために、ニ格が生起していないと考えられるが、収納先を明示することによって、＜収納する＞という意味が前景化する。さらに、収納先が想起されることにともない、季節の終わりも想起される例、また収納先が想起されず、ニ格標示ができない例を取り上げる。

（4）空間的用法と時間的用法の中間例③

（事象の終わりに焦点が当たっているため、収納先が想起されながら、季節の終わりも想起される）

｛夏物／冬物｝をしまう。箪笥に｛夏物／冬物｝をしまう。

（5）時間的用法＜～を終わりにする・～が終わりになる＞

a. 仕事をしまう。*引き出しに仕事をしまう。

b. 稽古をしまう。*箱に稽古をしまう。

c. 店をしまう。*押入れに店をしまう。

例（4）は、季節物の収納方法に関する文脈に使われているが、＜モノを収納する＞というより、「夏」、「冬」という季節に区切りをつけるという＜終了＞を意味する。例（5）は場所を表すニ格標示が不可であることから、＜ある場所にモノを収納する＞という意味が消えていて、「仕事」、「稽古」、「店」（営業）が表すコトの＜終了＞を意味することが分かる。ところで、＜モノを収納する＞の意味で使われる場合、動詞「しまう」は他動詞として使われるのに対し、＜コトの終了＞の意味で使われる場合、他動詞のほかに自動詞の用法も観察された（例（6））。これは、＜ある場所にモノを収納する＞という具体的意味が薄くなったためだと考えられる[24]。

（6）福造も同じ長屋にいて、湯が仕舞うと、よく連れ立って、例の居酒屋に寄る。湯は五ツ（午後八時）に仕舞うので、居酒屋で一杯やるのは、かれこれ四ツ（午後十時）前になる。　（多岐川　恭『闇十手：お江戸捕物絵図』）

本節の考察を通し、＜終了＞を表す抽象的意味への拡張プロセスが明らかになった。この拡張プロセスは、統語的にも、動詞「しまう」におけるニ格の非明示化を伴う。本節での分析から、意味の拡張プロセスに意味的な連続性があること、そして事象の終わりに焦点が当たるのは、アスペクト的意味への拡張の兆しであることを示している。

[24] 「しまう」の自動詞用法は古い用法で、現在は容認度が高くないという指摘がある。また、語彙的意味を表す場合は漢字「仕舞う」で表記するが、平仮名「しまう」で表記するようになったのは、語彙的意味を失い、文法的機能を果たすようになる文法化の証として指摘されている（Ono（1992））。

### ６．１．２　時間的用法への拡張の動機付け

ここまでの分析から、本動詞「しまう」の時間的用法は、系列的な行為の連鎖からなる継起的関係に基づいてメトニミー的に動機付けられていると考えられる。人間の行為は、基本的に順序構造として具体化し、系列的な行為の連鎖からなる。例えば、「電話をかける」という行為は、受話器をとる、ダイヤを回す、電話に出る、会話をする、受話器を置くといった動作の連鎖からなる。次の慣用句は、そういった行為の系列を介して理解される（例（7））。

（7）　a. 筆をとる（筆記：開始）.... 筆を置く（筆記：終了）

b. 口を開く（会話：開始）.... 口を閉じる（会話：終了）

c. 刀を抜く（決闘：開始）.... 刀を納める（決闘：終了）

（深田・仲本 2008: 153）

「筆をとる」という行為は、筆記をする際に、系列的な行為からなる最初の行為にあたると考えられる。それから、筆記が終わるのに伴って筆を置くのが普通である。つまり、系列的な行為の連鎖とそれらの行為が行われる時間的順序は隣接関係にあることから、系列的行為の始まりに当たる「筆を取る」という行為が筆記の始まりの段階にあり、「筆を置く」という行為が筆記の終わりの段階にあると理解される。次の（8）から（10）も同じように考えられる。

（8）「仕立て」

電源を切り、針をはずしてミシンをしまう。ぬい目の大きさの調節送り調節器で調節する。　（国立国語研究所『書き言葉均衡コーパス』）

（9）「診療」

「そう…」医師は診療カバンのなかを手探りすると、聴診器を取り出した。「脈拍も落ちついているし、血圧も正常と。ちょっと胸を診てみようかね」（中略）医師は、首から聴診器をはずしてカバンにしまった。

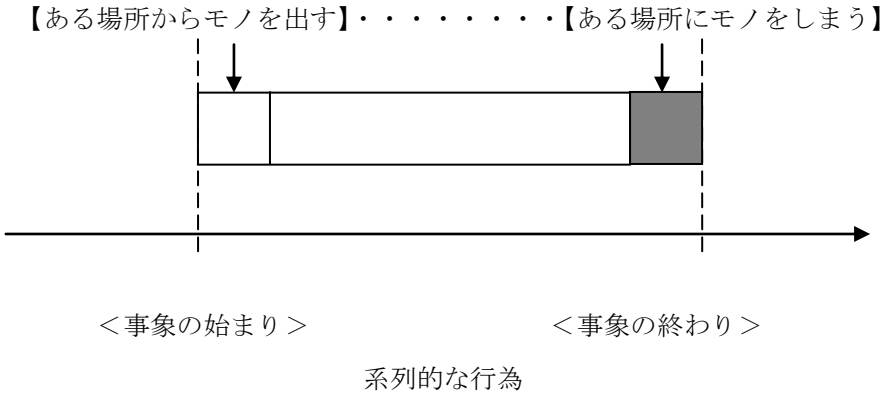
（国立国語研究所『書き言葉均衡コーパス』）

（10）「連絡」

彼の懐中で電話のベルが鳴りはじめた。村上はポケットから携帯電話を取りだした。「いま面談中なんだ。五分ばかり、待ってくれるか。折り返しこっちからかけるよ」そう言ってポケットにしまった。

（国立国語研究所『書き言葉均衡コーパス』）

以上の例から、モノをおさめる行為（「ミシンをしまう」、「（カバンに）聴診器をしまう」、「（ポケットに）携帯電話をしまう」）によって、その系列的な行為・出来事（「仕立て」「診療」「連絡」）の終わりの段階に焦点が当たるようになり、行為・出来事が終わりになることを意味することがはっきりと分かる。つまり、モノをどこかに収納することに焦点を当てるのではなく、あるものを収納することによってその行為・出来事が終わることを指すようになる。




【図１　系列的な行為と事象の時間的関係との対応】

よって、本動詞「しまう」の時間的用法＜～を終わりにする・～が終わりになる＞は、系列的な行為の継起関係に基づいて、メトニミー的に動機付けられて獲得されたと考えられる。

## ６．２　本動詞から補助動詞への拡張

本節では、本動詞から補助動詞への拡張プロセスを明らかにしていく。日本語では、

動詞のテ形に動詞が接続される形式によって様々な意味が表される。出来事の＜継起＞はその一つである。次の例は本を読んだ後、収納される場所に戻すという意味と解釈される。

（11）その本を読んで仕舞った。

形式的には、本動詞として使われる場合は、音声的ポーズが入るのに対して、補助動詞として使われる場合は、音声的ポーズが入らないと指摘されている（Ono 1992）。しかし、意味的には、動詞「しまう」はどのように抽象化され、文法的形式に転用されるか、「テシマウ」形式の表す意味がどのように拡張されるかは、体系的な説明ができているとは言いがたい。ここでは、動詞「しまう」の意味を表す図式を援用して分析していく。

### ６．２．１　＜移動＞

動詞「しまう」の基本的意味は、＜あるものをある場所に移して収納する＞と記述できる。すなわち、「移動」や「移動先（着点）」が重視されている動詞である。次のように移動される場所が明示される場合では、本動詞としての意味が表されている。

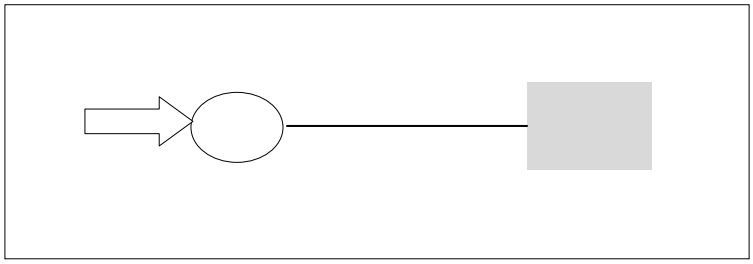
（12）移動先が明示されている場合

a. その本を読んで本棚にしまった。

b. 折り畳み傘を使ってかばんにしまった。

c. 宿題をしてかばんにしまった。

＜移動＞を表す「しまう」は、次のように図式できる。



【図 2　＜移動＞を表す「しまう」】

矢印は＜あるものをある場所に移して収納する＞という＜移動＞を行なう主体である。円形は移動されるもの、四角形は移動される目的地を、直線は目的地までの移動を表している。

### ６．２．２　アスペクト的意味－＜完了＞[25]の獲得

「しまう」は、移動先が明示されていない場合では、具体的意味＜あるものをある場所に収納する＞に解釈されながら、抽象的意味＜収納することによってある行為・出来事が終了する＞にも解釈される。これは、具体的な意味に解釈されるというより、具体的行為「収納」を行なうことによってある行為・出来事が終了するという抽象的な意味を表すようになるきっかけであるといえよう。

（13）移動先が明示されていない場合

a. その本を**読んで**しまった。

b. 折り畳み傘を**使って**しまった。

c. 宿題を**して**しまった。

（13a）は、その本をしまうことによって「**読む**」という行為・出来事を（が）終了する、（13b）は、折り畳み傘をしまうことによって「**使う**」という行為・出来事を

[25] ここで言う＜完了＞は、事態の＜終わり＞に焦点を当て実現することを意味している。「テシマウ」形式の表す＜完了＞は前景化される限界達成を意味するのに対し、「スル」形式の表す＜完了＞は前景化されていない限界達成を意味する。「テシマウ」形式の表す前景化される限界達成という意味は、事態がすぐに実現するという解釈に結びついて話者の持つ前提的な期待値を表出させるため、主観的＜完了＞を表す形式だと言えよう。

（が）終了する、（13c）は、宿題をしまうことによって「**（宿題を）する**」という行為・出来事を（が）終了することを意味する。次に、移動先と具体的な収納物が明示されていない場合、「しまう」は、具体的な意味に解釈されなくなり、ある行為・出来事を（が）終了するという抽象的な意味に解釈されるようになる。

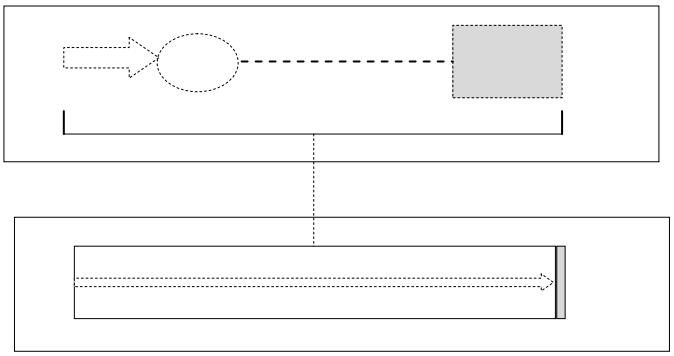
（14）移動先と具体的な収納物が明示されていない場合

a. バイオリンの**手入れをして**しまった。

b. 講義の**準備をして**しまった。

c. **ゲームをして**しまった。

（14a）は「**手入れをする**」という行為・出来事が終了する、（14b）は「**準備をする**」という行為・出来事が終了する、（14c）は「**ゲームをする**」という行為・出来事が終了することを意味する。このように、動詞のテ形に付いた「しまう」の意味拡張プロセスは、具体的な意味＜あるものを収納先に移動させる＞ことによって＜ある行為・出来事を終了する＞、＜ある行為・出来事が終了する＞という抽象的な意味に解釈されるようになることが考えられよう。このプロセスを以下のように図示できる。



【図 3　空間的＜移動＞と時間的＜終了＞】

動詞のテ形に付いた「しまう」は、＜あるものをある場所に移して収納する＞という＜移動＞の意味が薄くなることにともない、収納物の＜移動＞によって＜ある行為・出

来事が終了する＞という意味を表すようになる。図 3 の上段で使われた点線は、＜移動＞を行なう主体、収納物、そして＜移動＞のルートが背景化されていることを示している。また、前景化される＜ある行為・出来事が終了する＞という時間的意味を実線で示している。上下２つの図式を繋げている点線は、**空間的＜移動ルート＞**を**時間的＜推移ルート＞**に写像したことを示している。空間的ルートの到着点に焦点が当てられたため、時間的な推移ルートの終わりに焦点が当てられている。このように、行為・出来事が終了するという意味は、動詞「しまう」がアスペクト形式に転用されるようになったきっかけだと考えられる。さらに言えば、「テシマウ」形式が獲得した最初のアスペクト的意味は、空間的＜到着点＞が時間的＜達成点＞に写像され、その時間的＜達成点＞が運動の＜終わり＞に相当するため、＜完了＞という意味であると考えられよう。このため、＜達成点＞に焦点が当てられている「テシマウ」形式と＜達成点＞に焦点が当てられていない「スル」形式との違いが明らかになっている。これは、＜完了＞というアスペクト的意味が獲得されたプロセスだと考えられよう。

### ６．２．３　アスペクト的意味―部分的＜完了＞の獲得[26]

「テシマウ」形式は、運動の＜完了＞というアスペクト的意味を表すが、＜完了＞に解釈されない例も存在すると指摘されている（鈴木 1970、鈴木 1998）[27]。鈴木（1998）は、鈴木（1970）を受け継ぎ、「テシマウ」形式の意味を＜実現＞一義に帰すると主張しており、＜完了＞、＜完結＞というアスペクト的意味に読み取れる場合をさらに明確にした。

また、金水（2000）は、「テシマウ」形式は、限界達成をさらに前景化した表現だと主張しており、終了限界がある場合は＜終了限界の達成＞に、終了限界がない場合は＜

---

[26] ここで言う部分的＜完了＞は、事態の部分的＜終わり＞に焦点を当て実現することを意味する。

[27] 鈴木（1970）で取り上げられている＜完了＞に読み取れる例と＜完了＞に読み取れない例が次のようとなっている。ただし、鈴木（1970）は「テシマウ」と「チャウ」を区別して扱っていない。

（vi）＜完了＞に読み取れる例：

‥‥貴方のお薬をのむまでもなく、病気がなおってしまうと思います

‥‥『お産の知識』という本を、先生の所へ返す前に、私みんな(○○○)読んでしまったの

（vii）＜完了＞に読み取れない例：

「二日は朝から夕方まで、年賀状を書いちゃった」

今年の夏休みは遊んじゃった　（鈴木 1970: 66-67）

開始限界の達成＞に読み取れることもあると指摘している[28]。

さらに、張（2011）は「テシマウ」形式の縮約形「チャウ」形式は＜部分的行為達成＞に解釈される傾向にあることを明らかにしている（例（15）、(16)）。これは＜全体的行為達成＞（＜完了＞）を表す「テシマウ」形式は、意味の希薄化が進んで、＜部分的行為達成＞（＜部分的完了＞）という解釈が獲得されたことを示している。

（15） a. 棚が倒れてしまった。（部分的行為達成の解釈は不可）
b. 棚が倒れちゃった。（部分的行為達成の解釈は不可）
（16） a. ジュースを飲んでしまった。（部分的行為達成の解釈は不可）
b. ジュースを飲んじゃった。（部分的行為達成の解釈は可）

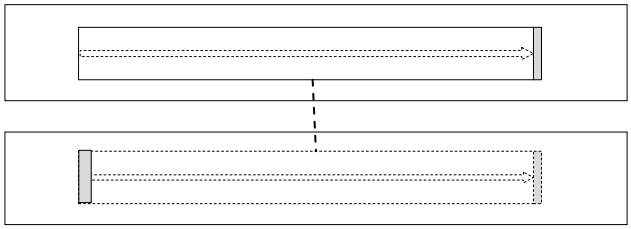
以上から「テシマウ」形式は＜完了＞を表さない例が確かに存在することが確認できた。では、最初に＜完了＞を表していた形式は、どのように＜完了＞を表さないようになっているのであろうか。金水（2000）では、「テシマウ」形式は、非限界動詞の場合、＜開始限界の達成＞にも、＜終了限界の達成＞にも解釈されうると指摘されている。例えば、「食べてしまった」は、「食べる」という行為が終わるとも、始まって食べ続けるとも解釈されうる。

（17） 食べてしまった→×　　（＜終了限界の達成＞）
食べてしまった→食べ続ける　　（＜開始限界の達成＞）

金水（2000）で言及している＜開始限界の達成＞は、行為の一部（始まりの段階）が行なわれたと見ることができよう。金水（2000）では＜開始限界の達成＞という用語が用いられているが、行為の全体から見れば、行為の一部が完了し、すなわち部分的＜完

[28] （前景化した）終了限界の達成は、鈴木（1998）での＜終結＞に当たると思われるが、終了限界のない場合は、鈴木（1998）の主張との違いが見られる。金水（2000）は、本来アスペクトと関連していない状態動詞や可能動詞を考慮に入れていないのに対して、鈴木（1998）は、動作や変化を表す動詞のほか、状態動詞や可能動詞を考慮に入れている。金水（2000）の主張は、動作や変化を表す動詞の後ろに付いた「～てしまう」に限っては通用するが、状態動詞や可能動詞の後に付いた「～てしまう」を説明することができない。鈴木（1998）が主張した＜実現＞は、一括して説明できるが、それが「仕舞う」の語彙的意味とどう関わっているかは説明できないと思われる。

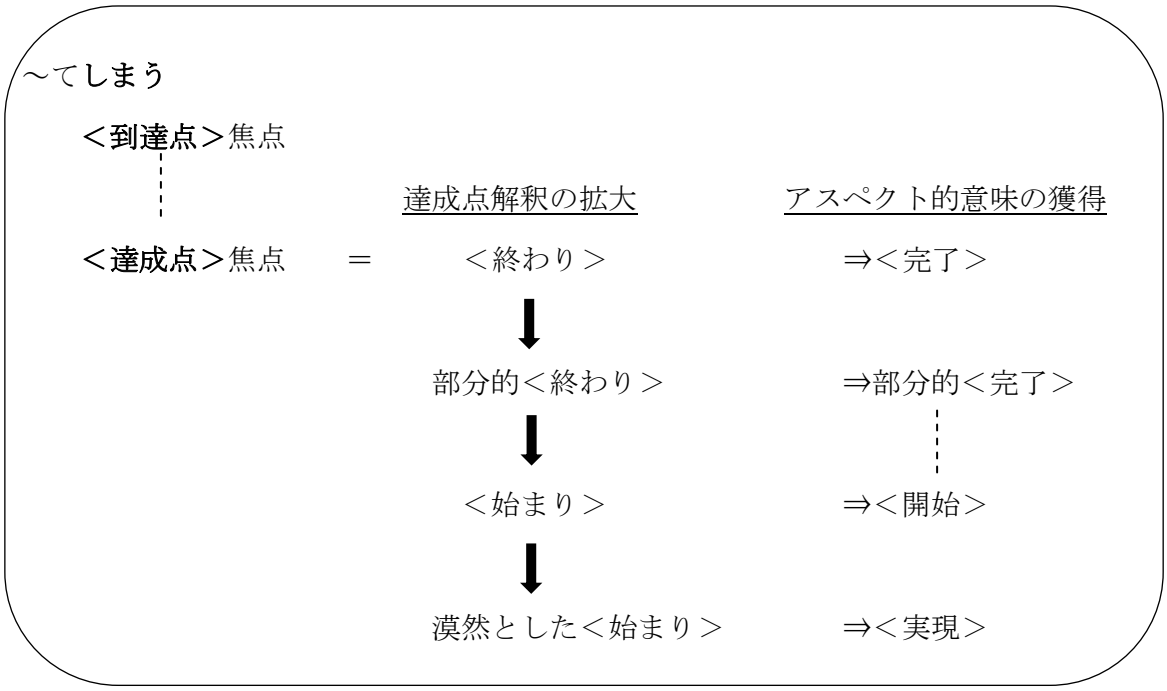
了＞と見ることができる。これで、4 章で検討している非限界動詞における「食べる」、「飲む」、「走る」、「歩く」などといった典型タイプは、運動が少しでも行われれば達成されると見なされているため、これらの動詞の表す＜開始限界の達成＞は、部分的＜完了＞だと考えられる。部分的＜完了＞に解釈されるのは、前節で検討した動詞「しまう」の語彙的意味に由来する焦点が当てられている＜達成点＞の解釈が拡大されたのだと考えられる。最初に獲得された＜完了＞の意味は、すなわち＜行為・出来事が**終わり**まで行われる＞という意味が薄くなり、＜行為・出来事が**部分的終わり**まで行われる＞に拡大され、部分的＜完了＞の意味が獲得されたと考えられる。更に言えば、時間的に写像されている動詞「しまう」の語彙的意味－＜到着点＞重視が受け継がれているが、＜達成点＞の解釈が事態の＜終わり＞から事態の部分的＜終わり＞に拡大されている。これにともない、図 4 で示しているように、時間的＜推移ルート＞の背景化が行なわれ、事態の＜終わり＞も背景化されていく。



【図 4　アスペクト的意味部分的＜完了＞の獲得】

「テシマウ」形式の表す部分的＜完了＞という意味は、＜限界達成の強調＞（金水（2000））に繋がると考えられる。「テシマウ」形式の表す＜達成点＞は、最初の運動の＜終わり＞から運動の部分的＜終わり＞に、さらに運動の＜始まり＞に拡大されているプロセスが考えられるのである。部分的＜完了＞解釈は、運動の開始とも考えられるので、「テシマウ」形式は非限界動詞における「笑う」、「泣く」、「疲れる」、「諦める」などといった開始点重視タイプの動詞に付くようになり、運動の＜始まり＞を表すようになっている。これも、「テシマウ」形式に受け継がれている＜達成点＞解釈は、運動の部分的＜終わり＞から運動の＜始まり＞にさらに拡大されていることを示している。「住む」、「過

ごす」などといった非限界動詞における状態重視タイプに付くようになっているのは、「テシマウ」形式に受け継がれている＜達成点＞解釈が漠然とした＜始まり＞に拡張されているということだと考えられる。漠然とした＜始まり＞に拡大された＜達成点＞解釈は、「テシマウ」形式の＜限界達成の強調＞が獲得されたプロセスだと考えられる。以上に基づき、「テシマウ」形式の意味＜限界達成の強調＞の獲得プロセスは次のようにまとめることができる。




【図５　動詞「しまう」の文法的意味・機能の獲得と拡張プロセス】

「テシマウ」形式の部分的＜完了＞というアスペクト的意味の獲得は、＜開始＞の意味を獲得するきっかけだと言えよう。＜開始＞の意味を表しながら、＜達成点＞が運動の＜始まり＞に解釈されるようになり、その＜達成点＞がさらに一般化されて漠然とした＜始まり＞の解釈に拡大され、＜実現＞（＜限界達成＞）の意味が獲得されている。このように、「テシマウ」形式の文法的意味・機能は、＜達成点＞解釈の拡大とともに拡大していると考えられよう。動詞「しまう」の語彙的意味＜到達点＞・＜達成点＞に焦点が当てられている意味が受け継がれることで、「テシマウ」形式は限界達成の前景化

した表現だと言えるわけである。

ところで、＜存在＞を表す動詞「いる・ある」、＜状態＞を表す動詞「似る」、可能動詞「泳げる」などの状態動詞に分類されているもの、すなわち imperfective verb は、なぜ「テシマウ」形式が付くのであろうか。鈴木（1998）では、「動詞の表す事態が実現の概念と相容れない場合には「テシマウ」との共起が不自然あるいは不可能である」と述べられている。つまり、imperfective verb であっても、文脈によって perfective 的意味が与えられることがあり、その場合「テシマウ」形式との共起が可能となる。では、一体 perfective 的意味が与えられる文脈とはどのような文脈なのであろうか。状態動詞「似る」は次の文脈においては、「慶多が良多に似るようになる」という時間的プロセスが想起されるため、「テシマウ」形式と自然に共起できるのである。

（18）いつもにていないと思っていた慶多が自分に似て見えた。だがそれは良多と慶多が同じ角度で少し傾かせているからだった。それは‥‥。きっと六年間過ごす間に慶多が良多に**似て**しまったものなのだ。何かを教えた覚えもない。だがいつの間にか、首を少し傾けるクセがうつってしまったのだ。

（是枝裕和・佐野晶『そして父になる』）

次の例における「テシマウ」形式と共起できない状態動詞「いる」（例（19））、「ある」（例（20））は、静的な存在或いは恒常的な存在を表すのではなく、「家にいるようになる」、「ピントが後ろの家にあるようになる」という事態の実現を表している。

（19）土曜は、いろんなことを計画していたわりに、家に**いて**しまった。

（http://www.christomoko.com/cgi-bin/hotnews/clip.cgi?page=49）

（20）ピント後ろの家に**あって**しまった。（ピントを合わせる、對焦）

（http://zeak.air-nifty.com/main/2012/08/dp2merill-1jpgs.html）

このように、文脈によって「～ようになる」という意味が表される場合、imperfective

verb は perfective verb として用いられるようになり、＜実現＞（＜限界達成＞）の意味を持つ「テシマウ」形式と自然に共起できる。

## ６．３　主観的評価の派生について

本節では、事態に対する話者の持つ前提的な期待値との関わりを検討した上で、感情評価的意味の派生における「テシマウ」形式にある**完了・実現性**の働きを明らかにする[29]。前節で検討しているように、文法的機能を獲得した「テシマウ」形式は語彙的意味＜到着点＞・＜達成点＞重視が受け継がれているため、＜達成点＞に焦点が当てられているという意味での**完了・実現性**を持っている。「テシマウ」形式は、アスペクト的意味を表すだけではなく、文脈によって様々な感情評価的意味が付け加えられる。なぜ同じ限界達成を意味する「スル」形式が主観的評価と結びつかず、「テシマウ」形式が主観的評価と結びつくのであろうか。「テシマウ」形式の表す様々な主観的評価の派生は、当該形式の完了・実現性に根差していると考えられるが、どのような主観的評価が派生するかは主観的評価の種類が話者の持つ前提的な期待値と関わると考えられる。以下では、主観的評価の派生における完了・実現性の働きを明らかにした上で、話者の持つ前提的な期待値との関わりを明らかにしていく。

### ６．３．１　完了・実現性に根差す主観的評価

「テシマウ」形式の表す感情評価的意味は、＜限界達成の強調＞という完了・実現性に根差していると考える[30]。同じ主張が寺村（1984）と金水（2000）で示されているが、＜残念＞や＜失望＞などといった負の感情評価しか論じられていない。他には派生した様々な感情評価的意味が完了・実現性に根差すという考えに沿い、アスペクト的意味と話者の感情評価との関連性に着目して議論を一層深めている研究がある（田村 2013）[31]。情的情報とその発生源と考えられているアスペクト的性質との関わりを次のようにまとめる。

---

[29] ここで言っている完了・実現性は、＜達成点＞に焦点が当てられているという意味での完了・実現、すなわち前景化された限界達成に相当する。

[30] 主観的評価の源は、動詞「しまう」の語彙的意味＜収納＞にあるとも考えられる。

[31] 田村（2013）では、日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文が共有している特徴から、話者の感情評価的意味は、それらのアスペクト的性質に由来すると主張している。

【表１　情的情報とアスペクト的性質との関わり】

| アスペクト的性質 | 含意 | 情的情報 |
|---|---|---|
| 瞬時性 | 無意志性 | 否定的・肯定的な感情 |
| 事態の発生の焦点化 | 不可逆性 | 否定的な感情 |

負の感情評価に関して、田村（2013）は寺村（1984）と金水（2000）での主張を受け継いで、失望、後悔や残念など否定的な情的情報が伝えられたのは、事態の発生の焦点化というアスペクト的性質がもたらした「不可逆性」という含意に由来すると考えている。一方で、瞬時性[32]と無意志性との関連性は、田村（2013）において初めて指摘されている。

（21）このような瞬時性は、話者の事態に対する無意志性と密接な繋がりがあると考えられる。話者が事態の発生を主観的に瞬時的なものと解釈するのは、ある動的事態に対し、（自らの行為もしくは状態変化だったとしても）自らの意志とは無関係に生じたものであり、自らの力が及ばない事態であると解釈している場合であるとも言えよう。このような話者の心理が表出されるのが補助動詞「てしまう」と Get 受動文であり、それゆえ、否定的な情的情報を伝達する基盤となっていると考えられる。

（田村 2013: 7）（下線は筆者によるもの）

「テシマウ」形式にある瞬時性に関しては、金水（2000）で指摘されているが、無意

[32] 「てしまう」が持つアスペクト的性質「瞬時性」に関しては、鈴木（1998）では、行為や変化状態を段階的に捉える副詞「次第に」、「少しずつ」、「だんだん」といった副詞と共起しにくい傾向があると指摘されている。

（viii）　練習すれば、だんだんおよげるようになるよ／＊泳げてシマウよ。

（ix）　次第に雨が降ってきた／＊降ってシマッタ。　（鈴木 1998: 51）

また、すでに 4.3 節で示しているように金水（2000）でも、「てしまう」は限界達成が前景化するという論述に、「早く」、「さっさと」、「すぐに」といったすみやかな達成を意味する副詞とよく結びつくが、「ゆっくり」、「じっくり」など動作を普通以上にゆっくり行なう意味の副詞類と共起しにくいと指摘されている。

さらに、先行研究で触れたように田村（2013）もこの傾向を認めて、「一瞬のうちに」、「あっと言う間に」、「途端に」などと共起する例を挙げ、「瞬時性」というアスペクト的性質を持つと考えている。

（x）　a. あれだけの虫害を一瞬のうちに殺してしまった。

b. あっと言う間にたいらげてしまうよ。

c. 座った途端に眠くなってしまった。　（田村 2013: 5）

志性との関連性までは言及されていない。田村（2013）は、瞬時性と無意志的解釈とを関連付けようとしている。しかし、話者の意志的行為であろうが無意志的行為であろうが、事態は「テシマウ」形式にある完了・実現性によってその実現・達成の時間を短縮して捉えることができる（例（22）、(23)）。

（22）「どうも拙者、勝先生がもう一度やって来るような気がして仕方ない。先生が来る前に、早く出発してしまおう」　（中村　彰彦『遊撃隊始末』）

（23）「突っ走るんだ。早く戸田橋を渡って、東京から出てしまえ」

（五十嵐　均『ヴィオロンのため息の：高原のＤディ』）

以上から、事態が意志的に行われるか、無意志的に行われるかは、その事態に対する話者の捉え方で、瞬時性によって無意志性が含意されるとは言い難いと思われる。さらに言えば、瞬時性は、「テシマウ」形式にある完了・実現性から副次的に生じるもので、無意志的行為・事態として表わされる表現との相性が良いとは言えるが、無意志性が含意されるとは言えない。

このように、従来の研究で記述されている「残念」、「失望」、「驚き」、「解決」、「思いっきり」といった様々な主観的評価は、「テシマウ」形式にある完了・実現性によって表出される事態に対する話者の評価だと言える。これを言い換えれば、「テシマウ」形式にある完了・実現性は、事態の実現に課された話者の持つ前提的な期待値を表出させるという駆動の役割を果たしているということである。

### ６．３．２　主観的評価と事態に対する話者の前提的な期待値との関わり

鈴木（1998）は、「テシマウ」形式に「望ましくない」と「実現しにくい」という前提が内在すると考え、「テシマウ」形式を「話者の事態に対する感情・評価的な判断・態度を表す形式である」と位置づけている。話者が事態を「望ましくない」と捉えているか、「実現しにくい」と捉えているかのどちらも満たされていなければ、「テシマウ」形式を用いるのが不自然であると述べられている。しかし、次の例では、文脈から話者がその事態を「望ましい」そして「実現しやすい」と捉えていることが伺えるが、「テ

シマウ」形式が自然に用いられている。

（24）ぼくは彼の口から「今年はどうだった？」という言葉が出るのが怖かった。藤木さんには、ずっと「健ちゃんみたいな頭のいい子は見たことないよ。司法試験なんて、学生時代に受かってしまうよ」と本気で言われていたからだ。

（百田　尚樹『永遠のゼロ』）

（24’）「健ちゃんみたいな頭のいい子は見たことないよ。司法試験なんて、学生時代に受かるよ」

文脈から話者が「（頭のいい健ちゃんは）司法試験に受かる」という事態を望ましく、そして実現しやすいと捉えていることが伺え、その事態は今実現していないが必ず実現するという話者の確信を表している。これは、「テシマウ」形式が用いられる場合は、何らかの前提が関わってくるが、その前提は必ずしも「望ましくない」或いは「実現しにくい」という狭い前提に限られるわけではないことを示している[33]。

では、「テシマウ」形式が使われる場合は必ず何らかの前提がなければならないのであろうか。次の例における「テシマウ」形式は、「一人残らず」という文的成分から＜完了＞というアスペクト的意味を表している上に、「あの畜生どもをエジプト河に沈める」という事態の速やかな達成を表している。その事態の実現に対しては「望ましくない」或いは「実現しにくい」という話者の前提が伺えないが、強いて言えば話者にとってその事態の実現が「望ましい」であろう。

（25）「キリスト教の神父の袈裟をつぶして自分たちの女どものスカートにするなんてことを、ユダヤのやつらにさせておいてなるものか！神聖な復活祭のお供物にけがらわしいしるしをつけるなどというまねはさせないぞ！　あの畜生どもを一人残らずドニエプル河に沈めてしまえ！」

（原　久一郎『隊長ブーリバ』）

[33] 「テシマウ」形式が使われた表現に付け加えられた主観的評価は、その事態に対する話者の評価の反映として見ることができる。様々な主観的評価があるので、事態に対する話者の評価も様々あるのであろう。そのため、本研究では、事態の実現に課された評価を話者の持つ前提的な期待値と呼ぶことにする。

速やかな達成という意味は、「テシマウ」形式にある**完了・実現性**から来たと考えており、話者にとって望ましい事態の速やかな達成によって＜解決＞という主観的評価が派生するのであろう。このことから、「テシマウ」形式が使われる際、常に感情評価的意味が付け加えられるからといって、その形式に特定された前提が内在するとは言いがたい。話者の感情評価の派生は、話者の持つ前提と関わっているが、それはあくまでも感情評価の多様性に繋がっており、感情評価の派生元だとは言いがたい。４章で記述しているように、話者の前提が伺えない文脈に用いられている「テシマウ」形式があるからである。前提が伺えても、それが表出されるには、派生の駆動力としての完了・実現性の助けがなければ、主観的評価が派生することがないため、「テシマウ」形式の持つ完了・実現性こそ感情評価の派生元だと言えよう。さらに言えば、「テシマウ」形式は＜限界達成の強調＞の意味を持つことで、話者の前提的な期待値と合わせて感情評価を派生させており、達成点に焦点が当てられているという点で「スル」形式の表す限界達成と異なっている。このため、「テシマウ」形式の意味・用法を包括的に捉えれば、残念、失望などの感情評価のように下位分類的な扱いというより、何らかの主観的評価が添えられる形式として扱うのが相応しいと考えられよう。以下では、様々な主観的評価の派生において、「テシマウ」形式の持つ完了性・実現性がどのように働いているかを明らかにしていく。鈴木（1998）における前提と区別するため、事態の実現の難易性、事態実現のコントロール性、事態実現の期待性、事態実現の予想性といった主観的評価の質に関わる要因を事態に対する話者の前提的な期待値と呼ぶ。

### ６．３．２．１　事態実現の難易と主観的評価の派生

「テシマウ」形式の表す話者の主観的評価は、表された事態が実現しにくいか、実現しやすいかという話者の持つ前提的な期待値と関わる。まず、実現しにくい事態とは、事態自体の実現が難しい、或いはその事態の実現に抵抗があると話者が思っていることをいい、それぞれから派生した主観的評価は微妙に異なっている。次の例は「一ヶ月で」「3.5 キロ」という文的要素によって＜終了限界の達成＞というアスペクト的意味に読み取れる一方、**＜解決＞**という主観的評価も伺える。

(26) 一ヶ月で3.5キロおとしてしまいました。食事制限で落としました。このままでは、リバウンドしそうなので安全なダイエットにしたいと思います。

(Yahoo!知恵袋)

なぜ、＜解決＞という主観的評価が現れたのだろうか。「3.5キロをおとす」という事態は、「ダイエット」という文脈に置かれているので、事態の実現が難しいという話者の持つ前提があると考えられる。事態が実現しにくいと話者が思っているが、「テシマウ」形式により、あえてその事態を実現させようと言う意味が表されている。これで、＜解決＞という主観的評価が現れたのだといえよう。一方、次の例はアスペクト的意味より＜思い切って＞という主観的評価を表している。

(27) メールで告白するのはよくないかなとも思ったんですが、なんか直接言う勇気がなくてメールを送ってしまいました。 (教えて！goo)

(28) (前略) 最近、家のお金が厳しい状況で・・・七五三、入園、などの費用を子供貯金から出してしまおうか、家ので頑張ろうか迷います。

(Yahoo!知恵袋)

「メールを送る」、「費用を子供貯金から出す」という事態の実現は、話者にとって迷いや抵抗があることが伺える。これらのことをあえて実現させるということから、＜思い切って＞という主観的評価が現れたのであろう。

次に、「テシマウ」形式は、＜気楽＞という主観的評価を表すこともある。

(29) 楠：「(前略) 喫茶店で上映する時に、出演者も客のように店にも来てくれるし、そういう気楽さがこのメディアのよさなのかなあと思ったりしています。それに上映の用意も簡単にできてしまう。」

(楠　かつのり・中島　崇・谷川　俊太郎『ビデオ作家の視点』)

(30) ネパールには、加熱設備や循環器のような高度なものは存在しないのだ。その中でも歩かずとも簡単に行けてしまう”絶景露天風呂”がある。

（http://blog.livedoor.jp/gompagompagompa/archives/1765531.html）

（31）最近、話題のウユニ塩湖は、1 人 25 万円程度の予算で行けてしまう。安くはないけど、頑張ればなんとかなりそうじゃない？

（http://www.kakujinblog.com/cenote-trip/）

では、＜気楽＞という主観的評価がどのように派生したのであろうか。文脈から「上映の用意が簡単にできる」、「（絶景露天風呂に）簡単に行ける」、「１人２５万円程度の予算で行ける」という事態は、その実現に費やした力やお金などはある程度に達すれば実現できることを表している。すなわち、話者にとって実現しやすい事態である。「テシマウ」形式にある完了性・実現性によって、実現しやすい事態がすぐに実現する意味が添えられるところから、＜気楽＞という主観的評価が現れるのであろう。

### ６．３．２．２　事態実現のコントロール性と主観的評価の派生

次に、事態実現のコントロール性と主観的評価との関連性を見ていきたい。「テシマウ」形式の表す非意志的用法は、ここでは（ｉ）自然にある行為を行う（自発）、（ii）話者の意志に違反してある行為が行われる（反意志）、（iii）話者以外の人の行為や事態などが行われる（その他）に分けることができる。

まず、（ｉ）は＜自発＞に近い非意志的用法である。この非意志的意味は、「テシマウ」形式にある**完了性・実現性**より、ある意志的行為を行う前に完了・実現する意味が含まれるため、話者の意志を超えて行われるという意味が生じてくるのであろう。当該行為の実現は、望ましくない或いは不都合だと思われていなければ、特に主観的評価が感じられない。次の例は、行為が不意に行われるという意味を表す「思わず」、「勝手に」、「つい」などの文的要素によって、意志的行為「買う」、生理的・心理的な活動「笑う」、「緊張する」が非意志に行われるという意味がはっきりとしている。

#### ｉ－１動作主体がある行為を行おうとしていないのに自然にそうしてしまう

（32）今朝スーパーに行ったら、やきそば（蒸し）が１９円のと５０円のとがありました。前者はエースで、後者は大徳食品の製品です。グラムは前者の方が

２０グラム多い１５０グラムだったのに値段がこんなに違うのはなぜなのでしょうか？スーパーの方針みたいなものですか？思わず１９円のを買ってしまったのですが、何の差が値段の差になるのですか？

（Yahoo!知恵袋）

ｉ－２生理的・心理的活動が自然に起きてしまう

（33）皆さんのお子さんの、意外な突拍子もない言葉はなんですか？思わず笑ってしまったことって結構ありませんか？　（Yahoo!知恵袋）

（34）（前略）

菅野さんといえば、芸人さん顔負けの底なしの明るさとノリの良さを持っているイメージでしたが、献身的に夫を支える姿勢に素敵な女性であることを再認識してしまいますよね。　（http://cadot.jp/topics/25628.html/3）

（35）昔の暴力は離婚したい原因の理由になりますか？と書いたものですえっと、暴力（３年くらい）、束縛、監視されてるような生活を１０年続けて限界になってきました。改めると言っていますが一緒にいるともう体が勝手に緊張してしまうんです。これくらいで（原文まま）離婚は甘いでしょうか？

（Yahoo!知恵袋）

例（32）は、話者である動作主体が「19 円の（やきそば）を買う」という行為を行おうとしていないが、それを自動的に行ってしまい、いわゆる＜自発＞を表している。（33）～（35）も同じように、「笑う」、「再認識する」、「緊張する」は自動的に行われてしまう意味を表している。以上は文脈から望ましくない、不都合などという話者の前提が伺えないため、特に主観的評価が感じられない。

次に、ある行為や生理的・心理的活動の生起は、思わず行われるのではなく、話者の意志に反して行われてしまう場合もある。すなわち、非意志ではなく反意志である。次の例は、文脈により、話者がある行為や心理的・生理的活動の生起を抑えようとすることが示されている。

ⅱ－１動作主体がある行為を行わないようにしていても行ってしまう

（36）一生懸命考えた回答をあっさり削除されたときはやめていましたが質問を見ていてついに（原文ママ）また回答してしまいました。

（Yahoo!知恵袋）

（37）ついお金を無駄使いしてしまいます。皆さんにとってお金を上手に使えたなーと思うのはどういう時ですか？お金を上手に使う方法を教えて下さい。

（Yahoo!知恵袋）

ⅱ－２生理的・心理的活動の持主がその生起が抑えきれずに起きてしまう

（38）（悲しい時ってどうしますか？）

泣きます…でも男だから泣かない！と思っても泣いてしまいます。

（Yahoo!知恵袋）

（39）フランス産のカマンベールチーズを食べてあまりのカビ臭さ（味も）に思わず吐き出してしまいました。（Yahoo!知恵袋）

「回答する」（例（36））、「お金を無駄遣いする」（例（37））、「泣く」（例（38））、「（チーズを）吐き出す」（例（39））という事態の実現は、動作主体である話者がその実現を抑えようとしていることが伺える。しかし、「テシマウ」形式は、事態が必ず実現する意味を表すので、事態の実現を抑えようとしても抑えきれずに起きてしまうことを意味する。そもそも、話者が意志的にある行為を行わないようにする場合は、その行為が話者にとって望ましくないので、避けたいものである。それでも、意志に反して実現するところから、＜残念＞、＜がっかり＞、＜どうしようもない＞といった主観的評価が添えられやすいのであろう。

さらに、他の人が行なう行為やある事態の発生が話者の意志と関わりなく実現する場合、その実現は話者の制御外にあり、話者の意志とは直接関わっていない。次の例は、「小犬がカエルを食べる」（例（40））、「熱が出る」（例（41））、「ＰＣがフリーズする」（例（42））という事態の実現に対する、＜もう取り返しのつかない＞、＜どうしようもない＞といった主観的評価が伺えるものである。

ⅲ話者以外の人や生物がある行為を行う、或いはある事態の発生（その他）

（40） 子犬が干からびたカエルを食べてしまいました。取り上げようとしたら既に飲み込んでしまいました。干からびたカエルでも毒はありますか？病院に電話したら数日観察して下さいと言われました。数時間観察して泡など吹かなければ大丈夫でしょうか？ （Yahoo!知恵袋）

（41） 妊娠中なのですが、風邪をひいて熱がでてしまいました、薬を飲むことができないので何かほかに治す方法はありませんか？ （Yahoo!知恵袋）

（42） dvd shrink 3.1.4 で dvd をエンコード中に　パソコンがフリーズしてしまいます　原因として考えられる事はなんでしょう？（エラーメッセージ等は出ません） （Yahoo!知恵袋）

そもそも、これらの事態は、話者にとって望ましくないものであるが、その実現は自分の意志で制御できない。「テシマウ」形式でその望ましくない事態が必ず実現するというところから、＜もう取り返しのつかない＞、＜どうしようもない＞といった主観的評価が現れたのであろう。ここから、主観的評価がはっきりと現れるのは、事態が話者の意志に反して実現する場合、或いは話者の意志と直接に関わらないが、その事態の実現が望ましくない場合であることが分かる。一方、反意志や事態の実現が望ましくないという文脈がなければ、単に非意志的な実現に解釈され、主観的評価ははっきりと現れていない。

続いて、事態の実現がコントロールできる例を見ていく。次の例からは、話者の意志的行為を表していて、＜解決＞、＜思いっきり＞といった主観的評価が伺える。

（43）「大事な大事なわたしの卵をわたすことはできない。」と、きっぱり断りました。狐は怒って、「そんなら、おまえも卵も食べてしまうぞ。」

（阿見の昔ばなし 01－権現山のハト）

（44）しかし、この楽しい最中に親から用事を頼まれてしまったので、ここで中断です。そこで私は「よーし、明日は屋根裏部屋へこの本を持ち込んで全部読んでしまうぞ。あそこなら誰からも邪魔されないもの」と呟きました。

（http://www.ienohikari.net/bunka/dokusho/winner/detail/000374.php）

（45）「ポストにわけていれなくてもいいですよ。１け１けんわたしがくばってしまいましょう。」

（武鹿悦子・末崎茂樹　『くすのきだんちはゆきのなか』）

なぜ、＜解決＞、＜思いっきり＞といった主観的評価が現れたのであろうか。「おまえも卵も食べる」、「本を読む」、「（手紙を）くばる」という事態は、話者の意志的行為であり、そして文脈からこれらの事態は話者にとって望ましいことが分かる。「テシマウ」形式にある完了性・実現性によって当該行為や出来事をすぐに成し遂げるという意味が含まれているので、＜解決＞、＜思い切って＞といった主観的評価が派生するのであろう。

### ６．３．２．３　話者の期待と主観的評価の派生

本節では、話者がある行為・出来事の実現が望ましいと思っているか、望ましくないと思っているかということを、話者の期待と呼ぶ。4.3.2 と 4.3.3 で論じたように、「テシマウ」形式にある完了性・実現性が、話者の持つ前提的な期待値を表出させている。これらの主観的評価は大まかに正の主観的評価と負の主観的評価に分けることができる。話者にとって望ましくない事態の実現は負の主観的評価と結びつきやすい。

（46）ヤフーオークションで出品し、お取引を喜んで戴いてますが、半年以上前に終わった一件で、落札者「評価」に「大変良い」と入れるのを反対の「大変悪い」と、間違ってクリックし入れてしまいました、今落札者から指摘され大慌てしていますが「評価」の訂正が出来ないものでしょうか？相手様の人格にもかかわる！ことで、是非修正したいのですが・・・・・。

（Yahoo!知恵袋）

（46’）（前略）と、間違ってクリックし入れました、今落札者から（後略）

例（46）の文脈から話者が自分のしたこと「間違えてクリックして（大変悪い）と入

れる」を望ましくないこととして捉えているのが分かる。望ましくない事態が実現し、「テシマウ」形式にある完了性・実現性で取り返しのつかないという意味を含意させる。ここから、＜残念＞、＜失敗＞といった主観的評価が派生したのであろう。

一方、望ましい事態の実現であれば、「テシマウ」形式は正の感情評価と結びつきやすい。次の例は、最終的結果として「（母がシルバーヴィラに）くる」という事態の実現に、長い間お母さんの介護から解放されてほっとするという主観的評価が添えられている。

（47）長年一緒に暮らしていた息子でさえ、この選択が母親の私にとってのっぴきならないものだったとは気がついていないのだ。皆が私の気まぐれに振り回されている、と感じているらしかった。思わず吐息が出た。日常に介護を抱えて心理的に拘束されて暮らすことが、どれほど葛藤に満ちたものなのか。一日たりとも安らぐことがない。それは、仕事の大変さとは異質のもので、日々、自分の他者への誠実さや優しさや忍耐力が問われ続ける。（中略）ヘルパーさんたちが部屋を出ていくと、私は、母のベッドの横の椅子にしばし気の抜けたように座り込んだ。とうとう来てしまった、ここに。そう思うと胸に迫るものがあった。これからは、母の日々の介護のことを心配せずに、自分のペースで動けるのだ。それがにわかには信じられなかった、これまでは父と二人、ほとんど誰かに介護を助けられたこともなかったから、他人が手を貸し一緒に支えてくれる、それがどういうことなのかまったく実感できなかった。

（久田　恵『母のいる場所：シルバーヴィラ向山物語』）

（47’）（前略）とうとう来た、ここに。

例（47）の文脈から「両親をシルバーヴィラへ送る」という事態に対して話者の中での激しい葛藤が見られる。その事態が実現しにくいというより、迷いに迷う中で事態の実現に辿り着くという思いがある。事態の実現に対する話者の期待から見れば、どちらかといえば、その事態の実現は話者にとって望ましいことである。望ましい事態の実現

に迷いがあったが、それが実現したおかげで介護から解放されるという安堵感が添えられている。これにより、どのような主観的評価が派生するのかは、話者の持つ前提（文脈）と関わっていることがあらためて確認された。そして、＜残念＞、＜失敗＞といった負の主観的評価であろうが、安堵感といった正の主観的評価であろうが、「スル」形式に入れ替えると、主観的評価が消えるのは、「テシマウ」形式にある完了性・実現性が主観的評価の派生の駆動力であることを示している。さらに、「テシマウ」形式は話者の負の主観的評価ばかりと結びつくのではなく、話者の持つ前提（文脈）によって正の主観的評価が派生することもあることを示している。

### ６．３．２．４　話者の予想と主観的評価の派生

「テシマウ」形式の意味・用法には、予想外という用法があると記述されている。鈴木（1998）では、事態の実現が予想されていない場合、＜驚き＞という主観的評価が現れると述べられている。

（48）埼玉県にある寺の住職は、「檀家なのに菩提寺に相談せず、こっそりと葬儀を挙げてしまう人が出てきた」と驚きを隠さない。　（朝日新聞）

（49）スルリと水の流れに体を預ける感覚を味わううちに、気付けば 25m 泳げていました。30 年間泳げなかったのに. . . 1 時間で泳げてしまった！

（http://crawlde25.jp/concept/story3.html）

（50）彼は「実はユネスコの試験を受けてみたら受かってしまった。学年の途中であるし、どうしたものか」と私に相談してきたのです。

（辻野　功『イギリスホームステイのすすめ』）

（51）なんと、ほぼ日刊イトイ新聞さんに、ナショナルジオグラフィックが取材されてしまいました！　（ナショナルジオグラフィック日本版）

（48）～（51）は、「こっそりと葬儀を挙げる」、「泳げる」、「（ユネスコの試験に）受かる」、「取材される」という事態の実現は、予想されていなかったことを示している。予想されていない事態が実現することに対する＜驚き＞という主観的評価は、「テシマ

ウ」形式の代わりに「スル」形式に置き換えると感じられなくなる。これは、主観的評価の派生は、予想外という前提のほかに「テシマウ」形式にある完了性・実現性が大きく関わることを示している。

一方、ある事態の実現が予想されている場合は、「テシマウ」形式が使われないと考えられているが（鈴木 1998）、実際に使われた例がある。

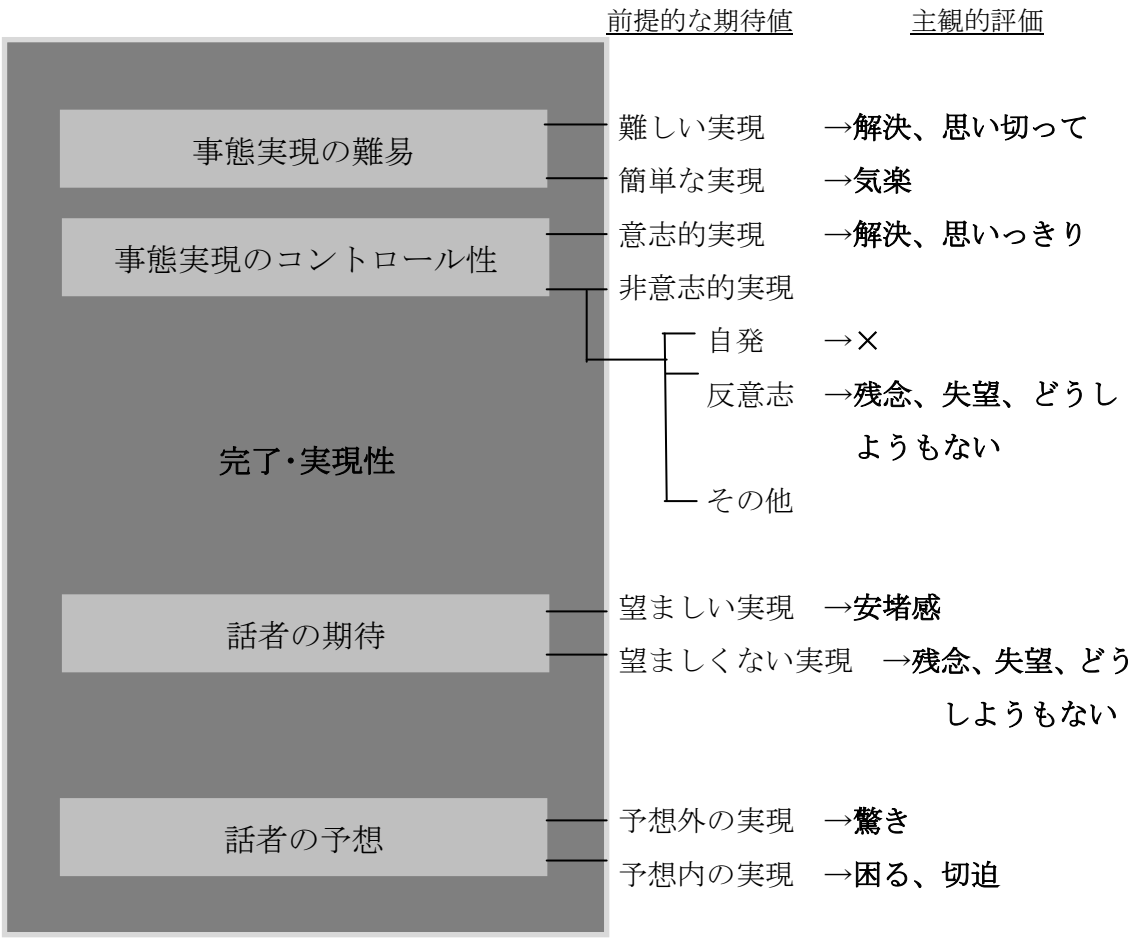
（52）実際に話を聞いてみると、あるいは見てみると、当時建設省が言っていた話とは全く異なって、私が見た限りでは、もうアユはこのくらい、十センチ未満にしか育っていなかったし、河口堰ができたことによってよどみができてしまって、やはり生態系を破壊してしまったのだと思うのですけれども、大きなサクラマスがもうとれなくなってしまった。（国会議事録）

例（52）の文脈には「（開発が）生態系を破壊する」という事態の実現が予想されていて、そして既に実現していることが示されている。その事態の実現が予想されている場合、話者にとって心の準備ができているため、＜驚き＞という主観的評価が生じるはずがない。通常、予想されているのは、話者にとって実現してほしくない事態であり（「（開発が）生態系を破壊する」）、予想通りに実現すれば、「テシマウ」形式が持つ完了・実現性によって＜もう取り返しのつかない＞といった主観的評価を派生させる。次の例は、「電車に乗り遅れる」という事態がまだ実現していないが、ある行動をしなければその事態が間違いなく実現すると予想されている。そして、＜困る＞や＜切迫＞などの主観的評価が現れる。

（53）（ぐずぐずしている子に）早くしないと、９時発の電車に乗り遅れてしまうわよ。

いずれも話者にとって実現してほしくない事態であり、「テシマウ」形式の表す＜限界達成の強調＞によって、その事態が間近に実現するというところから、＜困る＞、＜切迫＞など主観的評価が生じる余地が現れたのであろう。

以上の検討を踏まえて、「テシマウ」形式の使われた表現に見られた主観的評価の派生の仕組みは次のようにまとめることができる。




【図 6　主観的評価の派生仕組み】

濃い灰色は、「テシマウ」形式にある**完了・実現性**を、薄い灰色は、主観的評価の派生要因を表している。これは、主観的評価への派生は、単純に完了･実現性に帰するか、或いは事態に対する話者の評価に帰するかという二者択一の問題ではなく、両方ともと関わることを示している。「テシマウ」形式にある完了・実現性は、主観的評価が引き起こされる土台であり、事態に対する話者の持つ前提的な期待値によって様々な主観的評価が派生してくるのである。

ところで、梁井（2009）では、通時的観点から、「テシマウ」形式の機能は、文法的意味から話者の感情評価的意味へ拡張した、すなわち主観化のプロセスを経て、感情評

価的意味が当該形式に書き込まれるようになったと考えられている。果たして感情評価的意味は「テシマウ」形式にエンコードされているのであろうか。これまでの考察から分かったように、「テシマウ」形式で表される様々な主観的評価は、事態に対する話者の評価がその土台である完了・実現性によって表出されうる。この完了・実現性は、金水（2000）で示されている前景化した限界の達成（限界達成の強調）ということであり、特に事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されなければ、時間的側面が前景化されるのに対し、事態に対する話者の持つ前提的な期待値が示されれば、主観的評価が前景化される（例（54）～（57）が示しているように小説や絵本などにおける地の文に現れる「テシマウ」形式は、時間的側面が前景化される場合が多いことが観察される）。

（54）すっかり寝入ってしまった大和をワゴン車に乗せて、家族も乗り込んだ。野々宮家が斎木家を見送る形になった。

（是枝　裕和・佐野　晶『そして父になる』）

（55）五階にたどり着いてしまうと、みどりは逃げ出したくなった。

（是枝　裕和・佐野　晶『そして父になる』）

（56）ゆかりが手を上げると、琉晴はネズミのようにすばしこく逃げてしまった。

（是枝　裕和・佐野　晶『そして父になる』）

（57）慶多の手の温もりが心の中の陰鬱を少し軽くしてくれている。だが、それがどこかに消えていってしまうことはない。

（是枝　裕和・佐野　晶『そして父になる』）

このように、「テシマウ」形式は、アスペクト的意味を表す形式であるが、純粋にアスペクト意味を表す形式だとは言えない。主観的評価を表すが、純粋に話者の感情評価を表すモダリティ形式であるとも言いがたい。3 章で検討したように、＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞を表す形式で、時間的側面が前景化される場合もあれば、主観的評価が前景化される場合もあるので、主観的アスペクト形式として位置づけることができよう。

### ６．３．３　文法化に見られる意味の主観化

以上の考察から、「テシマウ」形式は話者の持つ前提的な期待値とよく結びついて用いられるため、主観的評価が付け加わるようになること、また、その前提的な期待値を表出させる役割を果たすのは、当該形式にある完了・実現性であることも明らかにした。「テシマウ」形式の意味の主観化プロセスについては、当該形式にある完了・実現性が様々な話者の前提的な期待値と合わせて用いられることによって様々な主観的評価が付け加えられるようになると考えられる。一方で、失望などといった意味は、仕舞われたものが容易に取り出せないという動詞「しまう」の語彙的意味にある含意から生じるとも考えられている（Ono 1992）。仕舞われたものが容易に取り出せないという含意は、＜到着点＞に焦点が当てられているところに由来すると思われるので、限界達成という文法的意味の獲得であろうが、主観的評価の獲得であろうが、動詞「しまう」の語彙的意味焦点が当てられている＜到着点＞に帰してよいと考えられよう。つまり、様々な話者の前提的な期待値と合わせて用いられることによって、「テシマウ」形式に主観的評価が付け加えられるようになっているが、その完了・実現性が主観的評価の根源であることは確実である。「テシマウ」形式の主観化プロセスは、Traugott（1989）、Traugott & Köning（1991）で指摘している意味変化の傾向に合致すると思われる。「テシマウ」形式は、実際のコミュニケーションの中で、それが持つ完了・実現性が繰り返し話者の持つ前提的な期待値と合わせて用いられることによって、事態に対する話者の主観的な信条や態度を中心に表すようになった。これは、意味的−語用論的傾向Ⅲとして見なすことができ、「テシマウ」形式の表す意味が主観化の方向へ進んだことを示している。

## ６．４　おわりに

本章の考察を通して、次の２点を明らかにした。

まず、「テシマウ」形式は、具体的意味＜移動＞から抽象的意味＜完了＞への抽象化プロセスを経たことが確認された。具体的意味における＜到着点＞重視の意味的特徴が受け継がれていて、そのまま＜時間＞に写像された＜達成点＞解釈が拡大するにつれ、＜達成点＞が事態の＜終わり＞である＜完了＞、＜達成点＞が事態の部分的＜終わり＞

部分的＜完了＞、＜達成点＞が事態の＜始まり＞である＜開始＞、＜達成点＞が事態の漠然とした＜開始＞である＜実現＞という順で文法的機能が拡大されていることを明らかにした。この中で、部分的＜完了＞の解釈は、事態の＜始まり＞としても解釈できることから、事態の＜開始＞を表すために用いられるようになっており、メトニミー的に動機付けられていると考えられる。＜開始＞の解釈からさらに拡張され、漠然とした＜始まり＞を表すために用いられるようになり、＜実現＞の解釈が獲得された。＜達成点＞に焦点が当てられているところが受け継がれている**完了・実現性**は、主観的評価の派生の土台となり、事態に対する話者の持つ前提的な期待値を表出させる役割を果たすことを明らかにした。

次に、「テシマウ」形式は、＜残念＞や＜失望＞などといった負の評価のみではなく、比較的ニュートラルな評価や正の評価を含めた主観的評価が書き込まれた形式として捉えたほうが適切であることを明らかにした。表出された主観的評価の性質や程度は、事態に対する話者の持つ前提的な期待値によって異なってくる。このように、「テシマウ」形式は、話者の持つ前提的な期待値と結びついて表現される性質を持つため、典型的アスペクト形式とも、典型的モダリティ形式とも言えないが、主観的アスペクト形式として位置づけることができよう。

# 第７章　終章

本論文を通し、以下のように「テシマウ」形式の特徴を明らかにした。

第一に、記述の側面においては、「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞に基づいて体系的な記述を試みた。アスペクト的意味については、動詞の限界性を考察した上で、共起する文的要素を含める前接事態の時間的性質により、＜終了限界の達成＞、＜開始限界の達成＞、＜限界達成＞それぞれに読み取れる条件を明らかにした。また、主観的評価については、話者の持つ様々な前提的な期待値と合わせて負の主観的評価、正の主観的評価、ニュートラル（時間的側面に焦点）と記述した。主観的評価の派生は、話者の持つ前提的な期待値の反映だとはいえ、「テシマウ」形式の＜限界達成の強調＞という意味がなければ、それが浮き上がらないため、主観的評価は＜限界達成の強調＞に根差して話者の持つ前提的な期待値と結びついて派生するのである。また、特定された前提（鈴木 1998）というより、実現する事態に何らかの主観的評価が付け加えられると規定した方が適切であることを明らかにした。どのような主観的評価が付け加えられるかは、話者の前提的な期待値によるのである。特に前提的な期待値がなければ、時間的側面が前景化される。このように、「テシマウ」形式は主観的アスペクト形式として位置づけることができよう。

また、アスペクトの側面においては、事態の時間的性質の決まり方は、動詞の意味のほかに共起する文的要素（副詞・副詞的成分、主語、目的語など）といった言語内的要因によって決まると先行研究では考えられていたが、実際には話者の解釈や百科事典的知識などといった言語外的要因にも影響されることを明らかにした。また、日本語動詞における運動動詞は大まかに＜動作・変化＞、＜思考・感情＞によって分類されているが、＜動作・変化＞は限界性が強いのに対し、＜思考・感情＞は限界性が弱いと考えられているので、従来アスペクトを論ずる際に論から除外されてきた。「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味を記述することを機に perfective verb の限界性を再考した。そ

の結果、従来、限界動詞と非限界動詞とに分けられていたが、2つのカテゴリーでは、それぞれ典型的な事例とその典型的な事例から離れた事例が共に存在することが観察された。非限界動詞は、限界のあり方によって、さらに「食べる」、「歩く」、「走る」などのような運動の達成点が部分的＜終わり＞である典型的タイプ、「笑う」、「泣く」、「疲れる」のような運動の達成点が＜始まり＞である開始点重視タイプ、「暮らす」、「営む」、「住む」のような運動の達成点が漠然とした＜始まり＞である状態重視タイプに分けられることを明らかにした。perfective verb のアスペクトを明らかにしたことで、「テシマウ」形式の表すアスペクト的意味を明確にすることが可能であろう。

第二に、他のアスペクト形式との比較の側面においては、「ーオワル・オエル」形式、「テシマウ」形式、「スル」形式は、広義的な＜完了＞を意味する場合、同じ＜終わり＞がプロファイルされているが、ベースのあり方の違いが認識されることを明らかにした。「ーオワル・オエル」形式の表す＜完了＞は終了限界がプロファイルされているが、開始限界と過程がベースとなるため、時間的幅のある事態において理解せねばならない。「テシマウ」形式の表す＜完了＞は終了限界がプロファイルされているが、ベースとなる開始限界と過程がさらに背景化されるため、一般的に終了限界が強調されると理解される。「スル」形式の表す＜完了＞は、終了限界、開始限界ともにプロファイルされているが、ベースとなる過程がさらに背景化されるため、終了限界の強調として理解されなければ、時間的幅のある事態において理解される必要もない。また、時間的幅や終結点などといった事態の時間的性質は、決まったものではなく、実際に我々がその場で事態に対する解釈とも関り合うこと、すなわち言語形式の表す意味には、客観的部分のほかに、主観的解釈も含まれていることがあらためて確認できた。

第三に、意味変変化の側面においては、「テシマウ」形式は、Traugott and König（1991）で示している主観化への方向に沿い、変化していることを明らかにした。「テシマウ」形式の表す時間的側面（前景化した限界達成の意味）に関しては、動詞「しまう」の＜到着点＞・＜達成点＞焦点という語彙的意味が受け継がれていることを明らかにした。＜収納＞を意味する動詞「しまう」は、空間的意味において移動の＜到着点＞に焦点が当てられているものがそのまま時間的に写像され、運動の＜達成点＞に焦点が当てられている。最初は「テシマウ」形式における＜達成点＞が運動の＜終わり＞に相当してい

たが、次第に運動の部分的＜終わり＞に拡大されて解釈されるようになり、＜開始＞という意味が獲得された。＜開始＞の獲得を機に、運動の＜達成点＞がさらに運動の＜始まり＞に拡大されて解釈されるようになり、さらに漠然とした＜始まり＞に拡大されて解釈されるようになった。＜達成点＞解釈の拡大は、＜完了＞から＜実現＞へ（すなわち運動の達成点が＜終わり＞から漠然とした＜始まり＞へ)、すなわち「テシマウ」形式の意味・用法の獲得と拡張のプロセスとして考えられる。一方で、主観的評価の側面に関しては、様々な感情評価に＜到着点＞・＜達成点＞焦点という語彙的意味が受け継がれていること、そして＜到着点＞・＜達成点＞焦点という意味により、当該形式が様々な話者の持つ前提的な期待値と結びつきやすい性質を持つようになったことも明らかにした。「テシマウ」形式の表す主観的評価の性質に関しては、運動の＜達成点＞が＜終わり＞に相当するとき、運動或いは事態が完了したことに用いられると、もう取り返しがつかないという意味が含まれるため、＜残念＞、＜失望＞などといった負の感情評価が先に現れたと考えられる。＜達成点＞解釈が拡大するにつれ、すなわち運動や事態が達成されたがまだ終わっていないというところから、もう取り返しがつかないという含意も弱くなっていると捉えられることで、負の感情評価が＜達成点＞解釈の拡大と連動していることも考えられる。このように、「テシマウ」形式の持つ様々な意味・用法は、アスペクト的意味であろうが、主観的評価であろうが、動詞「しまう」の語彙的意味＜到達点＞・＜達成点＞焦点に根ざしており、＜達成点＞解釈の拡大、＜話者の持つ前提的な期待値＞解釈の拡大として見ることができよう。

今後の展望としては、次の 2 点が挙げられる。

まず、日本語教育においては、「テシマウ」形式の意味・用法の体系的記述が期待される。「テシマウ」形式の意味・用法に関しては、ほとんどの場合＜完了＞というアスペクト的意味と＜残念＞という話者の感情評価しか挙げられていない。本考察で明らかにした文脈的条件に基づき、＜完了＞に読み取れないアスペクト的意味、そして＜残念＞に読み取れない様々な感情評価の派生の体系的な記述への応用が期待される。

また、本研究では、日本語における perfective verb は、従来の語彙的意味の終了限界内在の有無による分類に基づき、運動の限界性の違いによってさらに分類を試みた。「スル」形式であろうが、「テシマウ」形式であろうが、表されるアスペクト的意味は、

perfective verb それぞれ持っている限界性の特徴と関わっている。このような分類がどのように日本語のアスペクト体系に適応するかについては、更なる考察と精緻化が今後の課題となる。また、日本語において類義語或いは類義表現として扱われているものを、意味的な連続性から捉えるという点も挙げられる。本研究を通し、「スル」形式、「テシマウ」形式、「ーオワル・オエル」形式が、＜完了＞に読み取れる場合、同じ終了限界がプロファイルされているが、ベースのあり方の違いが認識されることを明らかにした。アスペクト形式において、＜継続＞を表す「テイル」形式、「テイルトコロダ」形式、「ーツヅケル」形式、そして、＜開始＞を表す「スル」形式、「ーダス」形式、「ーハジメル」形式、＜完了＞を表す「タ」形式、「タトコロダ」形式、「タバカリダ」形式など時間関係を表す類義表現に関しても、本研究で行なったのと同様に意味的な連続性から捉えることが可能であろう。

最後に、本論文を通して、「仕舞う」という語彙的項目は、事態のアスペクトの描写に転用されるようになっており、またそれが話者の持つ前提的な期待値の含まれた文脈においてよく用いられるため、主観的評価が「テシマウ」形式の表す意味の一部として定着していることが明らかになった。故に、「テシマウ」形式が Traugott and König（1991）で提示されている意味変化の方向性における主観化への方向に沿って変化しているので、意味の主観化の実証研究として本研究を位置づけることができる。本研究で明らかにしたように、意味が主観化へ発展する要因は、話者の持つ前提的な期待値のほかに、言語形式自体の持つ意味とも関わっている。一方で、主観的評価の派生が動詞「しまう」の語彙的意味に由来するとも考えられる。本稿で言及している「テシマウ」形式の意味＜主観的評価が付け加えられた限界達成＞という意味は、＜取り返しのつかない形で事態が終了する＞から拡張してきた可能性も考えられるため、語彙由来のプロセスの考察は、今後の考察課題として挙げられる。

また、「テシマウ」形式に関する従来の記述は、意味・用法が羅列的に取り上げられているのが特徴であるが、今回の考察を通し、意味・用法を体系的に記述することができた。これは、言語というものには、体系性があることを示している。いわゆる意味の獲得は、人間が外部世界との相互作用を通して得られた経験が一般化されて、その一般化されたイメージスキーマに基づいて、類似性や隣接性を見出す認知能力によって拡大

解釈と縮小解釈が行なわれることである。それ故、人間によって創造された言語という記号に付与された意味は、ランダム的に付与されたのではなく、経験的基盤に基づいて獲得されてきたのである。これは、語彙であろうが、文法であろうが、言語記号に見られる意味は、そうしたプロセスを経て獲得されている、或いは変化しているのだと言えること、また形式ごとの根本的な違いもその経験的基盤の違いにあることを示している。この経験的基盤による意味の獲得や変化は、なぜある形式の持つ意味は主観的なものへ変化するが、他の形式の持つ意味は主観的なものへ変化しないかの説明になろう。諸言語を含め、主観化の方向に沿って変化している言語形式の経験的基盤に関する考察も今後の考察課題として挙げられる。

## 参考文献


秋元実治（2002）『文法化とイディオム化』．東京：ひつじ書房.

池上嘉彦（2003）「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標（1）」．『認知言語学論考 3』．東京：ひつじ書房．1-49.

池上嘉彦（2004）「言語における＜主観性＞と＜主観性＞の言語的指標（2）」．『認知言語学論考 4』．東京：ひつじ書房．1-60.

出口雅也（2003）「認知音韻・形態論とコネクショニズム」．吉村公宏（編）『認知音韻・形態論』．東京：大修館書店．155-193.

井上　優（2001）「現代日本語の「た」―主文末の「･･･タ」の意味について―」．つくば言語文化フォーラム（編）『「た」の言語学』．東京：ひつじ書房．97-163.

今井晴彦・石川慎一郎（2006）「縮約がもたらす構文の意味的・機能的変化―言語コーパスに基づく there is ／ there’s 構文の研究―」．『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』3: 15-36.

上原　聡・熊代文子（2007）『音韻・形態のメカニズム』．東京：研究社.

大場美穂子（1999）「日本語の補助動詞「しまう」の意味と用法」．『日本語学会第 118 回大会予稿集』．17-22.

大堀寿夫（2002）『認知言語学』．東京：東京大学出版会.

大堀寿夫（2005）「日本語の文法化研究にあたってー概論と理論的課題」．『日本語の研究』1(3): 1-16.

梶原秀夫（2007）「アスペクト：「た」と「てしまう」に焦点を当てて」．『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』7: 71-91.

金水　敏（2000）「時の表現」．金水敏・工藤真由美・沼田善子（著）『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』．東京：岩波書店．3-92.

金水　敏（2004）「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」．影山太郎・岸本秀樹（編）（2004）『柴谷方良教授還暦記念論文集日本語の分析と言語類型』．東京：くろしお出版．47-56.

金田一春彦（1947）「国語動詞の一分類」．金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』．東京：むぎ書房．5-26.

金田一春彦（1955）「日本語動詞のテンスとアスペクト」．金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』．東京：むぎ書房．4-12.

金田一春彦（1976）『日本語動詞のアスペクト』．東京：むぎ書房.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』．東京：ひつじ書房.

倉持保男（2002）「補助動詞「（～テ）シマウ」について」．山田進等（編）『日本語意味と文法の風景』．東京：ひつじ書房．289-300.

近藤裕子（2000）「「～テシマウ」の意味・用法に関する一考察」.『国文学試論』14: 240-243.

近藤優美子（2016）「テシマッタの使用制約－なぜ「目的地に到着してしまいました」とカーナビは言わないのかー」.『日本語教育』164: 50-63.

杉本　武（1991）「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」.『九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学篇）』4: 109-126.

杉本　武（1992）「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ（2）」.『九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学篇）』5: 61-73.

鈴木智美（1998）「「～てしまう」の意味」.『日本語教育』97: 48-59.

鈴木英夫（1970）「過去と完了―『―た』と『―てしまう』を中心としてー」.『月刊文法』3(2): 61-69.

須田義治（2007）「現代日本語のアスペクト研究」.『日本語学』26(3): 13-21.

須田義治（2002）「現代日本語のアスペクチュアリティーの体系について」．日中対照言語学会（編）『日本語と中国語のアスペクト』．東京：白帝社．41-66.

高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」．金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』．東京：むぎ書房．115-153.

高橋太郎（2003）「第 7 章　アスペクト（その二）―アスペクト的なものの表現にかかわるいくつかの形式」.『動詞九章』．東京：ひつじ書房．197-218.

高見健一（1995）『機能的構文論による日英語比較―受け身文・後置文の分析―』．東京：くろしお出版.

田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』．東京：明治書院．641-660.

谷口一美（2005）「第 8 章　事態概念の拡張と構文の拡張」.『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』．東京：ひつじ書房．295-314.

田村敏弘（2013）「言語のアスペクト的性質を基盤とした話者の感情表出：日本語の補助動詞「てしまう」と英語の Get 受動文を例に」.『静岡大学教育研究』9: 1-9.

田村敏弘（2015）「補助動詞「（て）しまう」と感嘆詞「しまった」の意味分析と拡張メカニズムの考察」．山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎（編）（2015）『認知言語学論考 12』．東京：ひつじ書房．337-377.

張　又華（2011）「日本語アスペクトに関する認知言語学的研究―補助動詞の分析を中心に―」．京都大学修士学位論文.

張　又華（2012）「縮約表現と意味変化―日本語アスペクト形式「テシマウ」を例に―」．KLS 32: 181-193.

張　又華（2013）「本動詞「しまう」から補助動詞「～しまう」への拡張の動機付け―継起関係に基づく換喩の観点から―」．KLS 33: 133-144.
辻　幸夫（編）（2003）『認知言語学への招待』．東京：大修館書店．
坪井美樹（2005）「テ形接続形式と文法化」．『東京大学国語国文学会国語と国文学』82(11) : 13-25.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』．東京：くろしお出版．
仁田義雄（2009）『日本語の文法カテゴリをめぐって』．東京：ひつじ書房．
野村益寛（2007）「認知言語学から見た日本語アスペクト」．『日本語学』26: 6-12.
樋口万里子（2004）「相・時制・法」．大堀寿夫(編)『認知コミュニケーション論』．東京：大修館書店．55-99.
日野資成（2001）『形式語の研究―文法化の理論と応用―』．九州大学出版会．
姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』．東京：ひつじ書房
深田　智・仲本康一郎（2008）『概念化と意味の世界』．東京：研究社．
藤井由美（1992）「『してしまう』の意味」．『ことばの科学 5』．東京：むぎ書房．17-40.
星野和子（2000）「「しまう」から「てしまう」へ－用法と意味の変容」．『日本文学』93: 95-111.
森田良行（1984）『基礎の日本語 3』．東京：角川書店．131-138.
森山卓郎（1983）「動詞のアスペクチュアルな素性について」．『待兼山論叢. 文学編』17: 1-22.
森山卓郎（1984）「アスペクト的意味の決まり方」．『日本語学』3(12): 70-84.
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』．東京：明治書院．
守屋三千代（1994）「『シテシマウ』の記述に関する一考察」．『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』6: 49-70.
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』．東京：明治書院．
ジョン・R・テイラー・瀬戸賢一（2008）『認知文法のエッセンス』．東京：大修館書店．
早瀬尚子・堀田優子（2005）『認知文法の新展開―カテゴリー化と用法基盤モデル』．東京：研究社．
梁井久江（2003）「「―テシマウ」と「―チャウ」の相違」．『日本語教育学会春季大会予稿集』．67-72.
梁井久江（2009）「テシマウ相当形式の意味機能拡張」．『日本語の研究』5（1)：15-29.
山梨正明（1995）『認知文法論』．東京：ひつじ書房．
山梨正明（2000）『認知言語学原理』．東京：くろしお出版．
山梨正明（2004）『ことばの認知空間』．東京：開拓社．

山梨正明（2009）『認知構文論―文法のゲシュタルト性』．東京：大修館書店．
山梨正明（2012）『認知意味論研究』．東京：研究社．
吉川武時（1973）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」．金田一春彦（編）『日本語動詞のアスペクト』．東京：むぎ書房．157-307．

Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.

Comrie, Bernard (1976) *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems.* Cambridge: Cambridge University Press.

Heine, Bernd, Urike Claudi and Friederike Hünnemeyer (1991) *Grammaticalization*. Chicago: University of Chicago Press.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language* 56: 251-299.

Hopper, Paul and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.

Langacker, Ronald W. (1990a) "Settings, Participants, and Grammatical Relations." *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas L. Tsohatzidis, 213-238. London: Routledge.

Langacker, Ronald W. (1990b) "Subjectification." *Cognitive Linguistics*1: 5-38.

Langacker, Ronald W. (1999a) "Double-subject Constructions." *Linguistics in the Morning Calm*4, ed. by Bak, S.Y, 83-104. Hanshin.

Langacker, Ronald W. (1999b) *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. (2000) "A Dynamic Usage-Based Model." *Usage-based Models of Language*, ed. by Michael Barlow and Suzanne Kemmer, 1-63. Stanford: CSLI Publications.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. 〔山梨正明（監訳）（2011）『認知文法論序説』．東京：研究社．〕

Ono, Tsuyoshi (1992) "The Grammaticiztion of the Japanese Verb *Oku* and *Shimau*." *Cognitive Linguistics* 3(4): 367-390.

Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki (1992) "The Development of a Marker of Speaker's Attitude: The Pragmatic Use of the Japanese Grammaticized Verb *Shimau* in Conversation." *BLS*18: 204-213.

Rubin, Edgar (1958) “Figure and Ground.” *Readings in Perception*, ed. by David C. Beardslee and Michael Wertheimer, 194-203. Princeton. N.J.: D. van Nostrand.

Traugott, Elizabeth Closs (1989) “On the Rise of Epistemic Meanings in English.” *Language* 65(1): 31-55.

Traugott, Elizabeth Closs (1995) “Subjectification in Grammaticalization.” *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, ed. by Dieter Stein and Susan Wright, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth Closs (1999) “From Subjectification to Intersubjectification.” Paper presented at the Workshop on Historical Pragmatics, Fourteenth International Conference on Historical Linguistics, Vancouver, Canada.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König (1991) “The Semantic-Pragmatics of Grammaticalization Revisited.” *Approaches to Grammaticalization* Vol. 1, ed. by Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine, 189-218. Amsterdam: John Benjamins.

## 参考辞書・事典

辻幸夫（編）（2002）『認知言語学キーワード事典』．東京：研究社.